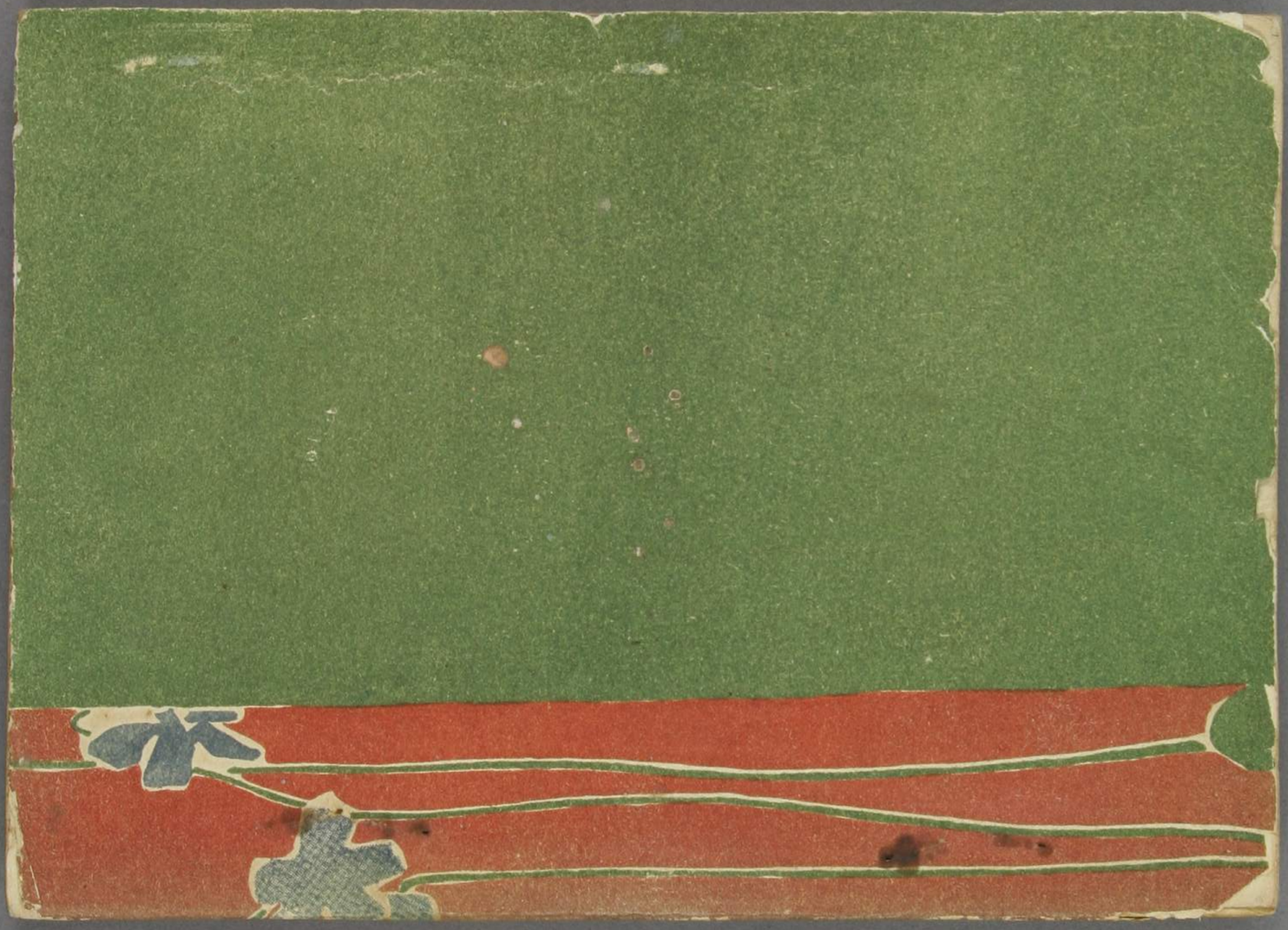
文學士大町桂月先生序

鹿島櫻巷先生著

作法詳解

新體詩獨習

東京 大學館發行



序

鹿島櫻巷、新體詩獨習を著はし、序を乞はむとて、余を來訪し、用談終りて曰く、君の家をたづねあつるに、非常に困却し、幾んど二三時もかゝりて、あちこち歩きまはり、終に一老農に逢ひて問ひしに、よく精しく路を敎へくれて、其の爲めに、毫も迷はずして、やすゝと君の家に達するを得たりと。余曰く、ひとり君のみならず、はじめて、余を來訪する者は、皆、非常に困却せざるはなし。余は、常に之を氣の毒に思ふ。然れども、これひとり余の家を訪ふ塲合にのみあることに非ず。人生の事、すべて然り。殊に文藝が最も甚しとなす。世に新體詩に志す者多けれども、路を知らず、迷ひ、うろつき、邪路に陷るなど、その困却は、君が今日路に迷ひしこと

の比に非ず。君が新體詩獨習は、今日君に路を敎へたる老農也。初學の士、その爲めに便宜を得ることなほ君が老農の爲めに便宜を得たるが如くなるべし。在來、二三種の新體詩作法を說きたる書あれども、眞に見るに足るべきものなし。君や、新體詩に於て、深く造詣する所あり。多謝す、君の著出でゝ、新體詩壇は、はじめて、正しく、忠實なる案內者を得たり。請ふ、此言を以て、序となさむ乎。

明治三十八年夏

大町桂月

自序

一國には一國の詩なかるべからず、時代には時代の詩なかるべからず。一國の詩ありてこれを知らざるは國民の恥辱にあらずや。時代の詩ありてこれを知らざるは時代の子の恥辱にあらずや。新體詩は明治の詩なり。その詩形の完備せる、時代に生れて時代に消滅すべきものにあらず、國詩として其生命は永遠なるべし。明治の青年は時代の詩としてこれを習練するの必要あり。明治の國民は國詩としてこれを研究するの義務あり。余も明治の青年として、國民として、これを練習しこれを研究せしこと年あり、而も學淺くして、敢て人に敎ゆる資格ある者にあらず。只かゝる形式のものなりといふ說明をなして、新體詩の趣味を傳へ得なば足ら

む。此獨習の一篇、鹽井大町兩先輩の著書に負ふ所多し。玆に謹で兩先輩に謝す。

八月の六日澁谷の僑居にて

著者

目次

第一章　緒論……一

▲禽蟲にも美妙の歌あり▲高等なる思想感情▲詩は人類の天賦▲明治の新詩形

（一）新體詩の特長……四

▲新體詩は便利なる詩形▲新體詩の領域

（二）律詩としての價値……五

▲律詩と散文詩▲新體詩は詩の上位▲詩の種類及其比較▲和歌の短長▲長歌▲俳句の得失▲漢詩の難▲新體詩の特殊なる點▲新體詩の進歩は青年の力に待つ

（三）詩想の養成……一一

▲詩人の質▲詩想修養の二方法▲詩想は共通なり▲事物の詩化

第二章　詩形と內容……一五

（一）新體詩の詩形……一五

▲一定なき詩形▲七五の調▲七々の調▲五々の調▲五七の調▲混體の調▲詩形の法則を守るべし▲文章と離るべし▲新體詩の一節

(二)　句調……二四

▲調子の重ずべき事▲調子上より見たる音數▲詩語と調子

(三)　新體詩の內容と種類……二九

▲內容の大別▲客觀と主觀▲新體詩の細別▲抒情▲叙景▲叙事

第三章　新體詩語……四四

(一)　美妙なる技術……四四

▲詩語の工風▲詩想に伴へる詩語

(二)　詩語の三要義……四七

▲新體詩語とはいかなるものぞ▲美術的の語▲美術的の語は何處に求むべき▲雅言は何によりて多く知るべきか

(三)　詩語の死活……五五

▲詩語の活用

(四)　用語の一致……五六

▲時代々々の語▲一句の調和▲俗語を用ひし新體詩▲漢語の一致▲國語を主とせる作

第四章　修辭法……六三

修辭の二別……六三

▲意義に基く修辭法▲措辭に基く修辭法▲修辭の注意

第五章　轉意法……六七

(一)　比喩の種類……六七

▲新體詩に比喩の必要▲明喩▲明喩を用ゆるの注意▲暗喩▲暗喩を用ゆるの注意

▲作例の比喩示摘

(二)　擬人法……八六

▲擬人法の意義▲擬人法の二種▲擬人法の注意▲新體詩作例中の擬人法

(三)　諷喩……一〇〇

▲諷喩の意義▲諷喩の注意▲諷喩の作例
(四) 換喩……一〇八
▲換喩の意義▲全部と一部の名の共通▲代名詞
(五) 過稱……一一六
▲過稱の意義▲過稱の用法
(六) 反稱と美稱……一二一
▲反稱の用法▲美稱の用法
第六章 飾形法……一二四
▲飾形法の種類
(一) 重音法、重言法……一二五
▲重音法と聲調▲重言の用ひ方
(二) 重形法……一二九
▲重形法の用ひ方▲重形法の一對

(三) 對偶法……一三二
▲對偶法の詩味
(四) 倒句法……一三六
▲倒句法の必要
(五) 疑問……一四〇
▲疑問の目的▲疑問の形
(六) 漸層法……一四二
▲漸層法の類例
(七) 省略法……一四四
▲省略の要▲省略法の例▲句を省略せし例▲接續詞の省略▲名詞の省略▲省略法の注意
(八) 緣語……一四九
▲緣語の美▲緣語の例▲緣語の弊

(九) 懸詞、枕詞、序詞……一五三
▲懸詞の妙趣▲序詞と枕詞
(十) 典故、詩語……一五九
▲典故▲詩語と文章語
第七章 新體詩の解釋……一六二
(一) 解釋の難易……一六二
(二) 字句の解釋……一六五
(三) 作意の解釋……一七七
(四) 一篇の主眼……一八五
(五) 照應伏線と波瀾曲折……一九六
第八章 作法 作例……二〇五

(一) 題の置き方……二〇六
(二) 詩題の分類……二〇七
(三) 四季の景物 作例……二〇八
(四) 戀愛 作例……二一七
(五) 別離 作例……二二二
(六) 述懷 作例……二二六
(七) 贈答 作例……二二九
(八) 慶吊 作例……二三二
(九) 時事 作例……二三七
(十) 歷史 作例……二四四

(十一)　詠物　作例……二六六
(十二)　漢詩譯意　作例……二七〇

作法詳說

新體詩獨習

鹿島櫻巷著

第一章　緒論

禽蟲にも美妙の歌あり　能く引例に出す言葉ではあるが古今和歌集の序に「花に鳴く鶯水に棲む蛙いづれか歌を詠まざりける」と云つてある、鶯や蛙の鳴くのは何の爲に鳴くのであらう、食を求むるが爲か、否そんな卑しい性質の聲ではない、自然の感興に觸れて發する美妙の聲である。

高等なる思想感情　然るに人は、最も靈妙なる思想感情を賦與されて居る、物に感ずる事は他の動物より深く且つ高くなければなら

ぬ、この高等なる思想感情は、詩の元素で、鶯や蛙の鳴く音は一時の耳を樂しましむるに過ぎないが、人間には文字といふ重寶なものがあるから、直ちにその思想感情を文字に寫した上に朗々として之を吟誦する事が出來る、これだけは人類特有のもので、他の動物は眞似やうとしても出來ないことだ、人はこの難有い天授の賜物(たまもの)を活用して、時々の感興を作り歌はなければ、折角の高等なる感情も、特有なる文字も、寶の持腐れとなつてしまふではないか。

詩は人類の天賦　この感情あり、この文字ありて、天地の美に接しても歌ふ事が出來ず、文字に綴る事が出來なかつたならば、既に人としての資格に缺けて居ると云つても宜しい、實に人類の耻辱ではあるまいか、人の世に出づるや二つの業がある、一は處世の家業、これも天職を盡すのであるから忘れてはならぬ、今一つは即ち詩を

作るの業、それも人類の天職として、靈妙なる人類の他動物に勝つて居る感情思想を示す爲であるから、必ず心懸けたいものである。

明治の新詩形　それで詩といふものは、どんなものであるかといふに、必ずしも新體詩ばかりではない、俳句もある、和歌もある、漢詩もあるし散文詩もあるが、其中で新體詩は、この明治の文學の異彩たるべき新產出物で、明治の詩はといへば、まづこの新體詩を擧げなければならぬ、明治の新空氣を吸はれ、明治の新文學を研究しやうとする青年諸君に、最も適したる詩は何かといはゞ、余は言下に新體詩と答へる、余は敢て青年諸君にこの新體詩を推奬して、所謂明治ッ兒たるの新思想をこの新詩形に依りて歌はれんことを希望するのである、既に新體詩を推奬して、製作を試みられんことを勸めたからは、義務としてその作法を語らねばなるまい、いかに天

授の靈妙なる思想はあつても、その作法を知らねば、作り出す事は出來ぬ、一たびその作法を會得し、其趣味に到着したならば、諸君の靈妙なる思想は、恰も雲を拂つた日の如く、光輝を發すべきを保證する。

(一) 新體詩の特長

新體詩は便利なる詩形　余が何故に多くの詩形の中から、新體詩を擧げたかといふに就ては、いさゝか其特長を說かねばなるまい、新體詩の特長は、其詩形が長く、句數に制限がなく、いかなる大思想も自由自在に作られるからである、且つ新體詩は、他の詩、即ち俳句も漢詩も和歌も長歌もあらゆる詩形詩趣を包有して居るのである、新體詩は物として其詩材たらざるなく、語として其詩語たらざるなく、雅なるも可なり、俗なるも可なり、諷刺も作らるべく、滑稽も歌はるべく、抒情叙景叙事、何にでも適する最も便利なる詩形である、且つ最も進步したる西詩の詩形、趣味をも寫すに易い點があるから、新體詩は複雜なる明治の新思想を歌ふに適當なる詩形であると斷言して憚らないのである。

新體詩の領域　故に明治の詩國は、俳句和歌などの小國はいくらもあるが、新體詩の如く區域の廣いのはない、他の小詩國を併合して初めて新體詩國に對等する事が出來る位で、趣味が多方面なだけに、取材の領分が最も廣い、明治の青年詩人が擇ぶべき領分は、恐らく新體詩を措て他にはあるまいと信ずるのである。

(二) 律詩としての價値

律詩と散文詩　律詩、一に韻文と稱す、これは散文詩に對するの名稱で、散文詩といふのは、普通の文章で、意味が政治や文學の論議に亘らず、詩の要素ともいふべき抒情叙景叙事等を作つたものをいふので、即ち美文である、律詩といふのは、韻律のある詩形といふ事で、和歌も俳句も漢詩も一定の句數と音韻が極つて居るから無論律詩の一である。

新體詩は詩の上位　さて新體詩がその律詩として價値はどうかといふに、これは多少人々に依つて議論もあらうから、優劣は判じ難いにしても、兎に角詩の上位に置くに就ては何人も異論はあるまいと思ふ、今他の詩と比較していかに新體詩が完全したる詩形であるかを說明しやう。

詩の種類及其比較　律詩の種類は前にも擧げた如く、日本固有のものとしては和歌、長歌、それから和歌から分れて別箇の趣味を有する俳句と、他に支那から輸入した漢詩とこの四種類である、他に都々逸、端歌などゝ稱する俗曲はいくらもあるが、句數が詩形を成して居るといふだけで、詩といふ事は出來ないから論外とする。

和歌の短長　さて第一に『和歌』は、日本に最も古い詩形である、字數は三十一字、五語、七語、五語、七語、七語の五句を以て一首を成すものであるが、句數がいかにも短かく、且つ和歌の語といふは、俗語を嫌つて、多く古語を用ゆるから、一般に通ずるものでなく、最も偏狹なる詩體である、素より其特長はあるし、最古の日本詩形として無論世に存在する價値はあるが、詩を學ばんとする初學の徒には、自ら入り惡く且つ其妙に到り難い。

長歌　第二に『長歌』は短長もまづ自在で、謂はゞ新體詩の前身と

いふべきであるが、一句の數は和歌と同じく五七の連續で拘束がある上に、和歌よりも一層古語を取るから、難澁解し難き缺點がある、されば今日では、和歌とは違つて既に之を作る人が甚だ少數になつたは、明治の新文壇に容れられない證據である。

俳句の得失　第三に『俳句』は五七五の十七字數で、最も短詩形であるが、其取材の方面は甚だ廣く、語も雅俗と漢語とを問はず、滑稽諷刺叙景等自在に作られる點は和歌をも凌駕する所はあるが、何をいふにも餘りに短詩形で、一貫したる大思想を歌ふには適しない、殊に抒情に不適當であるから、必竟文學の餘技たるに過ぎぬやうに思はれる。

漢詩の難　第四に『漢詩』は五言絶句、七言絶句、五律、七律、古詩等の長詩短詩あり、其作るべき範圍は極めて廣いが、字は一々平

仄を正し、韻を合せるの煩累があるし、一字一句漢字であるから、初學者には其字を拾ふさへ既に困難を感ずる、殊さらに研究してからでなければ作る事が出來ぬ詩形であるから、不便である。

新體詩の特殊なる點　そこで『新體詩』は以上諸種の詩を折衷融和したやうなもので、一句の字數も制限がなし、長短も定まりないし、意の欲する所、どれだけでも長くなり、語は古今雅俗を問はざれば、強て古書を涉獵つて語を拾ひ來るの面倒もなく、通常語を用ゆる事が出來るから、初學者にはこれ程便利な詩はあるまい、それに和歌俳句が好きなら、その趣味を直ちに新體詩中に籠めて作る事は易々たるものであるから、其詩としての興趣も殆ど無盡藏と云ふて可なりである、余が殊さら多くの詩中からこの新體詩を取て諸君に勸めるのもこれが爲である。

新體詩の進歩は青年の力に待つ　諸君は、以上說く所で、人が天賦の靈妙なる思想感情を有する事、新體詩がこの思想感情を歌ふに最も適切なる事を知得了解されたであらう、然らば一日も早く之が詩作を試みて、一日も早く靈妙の思想を發揮されるが可い、新體詩國は、土地を廣げて、明治の青年詩人の來り遊ぶのを待構へて居るのである、一日も早くその領域に入つた人は、それだけ人に先んじて人類の本分を盡し、人の見古さぬ美妙に接觸したものである。和歌俳句等は古名人が長い間に開拓して立派な田地庭園となつて居るのであるから、その上に開拓して自分の詩領を造るだけの餘地はないし、その餘地を見出すには頗る骨が折れるが、新體詩は我日本帝國と共に明治の新開國であるから、その百花爛熳たる美園となるのは、一に青年諸子の力にあるのである、何と前途多望なる詩國ではあるまいか、今この詩國に入るまでの道案内を、これから徐々順を追ふて語るであらう。

(三)　詩想の養成

詩人の質　獨り新體詩に限らず、何の詩でも、詩想が空であつては、佳作の出來やう筈はない、而して詩想は天品のものであるが、尙修養の如何に依りては、能く瓦をして玉たらしむる事が出來ないでもない、詩人たるの質は何人も享受して居るのであるが、これが錬磨を怠るので、明光を放つの機會に達せず、つひに普通人類として一生を終つてしまふのである、詩想の養成、これはまづ作を試むると同時に修養を怠つてはならぬ。

詩想修養の二方法　詩想の養成法は、いかなる手段を取るべきか

といふに、二つの方法がある、その二つの方法を取つて、併行して目的とする詩國に進むべきである、一つの方法は、古人が豐富なる詩想を傾注したる名篇佳作を讀み、その詩趣味を含味する事である、一つの方法は、天地の美妙なる大詩篇に接しやうとつとめる事である、天地の美妙なる大詩篇を見出すのは、左程困難なものではない、其つもりになつて見れば、所在に轉がつて居る、まづ古人が雲を詠じた歌があるとすれば、その作意を味はつて、その作者が朝の雲の色を白練を引たやうだと形容して居たら、自分は紫蓋を廣げたやうだと形容し、同物に依つて他の風趣を見出すのである、又山野に遊んでも、常にその天象の變幻に心を注け、路傍の一石一草にも目を留めて、いかにして詩化すべきかを考へて居るのである、その内には詩想油然として湧き、詩想は段々に光を增し來り、つひには天地

何物かこれ詩材ならざらんといふやうになつて來る、詩想は即ち天地の美を消化させるもので、天地の美は美くしいには違ひないが、詩想の消化を得なければ、詩の材料にはならない、丁度鯛はうまい物にはちがひないが、調理の仕方がまづかつたら膳に上せられぬと同じで、詩といふお膳へ上せやうとするには、一先詩想を得てからでなくてはならぬ。

詩想は共通なり　詩想の修養は、この二方法を採るのが最も簡易で、詩國へ進むの捷徑である、この詩想は俳句の想も、和歌の想も同じであるから、一方その詩想の養成が出事たならば、詩は何ものでも出來ぬものはなくなるであらう。

事物の詩化　彼の一時子守歌にまで歌はれた『鐵道唱歌』の如きは、口で話せば何でもなき東海道の道中記である、それが唱歌とし

て吟誦に適するといふものは、景を配し、歴史を說き、能く平淡な事物を詩化してあるからである、これが即ち詩想を以て消化したが爲である、さればこの詩想の修養が出來たならば、いかなる事物を詠じても、詩とならぬことはない。

猶この事は後章作例引證の條下に、精密に解釋說明する所があるから、こゝには唯大主要の點だけを述べて置くとしやう。

第二章　詩形と內容

(一)　新體詩の詩形

一定なき詩形　新體詩の詩形は、今日のところではまだ渾沌時代で、殆ど一定して居らぬ、けれども大體に於ては五言、七言が多く用ひられて居る、その聯續は、猶さら一定せず、作者の意の赴くがまゝに、自由につかつて居る、今一例を擧げて詩形を示さう。

七五の調　今の新體詩作家が、最も多く用ひて居るは七五調で、即ち、

雲雀の聲は七言地におちて五言　山本霞む七言夕暮に五言
土手の芝生(しばふ)によりかゝり　罪なきことを語らへば

少女の袖にはら〳〵と　しづ心なく櫻ちる。

これは即ち七言五言と聯ね、昔の今様の調子である、まづ普通新體詩といへば、多〻此調子が用ひられて居る。これ一つは人の耳に馴れて居るから、それで作者もこの調子を取るのであらう。

七々の調　この七々の聯續は調子を締めるから、又一種の妙味がある、例を擧ぐれば、

『花は櫻木七言人は武士
世に名香しき七言芳野の山は七言
その櫻木の七言またなき名所七言
その武士の七言ゆかしき故蹟七言』

『春まだ寒き、峰の嵐に、
竹の園生の、雪とまがひて、
ちりし勇士が、心の花も、
共に匂ふや、花の三芳野』

五々の調　この調も折々見る詩形である、即ち左に例を示さう。

夕風の五言そよ吹けば五言
むら芒五言靡かねど五言
心なく五言露ぞちる五言
ちらさじと五言なびかぬを五言

五七の調　この調子は、長歌の通りである、長歌は結末を必ず七七で結ぶ例になつて居るが、新體詩は、七々で結ぶもあり結ばぬのもある。例歌は、

ぬばたまの五言夢より夢に五言
八絃は五言二つに剖れ、

天つ琴、不斷の音をば
西東、四方に滿して、
けふあすの、空のあはひに、
顯るゝ、新春少女、
ます鏡、きよしや雲の、
濃き藍は、平和の徵、
たまがつら、絶ゆることなき、
紅は、美の紋所。

この五七の調子も能く用ひられて居る。

混體の調　この他煩雜であるから一々例證は擧げぬが、その調は區々である、五言で起して七言八言を混じ用ひるもあり、五言七言八言などを錯雜させて調を成すもあるが、要するに一句の字數は五、七、八の外には出ないやうである、五言と七言とは、音韻上、吟誦に適する數であると見えて、漢詩も五言と七言の外は無い、偶に古詩の中に八言九言或ひは十言を一句位用ゆる位なものだ、さうして見ると七、五は音數の上から見ても、都合の宜しい數に相違ない。

詩形の法則を守るべし　新體詩の詩形は、以上述ぶる所の如く、必ず五言、七言或ひは七言、五言と重ねて行くといふ一定の法則は今の所では無いのである、それであるから誰でも好む所の調子を取つてやるが可いのである、然し、それでは餘りに散漫に過ぎる、上手になつてからならば、長語短語を錯綜させて作つても、其間に自ら亂れざる法則を認められるが、初學者が只滅茶苦茶に、五言七言或ひは八言を思つたやうに配列すると、文章のやうになつてしまつて、新體詩らしくなくなるから、まづ初めの稽古の內は、矢張普通の五

七調か、七五調を取つた方が穩かである、それで練習が積み、調子を覺つたならば、其時こそ規律格調を自ら作つて、思ふまゝに大思想を歌ふが宜しい。

文章を離るべし　只要するに、文章と離れさへすれば可いのである、譬へば、

春の朝早う起き出でゝ、庭に下り立ちぬ、何處ともなく梅が香のするにさそはれて、歩むともなく柴の折戸を立出づれば、右手の小籬に鶯の一聲、聲せし邊りを尋ぬれば、野梅の一本今を盛りなり、さきの梅が香はこれなりけりと、なつかしさに其一枝を折りぬ。

かく云はゞ普通の文章なり、一語の句切はあれど、それが別段七言又は五言に切れたるにもあらず、只書き流してあるばかりだが、こ

れを新體詩の詩形に據つて、一篇を成さうとするには、まづいかなる詩形を取るべきかを考へ、次にどの邊にて一節とすべきかを豫め胸に浮べて、而して後に作り試むべきである、即ちこれを七五調で云はんとならば、

『梅が香さそふ七言春風に五言
閨の朝戸も七言急がれて五言
下り立つ庭の七言柴の戸を五言
藪の蔭へと七言出でにけり五言』

これ七句五句を一行とし、四行を一節とし、兎に角新體詩の形式を成したのである、このやうにして、更に後節を作らうならば、

『我を迎へて七言鶯の五言
一聲鳴きぬ七言竹の奥五言

聲や何處と七言わけ入れば五言
一本梅の七言盛りなり五言』

これで八行、二節の新體詩となつたので、前の文章をこれだけに約め得たのである、勿論一節は四行に限られたのではない、もしこれを三行一節としやうなら、

『梅が香さそふ、　春風に、
朝戸を出て、　鶯の、
聲する方に、　歩みけり、』

即ち七五を一行とし、三行を一節とする事が出來た、これは只詩形を示すまでの事で、更に後章に於て、多くの作例を示し、くはしい説明もしやうが、このやうに一句一行を成立させ、一節一節とつくつて行ば、初めて一篇の詩篇を成す事が出來るのである、文章と違つて、語句に拘束のあるのが、即ち新體詩の新體詩たる所で、音數も行數も一節も亂雜であつては、文章と異ならぬものとなつてしまうのである、この形式があるので、初めて文章と韻文の差が生ずるのだ。

新體詩の一節　前に云つたのは、新體詩の形式として、文章と異なる點が無ければならず、それを分つためには形式を重んじなければならぬといふ事であるが、この一節に就いて初學者の心得て置かねばならぬ事がある、すべて一行(即ち「梅が香さそふ、春風に」の如し)を並べて一節を成すに當りては、二行一節でも、三行一節でも、四行一節でも、作者の好むまゝで、別にこれが規律といふものは無いが、元來規律のある所が、新體詩の新體詩たる所であるから、凡その規律は定めて置きたいと思ふ、それで行の數は三行でも四行で

も、或ひは五行六行でも可いから、一節だけは作を試むるに當り、前以て定めて置くの必要がある、これが三行一節であつたり、四行一節となつたり、次は五行一節となつたりしては、一篇の規律が立たず、形式が亂れて、つまりは思想の混雜、意味の難澁に陷るの恐れがある、散文調に陷るのも多くはこの節が定まらぬが爲である、されば三行一節なり、四行一節なりに定めて、一節には何を述べ、二節にはこれを述べ、三節にはこれを云はうと、心に工風を立てゝ行く時は、詩想を發表するに順序正しくなり、散文調になるを防ぎ、完全な詩篇が成るであらう。

(二) 句調

調子の重んずべき事　新體詩の句調は、最も注意すべき點である、

句調が惡くては、いかにその想が面白く、言葉が奇拔でも、人の感興を惹くことが薄いものである、俳句などは歌ふべき性質で無いからまづ調子は何でも可いやうなものゝ、それでさへも調子は隨分やかましく云ふ位である、況んや新體詩は、朗吟さるべきものであるから、最も調子に重きを置かねばならぬ、この點に就ては俗曲の都々逸や端歌などは、この調子に中々苦心して居る、これを絲にかけて歌はうとすると、調子の惡い作はどうしても歌へるものではない、それで調子の善し惡しは、多く音數の配合如何にあるやうだ、折角苦心を經た佳作も、調子で以て興味を殺ぐやうでは、甚だ遺憾であるから、調子は充分研究せねばならぬものである。

調子の上から見たる音數　音數の配列が調子の上に關係するものとすれば、五七調、七五調などで比較して云はなければわかるまい、

『五七』調は、上が輕くつて下が重いからどうしても重々しい調子となる、雄健か豪壯かの趣を歌ふには適するが、流暢圓轉の趣には乏しくなる、長歌などの衰へたのもこの調子であつたからで、歌ふには豪壯な調より流麗な調の方が人の耳に快感を與へ易いものだ、『七五調』は、今樣から起つたもので、その當時からして朗詠にせられただけあつて、優婉の趣に豐かである、彼の

春の彌生の、曙に、四面の山邊を、見わたせば、花ざかりかも、
白雲の、かゝらぬ峯こそ、なかりけれ。

は今樣中の秀逸なるものであるが、これを吟ずると、春の感興が自ら湧き、冬でも春風が吹て來るやうな心持になるのは、一つには其調子が然らしめるのである、これは形式の上から見た調子の比較評であるが、猶仔細に研究して見ると、一語一句の使ひ方に依つても調子に及ぼす事が多い。

詩語と調子　たとへば漢字を多く使へば、句が締つて豪壯にはなるが、優婉の致に乏しくなり、雅言を多く使へば、優婉の趣はあつても、豪壯な調は無くなる、現今の新體詩大家土井晚翠氏と武島羽衣氏とは好對照で、晚翠氏は、漢字を多用するから豪壯な詩が多く、羽衣氏は雅言を主として作るから優婉である、其作を擧げて見るから、まづ一誦して其調子の變化を知るが宜しい。

籠鳥の感(花天月地雜部)　土井晚翠

鳴呼青春の夢高く、　理想のあとにあこがれて、
若き血汐の躍るとき、　人も自在の翼あり。
自在の翼また伸びず、　現の籠に囚はれて、
餌に鳴音をしぼる時、　狂ふ叫びを誰かきく。

狂ふ叫もしづまりつ、　籠を天地と眺めては、
御空のをちも忘られむ、　理想の夢もさめ果てむ。
こゝに囚はれこゝにやむ、　あだし命の一時や、
うたてうたかたうつゝ世を、　我嘆かんや笑はんや。

武島羽衣

戀(花天月地戀部)

やよひの空の薄ぐもり、　霞よりふる春雨の、
夕の露のかゝるとき、　花はひときは眺めあり。
うれひの雲のかさなりて、　身をしる雨のをやみなく、
袖のしづくのかゝるとき、　戀はいとこそらうたけれ。

二氏の作を誦し試むる時は、自ら調子の差のあるがわかるであらう、これ一は漢字を用ひ、一は雅言のみを用ゆるからである、新體詩の調子が、五言七言の音數の上ばかりでなく、言葉の使ひやうにも依ることは、これを見ても明かだ、されば初心の徒はその調子の如何を考へて、豪壯な詩想を歌ふには、五七調を取つて漢字を用ゆるとか、優婉な詩想を歌ふには、七五調を取つて雅言を用ゆるとか云ふやうに、其詩想に依りて調子の變化を心がけねばならぬ事である。

(三)　新體詩の内容と種類

新體詩の詩形は、前章に說く所で、大方會得が行たらうと思ふから、次にはその内容に入つて、說明を試みやう。

内容の大別　新體詩は最も多方面、多趣味であるから、天地間にある事物は、皆取て詩材とならぬことは無いが、元來が詩であるから、俗惡なる事、又語句の配列の定規に觸るゝものは、新體詩化することは出來ない、それで新體詩の内容を大別すると、『材料の種類』

と『描出の方法』の二つになる、外形は前に云つた通り、語調は一定して居らぬが、その内容だけは大別してこの二つしか無ないのである、今その二つを更に細別して説明しやう。

客觀と主觀

客觀と主觀は新體詩に限らず、他の詩にも文章にも必ずあるべき筈のものである、客觀といふのは他を主とし、自分はお客樣となつて、主人の話したり、爲る事を見聞するの意である、主觀といふのは、自分が主人公となつて、自らの爲す事思ふ事を叙することを云ふ、たとへば俳句に、

古池や蛙飛び込む水の音

といふのがある、これは他から見て居て、古池へ蛙が飛び込んで、水の音を立てた、それが何となく幽寂であつたと叙したもので、即ち客觀である、又

行く年や親に白髪を隱しけり

といふのは、年の暮になつて又私も歳を一つ重ねなければならぬ、老親が心配するといけないから白髪を隱して、いつまでも若い顏をして居やうといふ意で、自分の事を叙したもの、即ちこれが主觀である、新體詩をこの主觀、客觀の二つに分けると、今度は其二つの中に又種別のあるのを發見するであらう。けれども茲に注意して置かねばならぬのは、主觀と云ふても、時には便宜上、作者が作中の人物となる事がある、自分が作つた新體詩だから主觀ではないかといふ惑ひがあるかも知れぬが、客觀、主觀の語は、言を換へていへば、主我(主觀)主他(客觀)といふことで、其作をなすに當りて、作者の位置をいふのである、主我即ち主觀は、作者は表面に立て描出する材料中の主となり、主他に於ては作者は單に裏面に立て側から

見たゞけの材料を語るまでゞある、この主客の別から解せぬと後に說く抒情、叙景、叙事の三つも能くわからぬことゝなる。

新體詩の細別　新體詩を大別すれば客觀詩と主觀詩とであるが、猶細別すると『抒情詩』『叙景詩』『叙事詩』の三つになる、この他に以上の三つを併有して居る新體詩もあるが、大體の別は以上の三つにあるものと思ふて宜しい、今その別を明かにする爲に、例を引て說明するであらう、なほこの抒情、叙景、叙事の三は前の主觀、客觀の何に屬するかと云へば、抒情は主觀で、叙景、叙事は客觀である、但し叙事は自分の事を叙すると主觀になるのである。

抒情の新體詩　新體詩に最も能く適するのはこの抒情で、これまでの作物を見ると、多くは抒情詩である、それで抒情詩の材料となるものは何かといふと、まづ左の種類であらう。

戀愛、喜怒、哀樂、嘲罵、怨恨、希望、不平

すべて人に直接の關係ある、心を動かし易き出來事であるから、忽ち作家の感情に觸れて、詩篇を成すのである、言はゞ抒情新體詩は、作家が事々物々に對して發する熱情の聲である、熱情の聲であるから、人を感動させる事も深い道理である、彼の萬葉集といふ日本最古の歌集を見ると、その歌は戀、哀傷、賀、羈旅、離別歌などが、最も多きを占めて居る、いづれも主觀的の、抒情の歌が多いので、今に至るまで讀む人に感動を與へる、その最も人を感動させ易い、主觀的の抒情詩が、この新體詩の獨擅場であるから、新體詩を學ばんとする人は、深く抒情詩の研究が必要である、さていかなるものが主觀的の抒情詩であるかは、左の引證と說明とで自ら默會する事が出來るだらう。

夕月夜（花天月地戀の部）

田山花袋

久しく絶にし君にわれ、
昨日も今日も一昨日も、
君が通へる路をしも、
君のすまへる門の邊を、
されど戀しき君はしも、
其とおもひて近寄れど、
あはれ何處に君ゆきし、
はや七とせとなりぬるを、
あふことだにも今ははや、
おもふたちまちわが袖は、
その夕暮のことなりき、

一目なりとも逢はんとて、
巷の中をさまよへり。
われは幾度歩きけん、
われはいくたび過ぎにけん。
姿をさへに見せざりき、
似たる人のみ多くして。
ひそかに君を戀ひしより、
いづくに行きしあはれ君。
かなはずなりし己が身を、
涙に濡れぬ悲しくも。
いとかすかなる夕月の、

影を負ひつゝわれはしも、
をはりになりし我戀と、
思ひおもひてわれはしも、
秋風寒き道の邊を、
わが向ひより美くしき、
光もうすき月かげに、
姿をわれの見てし時、
あはれ夕月心あらば、
きのふもけふも尋ねたる、

とある小路をあゆみ行く。
はかなくつらき我世とを、
いとさびしくも歩みゆく。
右に曲れる折しもあれ、
ひとりの少女あゆみ來ぬ。
おぼつかなくもその人の、
その嬉しさやいかなりし。
さやかに照らせ一昨日も、
いとなつかしきその人を。

これは純粹の抒情詩で、戀の歌である、大體の意味は『我戀人に久しく逢はぬ戀ひしさに、日を續けて其人に他ながら逢はうと思つて、其人の歩きつけた路を往たり來たり、門邊に立つて出て來るのを待

いふ事は少い、決してそれが出來ないのではないが、抒情を主として作るので、叙景に力が及ばないのだ、近來は大分叙景ばかりの長篇も見えて來たやうである、左に例證を擧げやう。

冬の夜(花天月地冬の部)　　與謝野鐵幹

按摩上下五百文、
聲より人の影たえて、
辻の柳に一臺の、
人車のこる寒さかな。

この歌は短いだけに、純叙景詩である、叙景の中に、抒事を交へたるものは、新體詩中いくらもある、たとへば、

ひとつ家(同秋の部)　　田山花袋

見渡すかぎりはる〴〵と、　さはるものとてあらざれば、

月はてりにも照りまさり、　風はあれにもあれまさる。
尾花の中にひと筋の、　路はあれども里遠み、
行きかふ人の跡たえて、　訪ひ來る友の影もなし。
かくもさびしき冬枯の、　野中にたてるひとつ家に、
住へるものはあはれ誰ぞ、　やさしき君とこのわれと。

右の歌は、初めの一節に、荒寥たる秋の野に月清く風荒るゝ夜の景色を叙したもので、純叙景であるが、中節は、廣野人なく、尾花の中に一本の道は通ずれど我家に來り訪ふ友もなき淋しさをいひ、後節に、この野中の一つ家でも戀人と共に捿めば淋しからざる意をほのめかしたる抒情の意味が含まれて居る、かくの如きは叙景と抒情を兼ねたもので新體詩集を讀めばいくらでも見出されるであらう。

叙事の新體詩

この叙事の新體詩も、恰も叙景の如く、純粹に叙

事ばかりのものは少い、多くは抒情と叙景の二性質を混じたものが多い、叙事詩とはどんなものを材料とし、どんな風に作られてあるものをいふかといへば、まづ人の事蹟、神話、社會の出來事等を叙したもので、作家はこれも表面にあらはれずして單に开を物語れば可いのである、その事實は、實際の物語も宜しく、架空の小說でも宜しい、實際の物語には歷史上の佳話美談も含まれて居る、この叙事詩は作家の手腕に依りてはいかなる大作長篇も出來るのである、まづその一例を引かば左の如き作が叙事詩と云ひ得られやう。

里の夕立（花天月地夏の部）　流水庵

麓に高き清閑寺、
垣根をぬいて糸野河、
村に落つれば淵となり、
瀨となる夏の涼しさよ。
里の子あまた泳ぎては、
龜の甲ほせる河原邊に、

岸の櫨の木的にして、
石擲ごつこも飽きぬらし。
あたまの傷の三日月を、
綽名に呼ばるゝ年上が、
いかにと曰へば可からんと、
臂を枕のうたゝねの、
ばつたの羽音夢に入り、
嘉作が番小屋襲ふなり。
嘉作はぎよつと目をさまし、
西瓜盜める子等を追ふ。
そら來た逃げよと三日月の、
跡に續いて幾曲り、
田の畔走る落武者が、
禿顱爺やい、やい、禿顱爺やい、
勝閧あげて集まれる、
子等は今しも橋の上に、
西瓜頒ちて見上ぐれば、
阿彌陀寺山に雲早し。
ばつと稻田にたつ雀、
案山子と見れば野呂又が、
逃げ行く跡に夕立の、
鳥も及ばず追ふが見ゆ。
これはと駈け入る地藏堂、
板戸の隙よりうかゞへば、

空になげうつ電光、
臍に餓えたる雷は、
怖やと思はず耳を蔽ふ。
惡戯兒を逃さじと、
鳴るやざあッと雲落ちて、
またひとしきり降りそゝぐ。
また一しきり一しきり、
鳴神やがて遠く過ぎ、
南の山に夕日さし、
祠の松に蟬鳴けば。
晴れたぞ虹をあれ見いと、
子等はばら〳〵堂を出で、
番小屋近き此方より、
禿顱爺やい、やい、禿顱爺やい。

この詩は夏日の田園を叙したるものにて、村童が嬉戯の狀を描寫して頗る妙をつくして居る、叙事詩といふ事が出來るであらう、又左の一篇も叙事詩の一例である。

氷　賣(同)　　佐々木信綱

それなり、涼しさを、人に賣りて、
おのが身は、汗にぬれゆく、氷うり。
人は皆、暑けさを、ねぶるころに、
日の光、もゆる巷を、賣りあるく。
たが爲ぞ、汝が家の、富てあらば、
日ざかりに、外には母の、出さじを、
荒れし眞垣の、女郎花、
露にしをれて、立てりけり。

氷賣が涼しさを人に賣りて、己が身は却つて暑きに苦しむに同情したるもの、これ等は純叙事詩と見て差閊えない。

新體詩の質を成す材料、即ち抒情、叙景、叙事の三つは以上説明した所で大概分つたらうと思ふから、更に一歩を進めて、詞の修飾法に移らう。

第三章　新體詩語

茲に新體詩の詩語と云ふた所で、何もその語が他の和歌俳句の詞と異つて居るわけではない、屢〻いふ如く新體詩は用語の範圍が甚だ廣いから凡そ和歌俳句に使用する詞ならば一として用ひられざるは無い、俗語でも物に依つては詩化されぬ事はない、只その巧と拙は作家の手腕の如何にあるので、その手腕は語の配列の巧拙に在る、そこで即ち修飾法を知るの必要が生ずるのである。詞の修飾は詩想の鍛練、形式の工風に次で、作家の苦心すべき所である。

(一)　美妙なる技術

詩語の工風　新體詩は繰返していふまでもなく詩の上乘なるものであるから、詞を用ゆるにも、想をいひ表はすにも、その詞を撰擇するにも、文章以上、和歌俳句以上の美妙なる技術を要する、總て長いものはダレ易い、讀者を飽かしめ易い、それをダレず、飽かせぬやうにするには面白い語、美くしい語を用ひて、讀者に快感を與へなければならない、長途を歩くにしても、山あり川あり花野ありして、眼を樂しましむれば、百里の途も更に長しとも覺えぬが、僅か一里の野途(のみち)でも、何の見るものが無かつたら、眼を倦ましめ足の疲れを覺え來るであらう、新體詩もその通り、詞の修飾に意を用ひて、清新な語、警拔な語、艶麗な語等を錯綜して用ゆるやうにせねば、讀者は讀で何の面白味も感せず、一二節を讀だばかりで飽て棄てられてしまふであらう、それでは折角苦心の作も、屑籠(くつかご)の厄介になるより外はない、美妙の技術を要するはこれが爲である。

詩想に伴へる詩語　茲に禮儀作法に馴れざる野人があるとする、人前へ出て時候寒暑の挨拶も碌々出來ない、それで氣質は至つて宜しいのであるが、サア何か物を云はうとなると、人を怒らせるやうな語を吐いて、折角の心も先方へは通じないで、却つて侮蔑を招き、嘲笑の種となる事がある、能く落語家が話す噺で、職人が高貴の家へ出て「御座り奉る」などゝ冷汗の出るやうな語を吐て、好い物笑ひになる話がある、詩語を知らずして新體詩を作るのは丁度その野人が高貴の前へ出て、片言の挨拶を爲るやうなものだ、その誠意は通ずるとするも、云ふ所は殆ど笑ふに堪へたる片言をいふ、この者に禮儀作法、物のいひやう、挨拶の仕方を敎へたなら、どんなに器量を上げるだらう、歌ひたい詩の材料、物に感じて起る詩想はあつても、これを詩に作る詞を知らず、それを强て作れば、用語は誤り、

意味は通らず、あたら面白い詩材詩想も、半文の價値を生ぜずして徒らに人の物笑ひとなるは、作者に取りてこんな遺憾な事はあるまい、それで詩想は詩語に伴ふて、人に快感を與ふるものと云ふのである、詩想が好くとも、詩語が惡ければ興味を損ずるし、詩語が宜しくとも詩想が無ければ、一讀にして人に飽かれてしまふ、新體詩に詞の修飾は、第一要義である。

(二)　詩語の三要義

新體詩語とはいかなるものぞ　さて第一に「新體詩語とはいかなる語であるか」といふに、つまり美はしい詞、美術的の詞である、吾人が日常に使ふ言葉は、實用的の言葉で、思ふた事が向ふへ通ずれば可いのである、それでさへも前に云つたやうに、物言ひの上手下

手もあれば、育柄に依つて上品な言葉を使ふ人もあれば、上等な語を使ふ人もある、況て新體詩の詞は、實用的の詞ではない、美的感情を描出するための詞であるから、美術的の詞を擇んで用ひなければならぬ。

美術的の語　第二にそれでは「美はしき詞、美術的の詞とはいかなるものか」といふと、高雅に、優美に、莊重に、神韻の籠つた詞をいふのである、たとへば、

田子の浦に漕出して見れば眞つ白く富士の絶頂雪が降つてる。

これでも三十一字の和歌は和歌である、形式に於ては誤つては居ぬが、その用語が拙いから殆ど歌として好い感じが起らない、我々が普通口で云ふ話と餘り違つて居ない、これを人麿の歌のやうに、

田子の浦ゆ打出でゝ見れば眞白にぞ富士の高嶺に雪は降りつゝ。

「田子の浦より」といふのを「田子の浦ゆ」といひ「漕出して」を「打出でゝ」といひ、「眞ッ白」を「眞白」といひ「絶頂」を「高嶺」といふが如き、前者は俗語、後者は美術的の語、即ち詩語に適せる雅言を用ひて居るから、歌の品格が丸でちがひ、お三どんとお孃樣程の違ひがある。

美術的の語は何處に求むべきか　第三に「美術的の詞は何處に求むべきか」といふに、まづ雅言が詩語の粹であらう、國語の中には、高雅、莊重、優美、何でも好むまゝの詞がある、その撰擇は人々の見付け次第で、一々敎へる事は出來ない、詞の神韻、詩趣といふものは、人々の感じであるから、我好い詞と感じた詞も、人はさほどに思はないのもある、「東京」といふと、少しも詩的の感じが起らないが「奈良の都」といふと歷史上の關係もあるし、古き都といふ感情

が直ぐ起つて　さま〳〵な詩的聯想が浮ぶ、俗語は詞に依つては、面白い詩的の詞もあるが、それを活用するのは一家を成した人の手腕で、初心の徒には、まづ使はない方が無事であらう、なるべく雅言の中から詞を取つた方がまちがひがない、俗語が何故に詩語に適せず、雅言が能く適して居るかといふのを知るには同じ意味の俗語と雅言とを對照して見ると一番早く解る、例へば、

俗語	雅言
大根(だいこん)	大根(おほね)
がちや〳〵(虫の名)	轡虫
おや〳〵(驚きの詞)	あな
梯子段	階
てすり(欄干)	おばしま

くたびれたり　つかれたり

これを並べて、どちらが詩語に適するかといへば、誰でも雅言の方を取るだらう、それ故初心の人は、何かいひたい詞があつたなら、面倒でも辭書でも引いて見て、その詞を雅言で何といふかと搜し出して用ひるやうにすれば怪我が無い。

雅言は何によりて多く知るべきか　さて前に「詩的の語は何處に求むべきか」の質義にそれは雅言であると答へたが第四に「雅言は何によりて多く知るべきか」との問も從つて出るだらう、雅言だからといふて、中には詩語として面白くないのもある、唯雅言ならば使つてあやまりが無いといふばかりの詞もある、それで雅言には意味の深いのもあり、使ひ所のわからないのもある、初學者はこの撰擇に

迷ふであらうが、それには好いお師匠番がある、即ち古來の歌集である、古來の長歌短歌に用ゐられた詞は、兎に角その作家が詩的の詞と見做して使つた詞であるから、その歌によりて意味も悟り、使ひ所をも辨へた上に、好い詞だと見へたら自分も使ふが宜しい、古來の歌集は、その時代々々の作家が苦心した詩意詩語の淵叢であるから、盡くこれ詩的の詞である、この歌集を能く熟誦して、用語の種本となし、我が詞藻の素養をこれでつくるが最も捷徑である。

(三)　詩語の死活

詩語の活用　詩の生命は一に詩語の活用の如何にある、たとへ古人の用ひた詩的の佳語でも、用ひ方が拙いと死でしまふ、古人が用ひられし詞となるし、古人の用ひ

た事のない詩語を發見して詩中に挿さんでも、それが拙かつたなら、更に光を放たない、又用ひ方は宜しくとも、古人が慣用した語を詞意兩つながら襲用するは、只古人の口眞似をするに過ぎない、これ等は拙の拙なるものである、殊に新體詩は、長いものであるから、一節一節に新らしい語、面白ひ用ひ方の詩語があつて、初めて首尾呼應して人に讀過させる力を生ずるのである、それを古人の慣用語を其まゝ使つてダラ〳〵と長く引延ばしたやうな作であつたならば古語を拾ひ集めて配列したに過ぎなくなる、短歌ならば拙くとも短いから兎に角一息に讀み下せるが、新體詩であつては、誰が我慢してそのやうな作を讀んでくれる者があらう、今試みに、左に拙劣なる古人口眞似的の作例を擧げて見やう。

學の窓にたれ込めて、　春の行方も知らぬ間に、

小山の峽のしら雲と、
過ぐる月日も早川の、
底の影さへ移ろひて、

その形式も用語も、別に難のない新體詩のやうに見えるが、一篇何の清新の意味の籠つて居るでもなく、その語は悉く古人が用ひたままを模擬襲用したに過ぎない、第一の句は古今集にある歌で「たれ込めて春のゆくへを知らぬ間に待ちし櫻もうつろひにけり」の上の句を其まゝ取つて付けたものである。第二の句はこれも古今集の「櫻花咲きにけらしな足引の山の峽より見ゆる白雲」の歌から出たもので、花を雲と見紛ふといふも既に陳腐である、第三第四句の岸の山吹の底の影が移ろふといふも同書の「吉野川岸の山吹吹く風に底の影さへうつろひにけり」を其まゝ借用したものだ、これではその詩

まがひし花もちり盡し、
岸の山吹吹く風に、
春も名殘となりにけり。

語は宜しくとも、詩に新らしい生色が無い、古人の慣用語を最も拙く配列したに過ぎぬ、その語を取るも好いが其まゝでは拙い、活用の仕方ではいかやうにも新らしいものとなる、けれどそれは第二期まで進んだ人にいふ事で、初めて新體詩を學ばうといふ人で、語句を熟練しやうといふ第一期に在る人には、古人の慣用の語を、古人の使つたやうに其まゝ用ひても差閊えがないから、手習艸紙へ習字をするつもりで、まづ數篇を試作せよと勸めるのである、初めて作る七八篇が何せ人に示されるものでないから、それこそいかなる方法を取つてもかまはぬ、これはいづれ後章の作り方を敎へる條下で細說しやうが、序だから此に云つて置くのである。

（四）用語の一致

時代々々の語　用語の一致とは、一篇の詞が平均（ならし）に行く事である、同じ詩語、即ち通常語でない詩に使ふても宜しい詞でも、一樣には行かない、ズット上古の詞もあれば、中古の詞もあり、近世の詞もある、その區別も辨へて、あまりに時代違ひな詞を、種々に亂用すると、讀で行つて意味が通じなかつたり、甚だ調子の惡いものとなつてしまふ。

一句の調和　さりとて初め古語を用ひたら終まで古語ばかりを用ひて行かねばならぬといふのでは無い、つまり一句の調和が保たれれば宜しいのである、中古の物語などにある奇麗な語を使つて居る中へ、只一語突然古事記や萬葉集などの古語が入つて居ると、その

一語が耳立つて聞苦しいものとなる、又雅言ばかり用ひて、すら〳〵した調子の間に、佶倔な漢語が飛込むと、これも耳ざはりとなつて前後の聲調を破つてしまふ事がある、それも用ひ方次第、技倆次第で、古語も漢語も俗語も、用ひ方に依つては面白い句ともなり、調子を破るやうな事もないが、まだ語の用ひ方も能く知らず、技倆も熟さない初心な人のために注意するのである、云つたばかりではわからないから、例を擧げて說明しやう。

俗語を用ひし新體詩　俗語は前にも云つたやうに、初心の人には濫りに用ゆべからざるものではあるが、それも上手が用ひれば面白い作も出來る、それといふも一篇の用語の一致があるからで、雅言ばかりの中へ一語俗語を入れると耳ざはりなものとなる。

俚歌に擬す（花天月地）　正岡子規

其一

ねんねやをころりや。
ねんねの坊やは誰が子ぞや。
お城の上の星の子か、
南の海の河豚の子か、
坊やを產んだ母の子ぞ、
坊やを抱いた母の子ぞ。

其二

ねんね〳〵〳〵や。
ねんねの坊やは何を泣く。
泣く子は鬼が連れて行く。
坊やは大人ぢや泣きはせぬ。

坊やはあすから學校行く。

其三

大凧あがれ、天迄あがれ。
天から落ちたら、柳にかゝれ、
柳の枝に、三羽の鶯が、
みんな逃げて、しまつた。

俗語でさへも調和を得れば、このやうな詩になる、この作は昔から能く歌はれる子守歌に擬して作つたもので、俗語を用ひたものである、『其一』の「ねんねんやをころりや」は俗語である、「お城の上」も俗語、「坊やを產んだ」も「坊やを抱いた」も俗語である。

『其二』の「泣く子は鬼が」は俗語「坊やは大人ぢや泣きはせぬ」も俗語「坊やはあすから」も俗語、『其三』の「大凧あがれ」も俗語、「天から落

ちたら柳にかゝれ」も俗語、「みんな逃げてしまつた」も俗語である、けれども一篇が俗語で出來て居るから、耳ざはりでもなければ、却つて面白い、もしこれに所々雅言を混ぜたらどんなものであらうか、それこそ耳ざはりな聞き苦しいものとなる、試みに雅言を混ぜて見やうならば、

大凧あがれ、天迄あがれ、
空より落ちなば、柳にかゝれ。
柳の枝に、三羽の鷺が、
みな飛びつくし、しまつた。

これでは甚だ變なものとなつてしまふであらう。

漢語の一致　更に漢語を入れた作例を擧げて見やう。

山中の石(花天月地)　與謝野鐵幹

ふるく「頑」たる山の石、
この聲よしや「人間」の、
「達人」耳をかたぶけて、
星の都にありときく、
嵐の神の音づれて、
敲かば我も聲あげむ。
少女の絃にのこすとも、
きかばなか〳〵中空の、
「一百五絃」の玉の琴、
「一時」に裂くの「慨」あらむ。
(後略)

これも漢語が巧みに調和せられてあるから、語調が強くなつて、面白い詩となる、この中の漢語を國語に言ひ換ると「頑」は「かたくな」「人間」は「ひと」「達人」はまづ「覺れる人」とでもいはうか、「一百五絃」は「百あまり五の絃」「一時」は「ひとゝき」「慨」は「おもひ」である、試みにこの作中の漢語の箇所を國語に直して見るが可い、詩全篇の調を破つてダレた調子になる、これ漢語でも調和させれば詩語とな

り調を助くる事となる證據である。

國語を主とせる作　次には國語即ち雅言を主として用ひた作を擧げて見やう。

新　綠　　佐々木信綱

木間をわたる風青く、
雪をいたゞく卯木あり。
春はあゆみをとゞめねど、
人の心をなぐさむる、

綠したゝる下かげに、
ほゝゑみたてるうばらあり、
野山のきぬは色かへつ。
神のめぐみのあまねしや。

これも國語ばかりで調和されてあるが、もし「木の間」を「樹間」といひ、或は「綠したゝる下蔭」を「綠陰深所」などにせば、その一語だけが耳立つて、一篇の調子がやぶれてしまふであらう、これ新體詩に用語の一致の必要な理由である。

第四章　修辭法

(一)　修辭の二別

前章に述べた所の、詩語の性質、撰擇の要がわかつたらば、次に起る問題は、一篇の修辭法である、修辭法が文章に必要のあるのはいふまでもないが、文章には語數の制限がない、云はんと欲する事ならば、十語でも十五語でもかまはないが、新體詩はさうは行かぬ、まづ五語、七語と語數が定まつて居て、その語數の範圍内に於ていはなければならぬ、從つてその修辭法もむづかしく、文章以上の苦心と研究を經なければならぬ事となる、さて新體詩の修辭法に二つの別がある、一は「意義に基く修辭法」一は「措辭に基く修辭法」である

意義に基く修辭法　とは何であるかといふに、普通の意義から離れて、その言語を用ゆる法である、例へば

袖のつゆ　心の闇　燃ゆるおもひ

などの如く、つゆを涙の意義に、闇を迷ひの意義に、燃ゆる思ひを激昂の意義に用ゆるやうなものである、或は

風死す　花笑む　山笑ふ

などの如く、生物の上に用ゆる詞を無生物の上に用ゆるもその一例である、これを一に「擬人法」と云つて、新體詩には殊にこれが多い、これを轉意法と稱するのである。

措辭に基く修辭法　とは、普通の辭句を、「配置」をかへて句を工風したり、「省略」して意味を聞かせたり、「緣語」を以て面白くしたりする事である、假へば

胸の雲霧晴るゝ間もなし

といふを、殊さらに轉倒さして「晴るゝ間もなし胸の雲霧」などいふが如し、この「胸の雲霧」といふも「胸の心配」といふ意で、涙をつゆといふに同じく、意義に基く修辭法の一つである、「省略」するとは、

追ひしきて取返すべきものならばよもつ平坂道はなくとも

の如きで、この歌は子を失へる時の歌で、「追付て取返す事が出來るものなら冥土へ行く道は險惡でも我は往かむものを」といふ意で、下に「我は往かむ」とあるべき詞を省略して言はないのである、「緣語」を以て面白くするとは、例へば

難波江の葦のかりねの一よゆゑみをつくしてや戀ひわたるべき

の如き、一首悉く緣語のある詞を以て作られてある、「江」から葦といひ「葦」といふから「刈る」にかけて「假寢」といひ「葦の一節」にかけ

て「一夜ゆる」といひ、「みをつくし」は「標澪」と「身を盡し」と兩方にかけ、「わたる」といふも「江」に縁ある詞を以てしたので、これが詩語の配列の巧みといふものである。

修辭の注意　以上二義の修辭法を用ゆるにも、その方法を誤まると、却つて見惡い聞苦しいものとなることを一考せねばならぬ、修辭はその句を成すに當りて、自然に出たものなら好いが、殊さら言葉の巧みを示さうとか、語句の配列の働きを見せやうとか、つまり修飾を主として作る時は、徒らに虛飾の弊に陷つて、却つて調子を弱め、意味を澁難ならしめ、讀む人に厭氣を起させる事がある、甘い物ものべつに食べると厭氣がさすと同じく、言葉の綾も多きに過ぎるとかへりて詩の感興を損ずるものである。さて措辭に基く修辭法を飾形法と稱する、猶次に細說する所に依て悟るが可い。

第五章　轉意法

(一)　比喩の種類

新體詩に比喩の必要　比喩は詩に最も必要な道具である、詩には露骨を忌むものである、それで比喩を用ゆれば、露骨を避け得られて、詩としての妙味も出來て來る、比喩は即ち形容詞で、形容詞は比喩の一部の名である、比喩が何故に露骨を避くるかといふに、「白髮がふえる」といふと露骨に聞えるが「頭の雪」といはゞ詩的になる、只「寒い」「暑い」といはうよりも、「骨を刺すが如し」「燒くに似たり」と言つた方が、寒暑の感じが人に強く聞える、されば新體詩に限らず、詩は殆んどこの比喩で持切つて居るも同樣である、同じ比喩である

けれど、其中には二つの別がある、即ち明喩と暗喩で、こゝに別ちて次に述べやう。

明喩　といふのは、或物をうつさうとする時、それと類似したものを採つて來て、明かに二つ並べて喩へるのである、假へば

月冴えて氷の如く、風冷にして及に似たり

といふやうに月光を「氷」に喩へ、寒風を「及」に比する時は、その感じが殊に強くなる、この明喩の中にも亦三つの別がある、假へば

冴えたる月は氷なり、冷けき風は及なり

といふが如く「如し」だの「似たり」だの言はずに、直ちにその物を「氷」「及」にしてしまつて、それが比喩になる、これが「第二」の明喩法である、「第三」の明喩法は、詞の表面に「似たり」、「如し」と比較を言はずして自ら比喩になる法である、假へば

形こそ深山がくれの朽木なれ心は花になさばなりなむ(古今集)

我が戀は深山がくれの草なれやしげさまされど知る人のなき　(金葉集)

の如きで、第一の歌は、「たとへ身は深山に生えた朽木のやうに世にも知られず賤しい地位にあらうとも心だけは花の咲たやうに樂しくして居ることが出來る」といふ意義で、「深山がくれの朽木」を比喩に引いたものである、第二の歌は「我が彼の人を戀ひ慕ふのは丁度深山の草と同じことで、その草の繁きやうに思ひも増るけれど、誰も知つてくれる人がない」と自分の戀を深山の草に比へたものであるが、二首共表面には如し、似たりの如き比喩を斷る詞を用ひてないが、その意味を解釋して比喩であることがわかる、これも明喩法の一で、詩に能く用ひられる比喩法である、「似たり」「如し」といふ比喩法よ

りも同じ明喩には屬するけれど、後者の方が露骨でなく含蓄があつて面白いやうに思はれる、猶明喩の中には、引て來て比喩を否定して置て、それで比喩になつて居るものがある、假へば、

我が袖は草の庵にあらねども暮るれば露のやどりなりけり　(古今集)

花さそふ嵐の庭の雪ならでふりゆくものはわが身なりけり(同)

我が戀は知らぬ山路にあらなくに惑ふ心ぞわびしかりける(同)

以上の三首の歌の如きがそれで、「草の庵ではないけれど」草の庵の暮れると露が繁きやうに我袖も濡れるといひ、「花を誘ふてちらす嵐の庭ではないけれど」古り老ひ行くはわが身であるといひ、「不知案内の山路を歩くんではないが」戀の道には惑はれるといふやうに、一方を否定して、矢張り比喩になつて居ることが多い、又「より」といふ簡便な詞で、比較して居る歌がある、即ち左の歌の如きである。

行く水に數かくよりもはかなきは思はぬ人をおもふなりけり

山おろしにたへぬ木の葉の露よりもあやなく脆き我が涙かな

この歌は「水の上に字を書けば直ぐ消えてしまふがそれよりもはかないのは我を思ふてくれぬ人を戀ひ思ふて居ることである」「山風に枝にたへずしてちる木の葉よりも脆くちるのは我涙である」といふ意義で、いづれも「より」といふ二字で比較を明かにして居る。

明喩を用ゆるの注意　明喩を用ゆるは詩の妙味を添へるものであるはいふまでもないが、これを用ゆるに就ては注意を要することがある、即ち左の四ケ條である。

一、比較せんとする事物はなるべく異なる種類を求むべき事

一、比喩の穩當を要する事

一、かけはなれたる比較を用ひざる事

一、いひ古したる比喩を用ひざる事

この四箇條に就て更に細かく說かうならば、第一の「比較せんとするものはなるべく異種類を求むべき事」とは、その引く比喩が異種類で似て居るものなら面白いが、同じやうなものなら比喩に引くがものはない、假へば美人を形容する比喩に「小野の小町か衣通姫(そとほりひめ)か」といはゞ同じ美人の名を擧げたに過ぎず、更に比喩に引いた小野の小町と衣通姫の美くしさを比喩しなければわからぬことゝなる、それよりも「たてば芍藥(しやくやくすは)座れば牡丹」といへば其窈窕たる風姿が自らあらはれて詩の妙味を生ずるであらう、「少女のまふ姿は舞妓に似たり」といはゞ、これも同種類のものを比喩したまでゞ比喩の効力が無くなるが、「少女の舞ふ姿は花に蝴蝶の狂ふに似たり」といはゞ、その嬌態が能くあらはれて面白くなる、第二に「比喩の穩當を要する事」とはつまり突飛な比較を用ゆるを避くることである、假へば「冲に昇る月はさながら盥(たらひ)の如し」といはゞ、その比較物があまりに突飛で、月の莊嚴を損ずるばかりでなく、景色があらはれぬ、それよりも寧ろ「冲に昇る月はさながら朱盆の如し」と云つた方がいゝ、同じ器物であつても類似した點がなければ比喩にはならぬ、彼の「綸言汗の如し」の如きでも、貴き綸言を汗の出て返らざるに比するは、餘りに權衡を失して居る、月を盥(たらひ)に比すると同じ理屈である、第三に「かけはなれたる比喩を用ひざる事」これは緣遠い、まわりくどい比喩を避けよとの意である、假へば、

あしびきの山鳥の尾のしだり尾の長々し夜を獨かも寐む

この歌の意は、「長き秋の夜を獨して淋しく寐る事か」といふだけの

事で、上の句はそれを云ひ出すための序歌である、「あしびき」は山の枕詞で「山鳥の尾のしだり尾」は長いといひかける緣語である、して見ると上の句には何の深い意味があるでもなく、下の句の獨り寐るをいひ出さんがためであるとすれば餘りに比喩が懸隔して居る、同じ下の句をいひ出すにも、

わが戀は岩にせかるゝ谷川のわれても末に逢はんとぞ思ふ

の如く、切なる戀の情を「岩に堰かるゝ谷川」に比し、そして下の句へ行つて「割れても末はその水の落合ふやうにわれも彼の人と逢ひ遂げたいものである」と比喩に多少の意味を含んで居るのなら可いが、餘りかけはなれて居ると意味が讀み取りにくいばかりでなく、歌の興を薄ふして滑稽に落ちるやうな場合がある、まづ以上の注意箇條を研究した上で、この明喩法を用ゆる時は、作物の上に味ひを

生じ、立派な新體詩を作ることも自由自在になるであらう。

暗喩　暗喩は明喩に對する名稱で、比喩法の性質からこの名あるこれも明喩と共に新體詩作家の當然心得て置かねばならぬことである、假へば、

花の色は移りにけりないたづらに我身世にふるながめせしまに

この歌の意は「花の如き容貌も老行くまゝに衰へ變る」を嘆じたもので、人の容貌を「花」にたとへ、變ることを「移る」と云つたのである、類似した比喩を用ゆる點は明喩とかはりはないが、只その異なる點は、明喩は他の事物を引て比較するにも、その比喩なるを言明するか、然からずばその意を含めてあるが、暗喩は、表面には比喩を離れて、實際の花其物を云つて自然に比喩になつて居るのである、即ち

右の歌が明喩であるならば「容貌花の如し」「花の色に異ならず」と斯様にいふであらう、この點が明喩と暗喩の相違せる點である、されば暗喩は、比喩とはいひ條、物と物とを比較せぬ、その比喩たるを知るは讀む人の想像力で判斷するより外はないのである、讀者の想像力に訴へるのは、詩の深き趣味のある所で、暗喩が明喩より詩作上一層面白いのはこれがためである、左に二三首の歌を引て暗喩の面白い點をいはう。

形こそ深山がくれの朽木なれ心は「花」になさばなりなむ

この歌は前にも引いたが、下の句の「心は美くしくして居られる」といふのを直ちに「花になさば」と云つて、比較したのでは無い。

明けき「法の燈火」なかりせば「心の闇」のいかで「晴れ」まし

これも「尊き佛敎」を「法の燈火」と比較して比較の詞を用ひず、これ

でも意味を以て廣く佛敎を指したものだといふ事は說明せずとも讀者に會得が行くだらう、これが即ち語を簡潔にする詩の比喩法である、即ち「心の煩惱」を「心の闇」といひ、「その煩惱の無くなる」のを「晴るゝ」といひ、類似せる他のものと比較したのではなくて、自ら意が掬せられる、又

あはれまたいかに忍ばん「袖の露」野原の風に秋は來にけり（新古今）

今よりは昔語りに心せむあやしきまでに袖「しをれ」けり（西行）

またや見む片野のみ野の櫻狩「花の雪ちる」春のあけぼの（俊成）

の三歌の如き、「涙」を「袖の露」といひ、「涙に袖の濡れる」を「袖しをる」といひ、「雪の如くちる花」を「花の雪ちる」といひ、いづれも暗喩法を用ひしものである、明喩暗喩は、詩の用語としては、缺くべ

からざるもので、新體詩からこの二つを棄て去つたならば、妙は殆ど失はれたも同然である、猶左に暗喩の語例を擧げて參考に供しやう。

胸中の心配事を　胸の「村雲」といひ
心の詞藻などを　心の「花」といひ
熱する心を　思ひに「燃ゆる」といひ
心の心配又は失望などを　心も「消ゆ」といひ
誠ある心を　「赤き」心といひ
無情の心を　「冷たき」心といひ
美くしい少女を　「匂ふ」少女といひ
學びを授くる子供を　庭の「撫子」といひ
學問を勉强するを　「敎草を摘む」といひ

霞のたなびける狀を　霞の「戸張」といひ
松風の音を　松の「小琴」といひ
月の空行く狀を　月の「御船」といひ
文學を稱するに　學びの「林」文の「山路」

右の如きはいづれも暗喩法を用ひたものである。

暗喩を用ゆる注意　さて明喩を用ゆるに就て、數箇條の注意があることは前に述べたが、今暗喩を用ゆるに就ても、亦この注意すべき點のあるを忘れてはならぬ、この注意箇條は左の如くである。

一、混淆せる暗喩
一、暗喩と普通語の混用
一、暗喩を長く連續多用するを忌む

この三の注意である、第一に「混淆せる暗喩」といふのは、二個以上の

暗喩の別のあることは以上いふ所で大概わかつたらうと思ふが猶左に新體詩の作例一篇を擧げて句中の比喩を一々指摘し、比喩がいかに多く用ひられて居るかを示さう。

秋風の歌（花天月地秋の部）　島崎藤村

靜かに來る秋風の　西の海より吹き起り
舞ひ立ちさわぐ白雲の　飛びて行へも見ゆるかな。
暮影高く秋は黃の　桐の梢の「琴の音」に、
そのおとなひを聞く時は　風の來るを知られけり。
ゆふべ西風吹き落ちて　朝秋の葉の窓に入り、
あさ秋風の吹きよせて　夕の鶉巢に隱る。
ふりさけ見れば青山も　色はもみぢに染めかへて、
霜葉をかへす秋風の　「空の明鏡」にあらはれぬ。

清しいかなや西風の　まづ秋の葉を吹ける時、
淋しいかなや秋風の　かのもみぢ葉に來る時。
道を傳ふる婆羅門の　西に東にちるごとく、
吹き漂蕩はす秋風に　飈へり行く木葉かな。
「朝羽うちふる鷲鷹の　明闇天をゆく如く」、
いたくも吹ける秋風の　「羽」に聲あり力あり。
見ればかしこし西風の　山の木の葉を拂ふ時、
悲しいかなや秋風の　秋の百葉を落す時。
「人は利劍を振へども」　げに數ふれば限あり、
舌は時世をのゝしるも　聲はたちまち滅ぶめり。
高くも烈し野も山も　息吹まどはす秋風よ、
世をかれ〴〵となすまでは　吹きも休むべきけはひなし。

あらうらさびし天地の　　「壺の中」なる秋の日や、
落葉を時に飄す　　風の行方を誰か知る。

右の作は、一節目毎に比喩がある、即ち秋風の桐の梢に音立つるを「桐の梢の琴の音」といひ、澄みたる秋の空を「空の明鏡」といひ、秋風の枯葉を吹き捲く勢ひを「朝羽うちふる鷲鷹の、明闇天をゆくごとく」と喩へ、次の句には直ちに「秋風の羽」といひ、「人は劍を振へど も」云々と對句を以て人世を喩へ、小天地を「壺の中」なる秋の日といひ、以上十節の中に六個の長短比喩詞を用ひてある、それでこの六個の比喩を明喩、暗喩の二つに分けて見ると「桐の梢の琴の音」は風聲を隱して喩へたものだから暗喩である、「空の明鏡」も暗喩に屬すべきもので、「朝羽うちふる云々」は天をゆく如くの「如く」を用ひてあるから無論明喩である、「人は利劍云々」も明喩、「壺の中」

は天地の小なるを壺中に比したもので暗喩である、前後の意を熟味してその明喩の差を悟るが宜しい、又

舞子の濱(花天月地春の部)　　佐々木信綱

「淺みどりなる絹のごと」　　和ぎわたりたる海の面、
海士の釣舟ほの見えて、　　淡路島山いと近し。
風のどかなる春の朝、　　天つ處女が降り立ちて、
「波の小琴」にあはせつゝ、　　ひるがへすらん舞の袖。
光さやけき秋の夜半、　　月の都の宮人は、
この松かげにまどゐして、　　饗宴すらしも終夜。

離れ小島(同)　　同

漕ぎ行くまゝに近づきて、　　離れ小島の松原は、
うつし畫よりも美しく、　　あらはれ出でぬ我前に。

「波のしらべ」もかすみたり、　ゆふべの風も吹きたえぬ。
朧に月はさしそひて、　松と花との影淡し、
思へやかくも美しき、　この松原の中にしも、
わがなつかしき戀人は、　まちてあるなり遲しとて。

以上二篇は至つて短かい作であるが、前のは「淺みどりなる絹のごと」の明喩と「波の小琴」の暗喩とを用ひあり、後者も「うつし畫よりも美しく」の明喩と「波のしらべ」の暗喩とを用ひてある、比喩は詩の成立を助くるもので、毎篇必ず無かるべからざるものであるといふことはこの二三の作例を讀でもわかつたであらう。

(二)　擬人法

擬人法の意義　擬人法といふのは、無生物、及び吾人以外の生物

に、體軀、性想、意識、行動とを與へて、生きたものゝやうに叙して行く法である、詩人は何物に對しても深い觀察が無くてはならぬ、その觀察したる詩的の感じをいひあらはすには、この擬人法を以て生動させるのである、假へば「花が笑(ゑ)みの眉を開く」「風怒り浪哮(たけ)る」「鳥悲しむ」「小川のさゝやき」等の如く、風が荒く吹くのは何も怒つて吹くのではないが、それを生物視して「怒る」といふと面白くなる、その他も總べてさうで、これを詩的に考へぬと可笑(か)しく聞えるが、詩として人の感動を起させるは、この擬人法を執らねばならぬ必要がある、それでこの擬人法といふは、激動した感情が言語の上にあらはれたもので、詩の上に擬人法を用ゆるばかりではない、普通の言語にも能く用ひて居る、假へば子供が石に躓(つまづ)いて轉(ころ)ぶや「コン畜生」など〻罵しつて杖で打つたり足で蹴たりする事がある、石は無

生物で、その罵りを受けても打たれても感じるもので無いから、傍でこれを見て居ても可笑しく、自分でも跡で思へば愚であつた事を悟るけれど、これが自然の感情である、この感情を以て歌ふから人の感情にも投ずる事が深いのである。

擬人法の二種　擬人法には二種がある、一は無生物及び吾人以外の生物に、吾人の肉體上、心理上の一二の性質を附與して、さう見立てゝ叙するのと、二は吾人と同樣の性があるものとして、さう見立てゝ叙するとの二つである、この別は例を見た方が了解が早いだらう、例へば

春「老いて」花「窶れぬ」
雲「來りて」山「走り」水急にして石「激」す
家路まで「送らむ」月の影ながら別れてかへる心地こそすれ(景樹)

今はとて田面の雁も「うちわびぬ」朧月夜の明ぼの〻空(寂蓮)

春が深くなつたのを「老年」になつたといひ、花の色が褪めたのを「窶れた」といひ、雲が「來る」といひ山が「走る」といひ、石が「激す」といふのも皆吾人の一部の性質を附與して、さう見立てたのである、又歌の意は「月に後向けて歸るにしても其歸途まで送つてくれるに違ひないのだが何だか別れて歸るやうな氣がして殘り惜しい」の意、次の歌は「春は雁が北へ歸る季節だ、今もう發足ますと云つて田面の雁も名殘惜しさうに別辭を陳べて朧月夜のあけぼの〻空を鳴て行く」といふ意で、吾人以外の生物及び無生物に一二の性質を與へたばかりである、つまりこれには多少形容の意味がある、見立てた意が明かに見えるが、第二は吾人同樣に靈性活動するものとして或はこれと話をしたりする、そこに差を生ずるのである、例へば

天に「問へ」ど、天「答」へず、地に「語れ」ど地「默す」
思ふどちそこども知らず行きくれぬ花の宿「かせ」野邊の鶯(家隆)
花もまた別れむ春は思いでよ「咲きちる度の心づくしを」(殷富門院大輔)
絶へなくにまだきも月の隱るゝか山の端遁げて入れずもあらなん(業平)

歌の意は、「遊び暮して夕立となつたが物は相談だがお前の花の宿を一晩貸してはくれまいか」と鶯に語り「お前も咲た時とちる時の喜び悲しみは同じだらう、この情があるならば私がお前に對する情も思ひ出してくれ」と花に語り「まだ飽きもせぬ内に月は山の端に隱れやうとする山の端が何處へか遁げて行つて月を入れないでくれゝば いゝが、そうすればもう少し見て居られるだらうのに」と山の端に

語りかけたので、いづれも吾人と同じ性を有するものと見立てた歌である、猶今左に第一、第二の作例を擧げやう、「　」の中の語が即ち擬人法の詞である。そのつもりで讀むが好い、

第一の例歌

今日といへばもろこしまでも「行く」春を都にのみと思ひけるかな(俊成)
影とめし露のやどりを「思ひ出で」て露に「あと訪ふ」淺茅生の月(雅經)
はれ曇る影を都に先立てゝ時雨ると「告ぐる」山の端の月(具親)
秋深き淡路の島のあり明に傾く月を「送る」浦風(慈圓)
五月雨の月は「つれなき」み山より獨りも出づる時鳥かな(定家)
時鳥まだ「打とけぬ忍びね」は來ぬ人を待つ我のみぞきく(白河院)

恨みずや浮世を花の「いとひつる」「誘ふ風あらば」と思ひけるをば
（俊成女）

影やどす露のみしげくなりはてゝ草に「やつるゝ」故里の月（雅經）

第二の例歌

「忘るなよ」田の面の澤を立つ雁も稻葉の風の秋の夕暮（良經）

昔思ふ草の庵の夜の雨に「涙なそへそ」山時鳥（俊成）

郭公なほ一聲は「思ひ出でよ」老ひその森の夜半の昔を（範光）

暮れはてぬ「歸へさは送れ」山櫻誰がために來てまどふとか知る
（俊頼）

名にし負はゞ「いざ言問はむ」都鳥わが思ふ人のありやなしやと
（業平）

「忘るなよ」といひ、「涙なそへそ」といひ、「思ひでよ」といひ、「歸へさは送れ」といひ、「いざ言問はむ」といふが如き、皆吾人と同じ性質生命を有し、吾人の言葉（ことば）、言ふ所の意味を知るものとして歌つてある、之れこの作例に就て能く味はふが宜しい。

擬人法の注意　擬人法はかくの如く詩に多く用ひられて居る、それだけに韻文には必要の方法なるに相違ない、然しこれも用ひ方を誤まる時は、滑稽に陷ることがある、西洋の詩文には殊にこの弊があるやうである、それを眞似損なふ時は、妙なものとなつてしまふであらう、例へば、鹽井雨江氏が韻文作法中に擧げた例の中に、小川の流れに擬人法を用ひた一文がある。

衣を洗ふ少女の腕に、可愛い唇を當てゝ、少女の氣のつかない樣に密（そっ）と接吻する。

流れが少女の腕に接吻するといふのは、餘り奇に過ぎて滑稽に感じるでは無いか、この點は特に注意すべきであらう。

新體詩作例中の擬人法　擬人法のいかなるものであるかは既にいひ盡したつもりであるが、猶左に新體詩の一例を擧げて、擬人法がいかやうに用ひられて居るかを示さう。

蛙（花天月地夏の部）　湖處子

長き春日の暮るゝまで、　遊びくらして猶飽かず、
朧月夜にあくがれて、　田中の道をわけ行けば、
何處なるらんから〳〵と、　蛙の「笑ふ聲」すなり。
「あな憎し」とて、覺束な、　畔道傳ひたどり行き、
月影見ゆる苗代の、　中を其處かと窺へば、
とめ來し聲ははや無くて、　思はぬ方にから〳〵と、

蛙の聲は「笑ふ」なり。
音なふ野川飛び越えて、　背の方に追ひ行けば、
月影うつる苗代の、　いづれの中ともわかちなく、
忽ち聲はなくなりて、　惑へる我をから〳〵と、
後よりこそ「笑ふ」なれ。
後々となる聲を、　後々と追ふほどに、
追ひくたびれて今はとて、　もと來し路に去りゆけば、
聲を合せてから〳〵と、　いよ〳〵「笑ふ」聲すなり。

右は全篇を通じて、蛙が自分を嘲り笑ふ如く歌つてある、首尾を通じての擬人法である、又

秋の蝶（花天月地秋の部）　鹽井雨江

露のやどりとなりはてし、　篠の袖垣慕ひきて、

蝶は何をか尋ぬらん、
翼もしのに萎れつゝ。
今しも「汝（なれ）」が行き迷ふ、
若紫のなつかしく、
春はねよげに見えにしが。
「汝（なれ）」が「兄弟（いろせ）」か蝶一羽、
訪ひよる袖を「嬉し」とや、
にほひ初めけりすみれ草。
風も「色めく」花のべの、
蝶はいつしか留まらず、
ゆかりあやしくそめにしを。
ほろ〳〵落つる朝露を、
「はらふ」と見せて菫草、
吹きしく秋の夕風に、
思へば垣ほの下陰に、
綻び初めてすみれ草、
花のべ去らず通ひきて、
朝な夕なに色深く、
きほふ花にやうかれけん、
垣のすみれは濃紫（こむらさき）、

垣ほがくれに「招け」ども、
蝶は日ぐらし花のべに。
花はあとなき花の邊に、
蝶は歸らず垣がくれ、
「待ちて笑み」しが菫草。
野中の清水かれ〴〵に、
菫はもとの色にして、
庭の萩はら葉がくれに。
萩の下葉もうつろへば、
秋は深くもなるなべに、
うつるとせねど菫草。
同じ垣根の「うらみ」とや、
浮かれ心のうかれはて、
いつまで春を「夢む」らん、
なほ紫のゆかしくも、
かれゆく夏もなほあせず、
うもれながらに殘りけり、
垣のしのぶもうら枯れて、
さすがしをれぬ淋しげに、
「共音（ともね）に咽（むせ）ぶ」松虫に、

さすが「慰む」すみれ草、　しをれながらも紫の、
ゆかりの色は「變へず」して。
あらしは荒くあれゆけば、　露は「つらく」もつもりゆき、
さすがに「堪へず」すみれ草、　[illegible]さ霧のみ立つ花の邊を、
「まもる」がまゝに「面たれぬ」。
何に「心もよわる」らん、　翼もとみに「力なく」、
枯れし菫の袖のべに、　落ちも縋りて蝶も亦、
おなじ垣根の「露の伴」。

これは蝶の生物、菫の無生物を、共に靈性活動のあるものとして、其中に成れるやさしき戀を描いたものである、まづ一節に秋の蝶が何を尋ぬるのか露の垣根に慕ふて來りしを叙し、次には作者の地位に復つて、蝶に向ひ「汝」と呼びかけ、春はこの垣根になつかしい色

の菫が咲て居たが「汝」の兄弟とも見ゆる一羽の蝶が毎日この菫の許に通つて來たが菫も其情を「嬉し」と思つたか緣を結んだ、それからは菫は色深く匂も深く見えて居たと叙し、それよりその菫と蝶との戀中を語り出るのである、然るに蝶は岡べの花に浮れて亦菫を顧みず、菫は露を袖に「拂ふ」て蝶を「招く」けれども蝶は一日岡で遊び暮して歸らなかつた、花は散つたが蝶は何の「夢を見て」居るのか歸つて來ない、けれど菫はそれを恨みとも思はずに紫の色ゆかしく蝶の歸るのを「待ち」て「笑み」を續けて居た、世は夏になつて清水も涸る頃となつたが菫はもとの色で夏草の中に埋もれてまだ殘つて居た其後秋となつて萩はちりしのぶも枯れる頃となると流石に菫も「萎れ」て淋しさうな姿となつた、同じ垣根に住む緣で松虫は菫の心を察してやり「共音に咽び」泣きて「恨み」に同情してくれるので菫も爲に

「慰(なぐさ)む」で居た、いつしか又冬近くなつて嵐は荒く露は菫に「辛(つら)く置くので菫もはや我慢にも「堪へ」られず曾て蝶の浮れて居た岡の方を見「まもり」たまゝ面を「垂れ」て枯れ死でしまつた、彼の薄情な蝶も流石に自分も秋の「弱り」に菫の事を思ひ出し尋ねて來たが、もう枯死で居るのを見て悲しみの餘り枯れた菫の「袖」に縋り付て同じ塚根の露のやうに果敢(はか)なき運命を共にして菫の跡を追つて「死でしまつた」といふ小説的の美くしい詩篇である、擬人法を用ひた詩の妙味はこの一篇を能く味はへばわかるであらう。

(三)　諷　喩

諷喩の意義　これは人を諷刺し、或ひは作者の寓意を他の事物にたとへていふ詩の一作法である、自分のいはんとする所を直接にいふ時は露骨になり、且つは詩に最も忌む所の議論に流れるうれひがある、それを避けんが爲に表には他の事物に借り托して、裏面に作者の意を寓する手段である、假へば

牛の子に踏まれな庭の蝸牛角あればとて身をな頼みそ(寂蓮)

の如きがそれで、この歌の表面の意は庭の蝸牛に對する訓戒である、その訓戒の意は「蝸牛よ、汝は角があるといふてもそれを頼(たの)みにしてはならぬぞ、身の分際を知つて愼しまぬ時は角もない牛の子に踏み殺されるであらう」と教へたのである、けれども作者の裏面の寓意は蝸牛に教へたのではなくて人を誡へたもので「僅の才力あるもそれを頼みにすれば必ず過ちがあるであらう」といふ意を含めたものだ、修身道義的のことゝいふものは、直接にいふ時は詩趣を失ひ、角(かど)が立つて理屈に陷る弊があるが、それを他の事物を藉(か)りていふ時は、

角が立たずに、詩趣と談義或ひは訓戒と併立して讀む人に厭な感じを起させぬ德がある、それが詩人の手腕といふものだ。

諷喩の注意　諷喩の作を成さんとするには、表面にあらはれたる所はいかにも美くして、裏面の寓意も明かに讀む人に了解されるやうに作らねば諷喩としての効力が無い、もし寓意、即ち諷喩の意が曖昧で或ひは讀む人に解し難からうかと思つた時には、多少の説明を附けるのも惡くない、その一例として俗謠の中から左の一を擧げて見やう。

種あれば、岩に松さへ生えるぢや無いか、思ふて添はれぬことは無い、

こは上の句に「種さへあれば岩に松の生ずるためしもあり況んやこの一心遂げられぬ理はあるまい」との意を寓したのであるがその一

心とは何であるか人に了解させるわけに行かないから下の句にこれを明瞭ならしめて「戀ひしき人を思ふ一心も丁度あの岩に松の生へたやうに願望達して添ひ遂げられぬことはあるまい」と説明したのである、それで其寓意は、なるべく詩趣を失はざるやうな價値(ねうち)のある寓意であつて欲しい、折角その寓意が分つてもつまらぬことであつて見れば骨を折つて作つた詩も、さまで人の興味を喚ばずに終ることゝなる。

諷喩の作例　今例に依つて諷喩的の作例を擧げるが、これを讀むといづれも表面は普通の詩として見るも見られぬことは無くて、裏面には夫れ〴〵寓意があるのである。

底ひなき淵やは騷ぐ山川の淺き瀨にこそあだ波は立て(素性)

「底の無い程な深い淵といふものは波が騷ぐものでない、山川などの

淺い瀬の所に却つて波が立つものだ」とは表面の意であるが其寓意は「人もその通り遠く深き慮があれば決して禍の來ることは無い、智惠の淺い小人が自ら好んで禍を求むる例である」との訓戒を含んで居るのである。

世の中に麻はあとなくなりにけり心のまゝの蓬のみして（泰時）

これも表面の意は「世の中に麻は跡を絶つて蓬が瀰るやうになつた」といふことであるが寓意は「麻は眞直にはへるものであるから正義の人に喩へ蓬は曲りくねつて生へる者であるから奸邪の人にたとへつまり正義の人は隱れて奸邪の小人のみが跋扈することよ」と慨嘆したのである、これをもし直接に云つて見たらどんなものであらう、試みにその意を作り換て見れば、

世の中は奸邪人の瀰りて正しき人は影かくしけり

かくいはゞ、成程慨嘆した意味は直ちに了解されるが詩としての面白味は少しもない、口で話すのと殆んど違ふ所はない、それを前のやうに蓬麻にたとへていふ時は初めて面白くなりその慷慨の意を人に感ぜしむるとも直接に露骨にいふよりも却つて深いものである。

萠え出づるも枯るゝも同じ野邊の草いづれか秋に逢はで果つべき

（妓王）

これは妓王といふ女が淸盛の寵を失つて其妹の妓女が淸盛に召された時恨を寓して詠じた歌であるが表面の解釋は「萠え出した草も今枯れやうとする草も同じ野邊の草である何時か秋に逢つて枯れなければならぬ運命である」との意であるがその裏面は「萠え出づる草」とは新たに召された妹妓女を指し枯るゝ草とは寵衰へたる己が身を指し「今妹は時めいて居るがその榮華もいつまで續くものでは無い、

今に清盛の寵衰へてこの秋に枯るゝ自分の身のやうに同じく棄てられる運命が廻つて來るであらう」といふ深い意味を寓して居るのである、この歌の意も露骨にいはゞ、

棄てられし我身の運はやがてまた人の上にもめぐり行くらん

かくいふ時は直接となつて詩的趣味がない、只理屈にばかりなつてしまふ、詩が人を感ぜしむることの深い淺いは全く此の區別から起るのである、又

物いへば唇寒し秋の風

今日になつて菊造らうと思ひけり

前者は「多辯は禍を招く」を諷喩し後者は「後悔先に立たざる」を訓戒せしもので、いづれも表面の意味は詩的の趣味を失はない、猶左に諷喩の例に最も適切なる新體詩一篇を擧げやう。

松杉問答　武島羽衣

山もとにおふる杉の樹、
いたゞきの松に語らく、
「我はしも谷に埋れて、
照らす日のめぐみにも漏れ、
世の中のさかえも幸も、
よそにして年を經つるに、
白雲のうへにそびえて、
天の下ゆたに見下し、
世の塵を遠くはなれて、
大空の神にも近く、
日の光たゞにさすらん、
なれこそは羨しけれ。
峯の松答へけるやう、
「高山も世の外ならず、
とりよろふ岩根こゞしく、
ときじくもみ雪つもりて、
夏もなほ吹く風寒み、
幹曲り枝もちゞむを、
大空のあらしをよそに、
たけ高く直く生ひたち、
谷川の清き流れに、
はびこれる根もうるほひて、

やすらかに世を過すらん、　なれこそは羨やましけれ。

これ純然たる諷喩體の新體詩である、松杉の回答にかりて人を訓戒したものである、表面の意は、「山下の杉が己が苦を訴へて山上の松を羨むと、山上の松はこれを喩し慰めて、山上とてもお前の見た程安樂では無い、こゝにも亦苦は免かれぬことは出來ない、却つてお前の境涯が羨やましい」といふのであるが其裏面の寓意は「人は身の程々の分に安んずべきことで分外の望を起すものではない」と訓戒したものである、諷喩の妙は即ち此に存するのである。

(四) 換喩

換喩の意義　換喩といふのは、或る事物の名の代りにそれに關係ある他の名を換て用ゆることである、假へば「櫻花」を單に「花」といひ「書よむ宿」を「書よむ窓」無數の數の代りに「八百萬」といふ類である、櫻は花の一種であるが櫻の「代名詞」に用ひ「窓」は「宿」の一部であるが全體の名に代へて用ひられるのである、換喩には一部の名を全部に通じて用ゆることと、全部の名を一部の名に用ゆることゝある。

全部と一部の名の共通　一部の名を全部の名に換へ用ゆることの例は、

いつしかと今日ぬぐ「袖」は花の色のうつればかはる心なりけり
(定家)

右の歌は更衣の歌で、衣全體のことをいふべきを「袖」といひて全體の意をあはしたものである、袖は衣の一部であるが袖といへば衣全部といふことがわかる、又

昔見し妹が「垣根」は荒れにけり茅花まじりの菫のみして

この歌の「垣根」も住居の一部であるが、住居全部の代りに用ひられてある、次に全部の名を一部の名に代用することの例は

戀ひしくば形見にせんと我宿に植ゑし秋萩今さかりなり（赤人）

この歌は萩を植ゑるのはいづれ「庭」であるが、その庭といふ一部の名に全體の名たる「宿」といふ名を用ひたのである、かゝる類例は一一列擧せずとも歌集を讀めばいくらでも見當るであらう、換喩には「一屬」の名を「一種」の名に用ひ「一種」の名を「一屬」の名に代用し「種類」の代りに「一個」の名を用ひ「一物」の名の代りに其の物の「原料」の名を用ひ「不定數」の代りに「定數」を用ゆることがある、左の例に依つて知るが宜しい。

春は花秋は紅葉をみよしの〻山のかひある住居とぞ知れ

この歌は秋の紅葉に對して春は「櫻」といふべきを「花」といふてある

櫻は花の屬中の一種の名であるが代用したのだ、

たらちねのあらましかはと思ふには寶を見てもねぞ泣かれける（芦庵）

この歌の「寶」といふは「錢」のことで、金錢は寶の中の一種である、これ一種の名の代りに屬の名を用ひたものだ、「屬」の代りに「種」の名を用ゆることは頗る多い、只虫とか草とか木とかいふてもい〻所を「きり〴〵す」「茅草」「槇」など〻一種の名を用ゆる例である、例へば、

村雨の露もまだひぬ「槇」の葉に霧たちのぼる秋の夕暮（寂蓮）

の如きも、何も槇に限らず山の木全體を云ふのであるが單に「木」といふ屬名を用ひずして「槇」といふ種類の名を用ひてある、前に引いた「茅草（つばな）まじりの堇のみして」も、茅草（つばな）に限らず草一面に生えて居た

ことであるが、その中の「茅草(つばな)」といふ一種の名を用ひて屬名たる草全體をあらはして居る、

朧月夜の夕歩き、　梅か香ならぬ方もなし、
笛の音ゆかしみ佇むを、　さのみな咎めそ「翁丸」。

この今樣は「梅が香の匂ふ門に笛の音の聞えるゆかしさに立留つて聞て居るのを其やうに吠えて咎めるな犬よ」といふ意であるが「翁丸」といふ犬の名を用ひてある、この例は丁度「彼は明治の英雄なり」といふべきを「彼は明治の秀吉なり」といふが如く種類の代りに一個の名を用ゆるのである。

我妹子(わがもよ)と共にし寢(ぬ)れば荒拷(あらたへ)に隙間の風も寒しともなし

右の歌は衾(ふとん)といふ「一物」の代りに衾(ふとん)をつくるの「原料」たる荒拷(あらたへ)の名を用ひたものである。

お前百までわしや九十九まで共に白髮のはへるまで

右は「不定數」の代りに「定數」を用ひたもので、何も百や九十九と限つたのでは無い。

代名詞　これは換喩とは少し違ふのであるが、まづ似たものであるから序にこの中に加へて云ふことゝする、代名詞は一事物の名の代りに他のこれと關係ある名を用ゆることで、例へば「老年」を呼ぶに「白髮」を用ひ「小さき子供」を「うなゐ子」といふが如し、老年を白髮といふは說明するまでもなく、小供を「うなゐ」といふのは頭髮の狀を以て代名としたので「うなゐ」は髦髫と書く、代名詞の中にも種種の意味に依つて用ひ方がちがふのである、例へば

故鄕はちる紅葉に埋れて軒のしのぶに秋風ぞふく(俊頼)

この歌の「故鄕」は「古き宿」の代名詞である、宿は里の中に含まれて

居るもの故、里といふて宿といふことをあらはしたものである。

世の中はとてもかくてもおなじこと「宮」も「藁屋」も果しなければ

（蟬丸）

網引（あびき）する「舟」の夜寒を身にしめて寢られぬ妻や衣うつらん（知紀）

前の歌は「富貴の人も貧賤の人もいつまで世に存在せられるもので

は無い運命は同じことである」といふ意で、「宮」も「藁屋」もとは「富

貴の人」「貧賤の人」の代名詞である、後の歌は「網引（あびき）する船に乘て居

る我夫はさぞ寒いだらうと思ひやつては暖かに寢ても居られず妻は

あの通り衣を擣（う）つて居るのだらう」との意で、「網引する舟」の舟は

「舟に乘て居る人」の代りに用ひたのである、これ等も含まれた物の

代りに含有した物の名を用ひたので、宮は貴人の住居、藁屋は賤人

の住居、舟は人を乘せて居るから直ちに其中に含まれて居る人のこ

とに代用したのである、又

いかで猶ほ我れも浮世をそむきなむ羨しきは墨染の袖（尊良親王）

この歌は「主體」の代りに其物の「屬性」の名を用ひたものである、歌

の意は「浮世を背いて法師にならうと思ふ」といふことで、「墨染の

袖」とは「法師」其物を指したのである、「墨染の袖」は即ち法師の身

に着けたる法衣の一部であるが、その袖が衣の代名詞となり、やが

て法師の代名詞となつたのである次に

住みわびぬ今は限りと山里に「つま木こるべき宿」もとめてん（業平）

「とんぼつり」今日は何處まで行つたやら（千代女）

前の歌は「世の中が飽きたから一層（そ）山里に引込で山樵（きこり）の身となつて

しまひたい」の意で、「つまぎこる宿」とは「山人の身」といふに代へ用

ひたのだ、後の發句の「とんぼつり」は「子供」の代名詞で、子供の遊びを以て直ちに子供の代名詞にしたのである、之れ等も主體に易へるに屬性の名を以てしたものであらう、其他「武士」「武家」を稱するに「弓矢とる身」「弓矢の家」を以てするも同例に屬すべきである、かかる換喩、代名詞の如きは、いづれも詩作上、語句の平凡に陷るを避け、奇警な語句を成すべく用ゆることで、詩作家の慣用手段といふべきである。

(五) 過稱

過稱の意義　過稱とは景容詞の誇張なるものである、即ち一事物を描出するに、實際よりも大きくいふか、小さくいふかする方法である、これも新體詩の修辭上能くある例で、普通の理屈から云へば

あるまじきことも、詩語としては少しはかまはないのである、例へば李白の詩に「白髮三千丈、緣レ愁似レ個長」とか、項羽の「力拔レ山兮氣蓋レ世」とか蕪村の句の「心太逆しまに銀河三千丈」とかいふのは、皆誇張の語で、然も實際を離れて實際を表はしたものである、いかに愁は積るとも白髮が三千丈にのびることは無いの、いかなる力でも山を拔くことは出來ないのと、理屈をいふのは詩の趣を解せざるものである、殊に心太が銀河を逆にしたやうに長さが三千丈もあるといふのは一面から見れば仰山のやうであるが、而も箸の先へ引かけて口へ吸ひ込むその形容がおのづから目に浮ぶやうな心地がして、決して其過稱が耳にも感じにもさはらないでは無いか、これが詩の趣といふものである。

過稱の用法　過稱は詩作の法則として或時は必要なものである、

例として左に類似せる二例歌を擧げやう、

津の國の難波の春は「夢なれや」芦の枯葉に風わたるなり（西行）

津の國の難波のうらに來て見れば茂りし芦も霜枯れにけり（慈圓）

この二歌は同じ着想で同じいひ廻しである、然るに西行のは「夢なれや」といふ過稱を用ひて、芦芽寸綠を抽き、新漲汀を洗ひしその春の景色は跡もなく今は芦の枯葉に風が淋しく吹き渡つて居る、其風色の一變を夢であるといふので歌の面白味が生じ慈圓の歌に優る事數等の差を見るのである、又彼の後德大寺左大臣の歌で

時鳥なきつる方をながむればただ有明の月ぞ殘れる

といふを後人が俳句に直して、

さてはあの月が啼たか時鳥

と云つて居る、落ちかゝる月を橫切つて時鳥の一聲鳴渡つたる刹那

の詩興はいづれも同じであるが、その少しも燒直しの痕跡が見えないのは、俳句の方は「月が啼たか」といふ過稱を用ひてあるからだ、時鳥が月前を鳴き過た影も見えざるを、月が聲を發して鳴たのかと云つたので活きて居るので、これをもし

有明の月に啼き過ぐ時鳥

と云ふたなら、歌を其まゝ應用したといふまでゝ何の新奇な點も見出されず、つまらぬ俳句となつてしまふであらう、之等が過稱の面白い用ひ方といふものである、猶序に左に三四の例を示すであらう。

夏の夜は臥すかとすれば時鳥「なく一聲」に明くるしのゝめ（貫之）

何も時鳥の一聲の爲に夜が明けたでは無いが、それを過稱法を用ひて、かく云はゞ詩の妙味が出て來るのである、

君が代は千代に八千代にさゞれ石のいはほとなりて苔のむすまで

（古今集）

小さな砂のやうな石が大きな巖石となつてそれに苔がむす迄とは隨分長い年代のことである、これも過稱の一つであるがかう云へば君が代の長くあれかしと願ふ心が能くあらはれるのである、又同じやうな歌で

君が代は天の羽衣まれに來て撫づとも盡きぬいはほなるらん

といふも同じ過稱で、天女が稀に天から降りて來て、羽衣で撫でるけれども巖は少しも減らぬ、そのやうに君が代は殆ど盡る期はあるまいといふこれも隨分思ひ切つた過稱である、かく巧みなる過稱を用ゆる時は、詩の妙味を助くること頗る大にして、作詩上極めて必要なる修飾法の一たるを失はないであらう。只注意すべきは、過稱があまりに大袈裟に過ぎると却つて滑稽に陷ることである。

(六) 反稱と美稱

反稱の用法　反稱といふのは、自分のいはうとする事と反對の詞を以ていふことで、其爲に却つて云はんとする意を強くするの利がある、正面より露骨にいふよりも、裏面からした方が圓滑で、そして強いのは演說でも文章でも同じことである、況んや詩といふものは元來露骨を嫌つて圓滑なるを妙とするのであるから、この反稱も場合に依りて必要なものであることはいふ迄もない、例へば

逢見ての後の心にくらぶれば「昔はものを思はざりけり」

この歌の下の句は、只考へれば「昔は少しも物を思はなかつた」と聞えるが、これが即ち反稱であつて、「逢ふてからは猶戀しくなつた、その後の心に比べて見ると逢はぬ前の物思ひは何でもなかつた」と

いふ内に、その前の物思ひもいかに深かつたかゞ分る、これが反稱の妙である。

美稱の用法　これも新體詩に必要なことである、詩には美辭麗句をいかに多く用ひても、讀む人に惡感を起させるやうな意味の語があつては折角の語が何にもならなくなつてしまふ、その惡感を抱かしむるやうなものと云へば、死などは其最も厭な語である、美稱は即ちそれを避けて、他の語に言換へてこの代用をなすのである、例へば人の死することを「眠る」「隱る」「逝く」といひ、「死別」を「さらぬ別れ」などいふが如きこれである、「墓」といふも、いひやうに依つて厭な感じがする「墓の中の人」といふを他に美稱を以ていはんとならば「苔の下なる人」といふのである、曾て某の俳句に

釘を打つ棺の響やそぞろ寒

といふのがあつた、それを亦さる大家が評して、棺に釘を打つ響は面白い見付け所ではあるが其の音たる、美なる感じは少しも無くして厭な感じが起る、と云つてあつた、今この句を美稱を以てすれば

生垣に通夜の灯漏るやそぞろ寒

と云はゞまづ厭な感じは起るまい、一つは棺を打つ響と一つは通夜の灯影で目に付くのと目に見るものとの違ひはあるが、通夜の灯影の方が哀れに見えて少しも厭な感じがあるまい、美稱の要はこの點に在るのである。

第六章　飾形法

前章に述べたのは、意義に基く修辭法、即ち轉意法で、內容にのみ關する修辭法であるが、飾形法は措辭に基く修辭法である、言ひ換れば轉意法は、意味を詩的にいひ現はす法、飾形法は意味に關せず、唯外形の詞を巧妙に排置する方法である。

飾形法の種類　飾形法も轉意法と同じく種類が頗る多いが、その新體詩を作るに當りて知らざるべからざる主要なる方法を擧ぐれば（一）重音（二）重言（三）重形（四）對偶（五）轉裝（六）疑問（七）漸層法（八）省略（九）緣語（十）懸詞（十一）序詞、枕詞（十二）典故、詩語等である（この種類の名は鹽井雨江氏の分類せしものに因る）今一々この種類に就て說明解釋を試みやう。

（一）重音法、重言法

重音法と聲調　重音法は古來の歌に多く用ひられて居るが、その要は聲調の美を助くる事が多い、例へば

吉野なるなつみの川の川淀にかもぞなくなる山かげにして（古今集）

かはづなくかんなびがはにかげ見えて今かさくらん山吹の花（古今集）

さむしろもさゆる霜夜に夜もすがら遠の里には衣うつなり（堀河百首）

この數首の歌の如く一篇の中に同じ音を繰り返すのである、勿論これは殊さらに聲調を好からしめんためにしたものばかりではあるま

い、中には自然に重音となつたのもあらう、故にこの法を用ひんと初めから心がくる者は猶さら、故意とらしくなく自然に出た如く聞えるやうに作らねば却つて聞苦しいものとなる。

重言の用ひ方　重言の用ひ方も聲調を好らかしむるにある、重音は同音を繰返すに過ぎぬが重言は同じ語句を繰返すのであるから一層巧みでなければならぬ、例へば

月夜よし夜よしと人に告げやらば來てふに似たり待たずしもあらず

難波津に咲くや此花冬ごもり今を春べと咲くやこの花

山城にいしけ鳥山いしけ〳〵我が愛妻にいしけ逢はんかも

足曳の山の雫に妹まつと我が立ちぬれぬ山の雫に

召せや召せ夕げの妻木はやく召せ歸るさ遠し大原の里

君がため木曾の山路雲わけてまた去ぬらんか木曾の山路

これは一篇の中に同言を繰返したのであるが、新體詩に至つては、二行三行の長きをも繰返す例がある、例へば

はてなき海（花天月地雜の部）　獨歩

月の光にさそはれて、　大海原をたゞよはん、
とこよの岸は何處ぞや、　そよぐ潮風心せよ。
果なき海と思ひてし、　いにしへ人はさちなりき、
雲間はるかに見わたせば、　波のかなたは果もなし。
わが帆ゆたかに孕みたり、　月はさやかに照すなり、
そよぐ潮風心せよ、　とこよの岸は何處ぞや。
波に碎くる月影は、　常世に通ふ路なるか、
月に漂ふわが舟は、　空に浮べる雲なるか。

空や海なる海や空、
われは常世の民にして、
わが帆ゆたか孕みけり、
常世の岸も程近し、

吾や月なる月や吾、
常世は今のうつゝなる。
月はさやかに照すなり、
そよぐ潮風心せよ。

重言の中で、單に一首の聲調を助けんばかりに用ひらるゝ例がある、例へば

伊香保のやいかほの沼のいかにして戀しき人を今一め見む（素性）

春霞立てるや何處みよしのゝよし野の山に雪はふりつゝ（古今集）

あづまやのまやのあまりの雨そゝぎ我が立ちぬれぬ此戸開かせ（催馬樂）

いざわれを人な咎めそ大船のゆたのたゆたにもの思ふ頃ぞ（古今集）

これ等は調の上ばかりに言葉を重ねたに過ぎぬ、重言法を用ひた爲に別に意を切ならしめた所は無い。

（二）重形法

重形法の用ひ方　この法は同形の語句を重ねて用ゆるのである、或る場合には聲調を緊切にし又は流麗ならしむることを得るの良法である、例へば

秋はきぬ、紅葉は宿にふりしきぬ、道ふみわけてとふ人はなし（古今集）

日もくれぬ、人もかへりぬ、山里は峯の嵐のおとばかりして（後拾遺集）

秋も秋、今宵も今宵、月も月、處も處、見る君も君（同上）

五月山、卯の花月夜、時鳥、きけどもあかずまたなかんかも（新古今集）

時雨けり、走り出にけり、晴れにけり（惟念坊）

の如き、重ねたる一句毎に獨立したる詩想の一部分にして、他の語に換ふべからざるものである、新體詩には殊にこの例が多い。

重形法の一體　なほ重形法には行をも節をも重ぬることがある、その例は

今　様

花橘も匂ふなり、
夕ぐれさまの梅雨に、

慈　圓

軒のあやめもかをるなり。
山時鳥名のりして。

松の蟬

月の桂も手折るべし、

稅所敦子

言葉の花もかざすべし。

月の桂は手折るとも、
時雨に染まず降りつもる、
松の操を守らずば、

言葉の花はかざすとも。
雪にたわまぬ常磐木の、
世に立つかひやなからまし。

鹿　笛

萩の花ちる草むしろ、
小笹が原の露の床、
松の緑の紅葉して、
かたみに心かはらじと、
思ひます穂の糸芒、

正岡子規

月にあかせしむつ言も、
雨に忍びしかね言も。
山海となる時もあれ、
契りしこともなか〳〵に、
亂れくるしき此の頃よ。

慈圓と敦子の今様とは一行の同形を重ね、子規子のは二行の同形を重ねて居る、彼の太平記東下りの文の冒頭「落花の雪にふみ迷ふ、片野のみ野の櫻狩、紅葉の錦きて歸る、嵐の山の秋の暮」といふも二行

の重形である、猶三行、四行、一節の同形を重ぬる例があるが一々例は擧げない、この重形は古來の所謂對句といふも同じことで、新體詩には必要なる方法である。

（三）對偶法

對偶法の詩味　對偶法といふのは、一物をいふに當り、それと反對の物を對して一句の色彩を美麗に明晰ならしむる法である、例へば「紅葉」に「青松」を對照するが如し、物は反對でもその爲に紅葉の紅なる景が自ら浮び出るのである、綠と紅とを對照するに「萬綠叢中紅一點」といふ時は即ち對偶法となる。

群山の高嶺々々をつたひ來て富士の裾野にかゝる白雲（景樹）

この歌も對偶法に依つて富士の高さを現はして居る、他山の高嶺を

傳つた雲も富士に來ると裾野であると云ふて、高嶺と裾野を對し富士の群山を拔て高いのを明かに現はして居る、猶二三の例を擧ぐれば、

大井川かへらぬ水に影見えて今年も咲ける山櫻かな（景樹）

宿かさぬ人のつらさを情けにて朧月夜の花の下臥（蓮月）

君が爲惜しからざりし命さへ長くもがなと思ひけるかな（後拾遺）

夕雲雀芝生に落ちて聲やめば山よりのぼる春の夜の月（契沖）

「かへらぬ」に「今年も咲ける」、「つらさ」に「なさけ」、「惜しからざりし」に「長くもがな」、「芝生に落ちて」に「山よりのぼる」の對照はいづれも一首の歌を面白くして居るでは無いか、これを短かき成語に見るも猶面白い例が多い。

佛も、昔は凡夫なり。我らも、遂には佛なり。

年々歳々、花相似たり。歳々年々、人同じからず。
言を寄す、紅顔の美少年、憐むべし、半死の白頭翁。

いづれも對照の巧妙を極めて居る、新體詩は殊にこの對照の妙が無くてはならぬ、左に一作例を擧げて、對照法の參考に資するであらう。

僧元恭を送る（花天月地離別の部）　鐵幹

あゝ蕞爾たる小島國、
奇才を容るゝ地にあらず。
行けよ行け、
崑崙の山雪さえて、
恒河の流浪あらし。

丈夫稜々の俠骨を、
一片の「袈裟」革命の、
慈悲忍辱の「金剛杖」、
　大我はやがて無我にして、
　惡魔は菩薩の變化とか。
人を殺すも人を活かす、
曠世の志斗大の膽、
成るも成らぬも試みて、
はからず今夜相逢ふて、
いでや盡せよ一杯を、

さらすに不足あるべきや。
「血汐の旗」に染め出でゝ、
「太刀」にかへむも面白し、
　佛意にかなふ道理あり。
　人は無賴といはゞいへ、
　斃れて後にさて已まむ。
　呵々一笑す酒の前、
　生別死別また問はじ。

「崑崙の山」に「恒河の流」を對照し「雪」に「浪」を對し、「袈裟」に「金剛杖」「旗」に「太刀」を對し、「大我」に「無我」「惡魔」に「菩薩」の對照、

いづれも詩の妙味を添へて居る、對照の妙は詩の死活である。

（四）倒句法

倒句法の必要　倒句は新體詩には必要なものである、何となれば、その語數に制限があつて或ひは七五調、五七調といふ範圍で語を配列するのであるから、つひには平板單調に陷つて、調子がダレて來るが、それを破るにはこの倒句法を用ゆるに如くはない、且つ散文にはこの倒句といふものなく、詩の特得の方法であるから、散文の緣を離れやうとするには、倒句法を用ゆるに限る、例へば

今日よりはかへりみなくて大君の醜（しこ）の御楯といでたつ吾れは（萬葉集）

この歌は下の「吾れは」を頭に反（かへ）して見るべき格である、又

ちぎりきなかたみに袖をしぼりつゝ末の松山波越さじとは（古今集）

これも普通の順序に因ると、「ちぎりきな」の一語は「越さじとは」の下にすぐ着（つ）けて見るのが當然だが、倒句法を以て首尾に轉倒さしたものである、又最も錯雜した倒句法の一例として見るべき歌は

忘れては、夢かとぞ思ふ。思ひきや、雪ふみわけて、君を見むとは。

この歌を普通のいひ方にすると、

雪ふみわけて、君を見んとは、思ひきや。忘れては、夢かとぞ思ふ。（業平）

といふのが順であるが、かく轉倒させて云つたので雪中に故人に會した喜び悲しみの情が表はれて居る、新體詩には毎句毎にこの倒句

法が用ひてある、その一例を示さうならば、

春の日（花天月地春の部）　島崎藤村

「誰かおもはん」、鶯の、　涙もこほる冬の日に、
若き命は春の夜の、　花にうつろふ夢の間と、
あゝよしさらば美酒に、　うたひてあかさん「春の夜を」。
梅のにほひにめぐりあふ、　春を思へば人知れず、
から紅の顔ばせに、　流れてあつき流かな、
あゝよしさらば花影に、　うたひあかさん「春の夜を」。
わが身一つも忘られて、　思ひわづらふ心だに、
春の姿をとめくれば、　袂に匂ふ梅の花、
あゝよしさらば琴の音に、　うたひあかさん「春の夜を」。

右の新體詩中、「誰か思はん」の一語は、四句目の「花にうつらふ夢の間と」に入るを順とすべく、其以下の「春の夜を」はいづれも「うたひあかさん」の上に反して見るが普通である、この通り倒句法は新體詩に多く用ひられて居る、殊さら晦澁ならしむる爲に倒句を用ゆる必要は無いが、場合を考へて用ゆる時は、面白くなるであらう、この他和歌の中から二三の例を示して置かう。

山里は冬ぞ淋しさ勝りける「人目も草も枯れぬと思へば」（源宇平）

忍ぶれど色に出にけり「我戀はものや思ふと人の問ふまで」（平兼盛）

おほけなく浮世の民におほふかな「我たつ杣に墨染の袖」（慈圓）

の如きごれも下の句を、上句にかへして見ると能く意味が分る。

（五）疑問

疑問の目的　疑問は、物を定めて云はないで、殊更に問ひかける形を用ゆるのである、その疑問が實際に疑はしいのでは無い、心では決して居てもわざと表だけに疑ひの詞を弄するのであるたとへば、

君ならで「誰にか見せん」梅の花色をも香をも知る人ぞ知る（古今集）

梅花の色も香も知る人にこの花を思せたいがさて誰にしやう、「君だらうか、君の外には誰だらう」と猶他に人を求むるやうな疑問の詞を挾んでは居るが、其中に自ら「君の外には誰にも見せまい」といふ意が見えて居る、而して疑問の目的もそこにあるので、自分の意を最も強く人に知らさするの方法である。

疑問の形　疑問の形にもさまゞゝないひ方がある、頼政の歌で、

今宵「誰れ」すゞ吹く風を身にしめて吉野の花の月を見る「らん」

といふのがある「誰れ」と疑ひ、「らん」と疑ふては居るが心には當があるのである、「誰が見て居るだらう、嗚呼あの人が見て居るだらう」といふ餘情を言外に語つて居るのである。

猫の子も鼠とるべくなりにけり「いかに暮し〻月日なるらん」（景樹）

上の句は猫の上であるが、下の句は自分の事をいふのだから疑問の必要はないやうなものだ、それに「自分は猫が鼠とるまで大きくなつた内何をして暮して居たことであらう」と疑ひの形を用ひて居るが其實は「矢の如き光陰を徒らに暮したことが殘念である」と嘆息の意が言外に酌まれるのである。

（六）漸層法

漸層法　漸層法といふのは、同じやうな語を重ねて語勢、意義を切にする法である、彼の演説や論文などにいふ「三段論法」といふやうなもので「彼は無情の人なり、彼は惡人なり、彼は惡魔なり」と重ねていふ時は、其人物がいかにも惡人らしく聞えて人の感を引くことが痛切になる。例へば

獅子に勝つものは、勇者なり、世界を征服するものは勇者なり、自から克つものは更に勇なる者也（ヘルデルの作）

白刃をも踏むべし、烈火にも投ずべし、中庸は能くすべからず。

といふが如く、この法は次第に語勢意義強くなつて、最後にいふ事物に對する感を痛切になすべく引入れる手段である、例へば戀をいはんにこの法を用ひて

砂糖は甘し、蜜は砂糖よりも甘し、更に蜜よりも甘きものは戀の

情なり。

といふ時は、戀の情のいかに切なるものであるかを讀者に感せしむること深いであらう、二三の例を擧ぐれば

「日は暮れぬ」、「人は歸りぬ」。山里は峰の嵐の音ばかりして（新古今集）

とへば「いふ」、とはねば「恨む」。武藍鐙かゝる時にや人は「死ぬ」らん（伊勢物語）

「一昨年」も、「去年」も、「今年」も、「一昨日」も、「昨日」も、「今日」も、わが戀ふる君（六帖）

「召せ」や「召せ」、夕げの妻木、はやく「召せ」、歸るさ遠し大原の里（景樹）

（七）省略法

省略の要　詩には音數語數の制限があるから、冗漫な文字を用ゆるを許さない、省略法の必要なる所以である、省略法は散漫の弊を去るばかりでなく、詩として貴ぶ所の餘韻もこれが爲に生ずるのである、詩は餘りに能く解り切るよりも、讀む人に詩味を考へ味はうべき餘地を存せしむるを上乘とする、それにはこの省略法が必要なのである。

省略法の例　今左に例を擧げて、省略の方法幷びに含蓄の餘韻がどのやうに生ずるかを說かう。

「五月山、卯の花月夜、時鳥」、聞けどもあかず又鳴かんかも

この歌は、普通には「五月山の卯の花月夜になく時鳥よ」といふ

べきを省略して名詞のみを並べたのであるが、それでも意味は能く通るのである、又第四句も「一聲聞けども飽かず」といふべきを單に「聞けども飽かず」と云ふて下に「又鳴かんかも」の又でこの意を聞かして居る頗る巧みな省略法である。

久方の光のどけき春の日にしづ心なく花のちるらん（紀友則）

この歌も三句目の「春の日に」の下に「など」といふ語があるべきであるがそれを省略したのである、それでも「かくも長閑なる春の日に何故に花は騷々しく散ることであらうか」と云ふ意味は能く通ずるのである、總て韻文には「動詞」や「說明詞」や「接續詞」やを省略する方法を取る、甚だしきは句までも省略する例がある。

句を省略せし例　前にも引いた歌ではあるが、景樹の

追ひしきて取りかへすべきものならばよもつ平坂道はなくとも

の如きはそれで、その下に「我は追ひ行かん」の一句あるべきを省略したのであるが、その意は言外に聞取れるのである、これが即ち餘韻といふものである、其他

敷島の大和心を人問はゞ朝日に匂ふ山ざくら花（宣長）

ふりつもる高嶺のみ雪とけにけり清瀧川の水の白波（西行）

の歌は、前のは「朝日に匂ふ山櫻を以て答へむ」「水の白波の高く立つを見れば」といふべきを省略したのである。

接續詞の省略　次に接續詞を省略したものでは、

花におく露、小笹の霰、こぼれやすきは我なみだ。

の如きがそれで、これは第二の句の間に「その如く」に我涙もこぼれ易いといはねばならぬのを省略したのである、接續詞は殊に新體詩などにて使ふのは面白くない、なるべく省略して言外に意を聞かせる方が宜しい。

名詞の省略　韻文には種々の省略法があるがその中には名詞の省略法もある、例へば

鳰鳥の葛飾早稲の「新しぼり」酌みつゝ居れば月かたむきぬ（眞淵）

玉川にさらす「手づくり」さら〳〵に昔の人の戀ひしきやなぞ

「新しぼり」とは「新搾り酒」の酒を省略したもの、「手づくり布」の布を省いてきかせたものである。

省略法の注意　省略法に注意すべきは餘りに省略に過ぎて意味不明に陥ることである、彼の俳句に、

目に青葉山郭公初松魚

といふのがある、一誦何の意なるやに苦しむが、その解釋を聞けば、目に青葉を見、耳に山郭公の聲を聞き、口に初松魚を味はふ初夏の

興を云ふたものであるさうだ、解釋を聞けば成程と思ふが、句の上ばかりでは到底解せられない、素より俳句は多くの詩形の中で、最も短詩形であるから猶さら省略は必要であらうが、かく省略に過ぎてはつひに意味不明瞭に終るを免かれない、つまりは無理な省略法を行ふからで、省略法にも亦一定の法規があるから、それに從つて省略するなら、決して分らないことは無いのである、又省略に就てかういふ難のある歌がある、新古今に俊成の歌で、

さゞなみや志賀の濱松ふりにけり、誰が世に引ける子の日なるらん

といふのである、この下の句の「子の日」とのみあるは「子の日の松」の松を省略したもので、無理なる省略法だと難ずる人もあるが、上の句に志賀の濱松とあるのだから下の句にたゞ子の日とのみ云つて

も、子の日が引けるものではないから、無論子の日の松といふことだとは誰しも了解がつく、凡そ了解される程度の省略ならば、少しは無理でも決して差支えはあるまい、尤も初心の人は餘り無理な省略法を用ひぬが宜しい。

（八）緣語

緣語の美　緣語は詞藻の餘技である、關係ある語を相連ねるのをいふ、緣語によりて一語は一語を生み、句を成し節を成しつひに一篇の美くしき詩を成すのであるから、措辭の修飾としては缺くべからざるものである、この一例を擧ぐれば、

難波江の芦のかりねのひとよゆゑみをつくしてや戀わたるべき

（千載集）

の如きは、縁語を以て殆ど一首を成して居る、江から水邊に生ふる芦を出し、芦から刈るにかけて假寝といひ又よといふ語を出したのだ、よとは竹や芦の一節の間をいふ、更に江に縁のあるみをつくしといひ出した、みをつくしは水の深淺を知らする爲に立つる棒である、それから又わたるといふまで江の縁を離れない、淨瑠理などは殊にこの縁語を以て、文を成し調子をつくつて居る、一例を擧げて縁語の妙味を示さう。

菅原傳授手習鑑（一節）

一字千金二千金、三千世界の寶ぞと、敎ふる人に習ふ子の、中にまじはる菅秀才、武部源藏夫婦の者、いたはりかしづき我子ぞと、人目に見せて片山家、芹生の里へ所替、子供集めて讀み書きの、器用不器用淸書を顏に書く子と、手に書くと、人形書く子はあたまかく、敎ふる人は取りわけて、世話をかくとぞ見えにける（中略）冥土の旅へ寺入の、師匠は彌陀佛釋迦牟尼佛、六道能化の弟子となりさいの河原で砂手本、いろは書く子をあへなくも、ちりぬる命せひもなや、明日の夜たれか添乳せん、らむ、うい目見る親心、劍と死出のやまけふこえ、淺き夢見し心地して跡は門火にゐひもせず、京は故郷と立ち別れ、鳥邊野さしてつれ歸る。

手習といふことから縁を引て結末迄その縁を以て語を弄して居る、これ技巧とのみ見るべからず、詩の修飾法としては最も面白い方法ではあるまいか、但しその巧をのみ求めて縁語多きに過ぐる時は纖巧に流れる弊害が生じてくるのは止むを得ない、その點は愼むべきである。

縁語の例　縁語の修飾法を用ひたる作例二三を擧げやう。

瀧の音は絶えて久しくなりぬれど名こそ流れてなほ聞えけれ（公任）

わがせこが衣の裾を吹きかへしうらめづらしき秋の初風（古今集）

青柳の糸よりかくる春しもぞ亂れて花の綻びにける（貫之）

わびて世にふるやの軒のなはすだれ、くちはつるまでかゝるべし

やは（景樹）

緣語の妙味は以上の歌を讀み味はひて知るが宜しい。

緣語の弊　何でも用ひ方を誤まれば弊の起るはまぬかれぬが、緣語も強て技を弄せんとする時は不自然となり、輕浮の調となり、詩としての興味を殺ぐことゝなる、例へば

蓮葉の池に開けて花咲けば宿のすだれは更にこそ卷け

山寺の花は殘りて鐘の音に今日も暮れぬと人の散りゆく

秋風に薄の糸をよらせつゝたがぬひ出でし草の袂ぞ

の如き歌は、不自然な巧を弄したに過ぎずして滑稽に陷つてしまつた、緣語の妙も用ひ方一つであることを忘れてはならぬ、又緣語の一種で數の順序などで緣を求めたものがある、即ち

いにしへの奈良の都の八重櫻けふ九重に匂ひぬるかな（伊勢大輔）

の如きはこの一例で、數字の緣語である、かくの如きは殊に巧みに用ひないと弊を生ずる。

（九）懸詞、枕詞、序詞

懸詞の妙趣　懸詞は日本の韻文にのみ見る詞で、特長のものと云ふても可い、これも濫用すれば滑稽に陷り風韻を害することがあるが、巧みに用ゆれば聲調を流麗ならしむる利がある、殊に懸詞は一語

にして二意を兼ぬる特長もある、例へば

君偲ぶ草にやつるゝ故郷は松虫の音ぞかなしかりける

この「偲ぶ」は「君を思ふ」といふ偲ぶと「忍ぶ草」のしのぶとを一語にて兼ねしめたものである、其他

きりぐ〳〵す鳴くや霜夜のさむしろに衣かたしき獨りかもねむ（新古今集）

かきくらし猶ふる里の雪の中に跡こそ見えね春は來にけり（同上）

思ひ出づる折りたく柴の夕けふり咽ぶもうれし忘れ形見に（同上）

などの如きそれで、霜夜の寒きにかけて狹筵といひ、雪の降るにかけて故郷といひ、思ひ出る時にかけて柴を折るといひ、いづれも兩樣の意味を有して居る、又同音の緣に依りていひかけたのがある、例へば、

衣うつ音は枕にすが原やふしみの夢を幾夜殘しつ（新古今）

これやこの行くもかへるも別れては知るも知らぬもあふ坂の關（後撰集）

見わたせば神もなるとの夕立に雲たちさわぐ淡路島山（景樹）

の如きそれである。

懸詞がいかに聲調を助けて、歌ふに適するかは、古來の淨瑠璃、長唄などの類が、いづれも懸詞をのみ用ひて語句の連續をはかつて居るかを見てもわかる、今淨瑠璃の一節を抜て、懸詞の妙所を示さう。

心中二枚繪草紙　近松門左衛門

既に今年の酉もたち、犬の顔見世朝木戸を、あけぼの深く提灯の影きら〳〵と初霜の、おきなの酉のにこやかに、始り呼ばふ聲に引かれて、老も若いも見る人は、餘念なじみに御贔負に、ようおで

んやつた朝日影、御代も御國も久方の、この日の本の慣はしの、歌を種なる謠物、天地を動かし鬼神を感ぜしめやかに、妹背も猛き武夫も、心やはらか饅頭や。

懸詞から次の詞を生んで行くの面白味は、韻文ではあまりにしつこいが、程よく用ゆれば面白い、餘り拙ない懸詞を用ゆる時は、滑稽になつてしまふから、これは注意を要する。

序詞と枕詞　「序詞」といふのは唯下の句を起さんがために用ゆるもので、一篇の詩想には何等の關係なき無意味のものが多い、「枕詞」は梓弓（春）、久方の（日）、足引の（山）、といふ如く、春、日、山をいひ出さんがために置きたる詞に過ぎざれど、これが爲に聲調を整へ語句を優美ならしむる利なきにあらず、けれども一の修飾詞であるから、無暗に場合もかまはずに用ゆる時は、徒らに古人の口眞似をするばかりで、何の妙趣をも添へぬ冗語となつてしまふであらう、

左に序詞の例を擧ぐれば、

足引の山鳥の尾のしだり尾の長々し夜を獨りかも寢む（柿本人麿）

ゆらの戸を渡る舟人梶をたえゆくへもしらぬ戀の道かな（曾禰好忠）

筑波ねの峯よりおつるみなの川戀ぞつもりて淵となりぬる（陽成院）

淺茅生の小野の篠原しのぶれどあまりてなどか人の戀しき（參議等）

風ふけば沖つ白浪たつた山夜半にや君がひとり越ゆらむ（伊勢物語）

の如き各首いづれも下の句をいひ起さんが爲に上の句を置けり、「長長」をいはんがために「山鳥の尾のしだり尾」といひ、「ゆくへも知ら

ぬ」をいはんが爲に「ゆらの戸を渡る舟人梶をたえ」といひ、「戀ぞつもりて淵となる」をいはんが爲に「峯よりおつるみなの川」と置き、「しのぶれど」をいひ出さん爲に「小野の篠原」といひたる如き、上の句が別段下の句に意味を有するにあらざれど、調を整へんために置きたるに過ぎない、只序詞は音の縁によるものと意味の縁によるものとの二つがある、上に引ける歌の「長々し夜」「ゆくへも知らぬ」「戀ぞつもりて淵となる」は意味の縁によりしものにて、「小野の篠原しのぶれど」は音の縁によつたものである、「枕詞」は序詞の短かいやうなもので、これとても一篇に關係のある詞ではない、例歌は引くまでもない、上に擧げた歌の「山鳥」の枕詞に「足引の」と置いたのは即ち山の枕詞である、つまり序詞、枕詞は一篇の詩想に關係なきものであるから、詩想を本とする韻文には好んで用ゆべき語ではない、時と場合によりて聲調をたすくる爲ならば差支えないが、濫用するは注意すべきである。

（十）典故、詩語

典故　典故とは、古への名句を疊み込で、聯想の妙味をつくる作家の手段である、例へば

梅の花誰が袖ふれし匂ひぞと「春やむかし」の月に問はゞや（新古今集）

この歌は彼の業平の「月やあらぬ春やむかしの春ならぬわが身一つはもとの身にして」の一句を取つて洒落れたのである、謠曲などには殊に古の名歌を取つて、句中に疊み込んだものが多い、場合に依りては作家自らが語句を作るよりも古歌を引てかへりて情致を添ゆ

ることがある、これも作家の手腕如何によることではあるが、もし拙いと徒らに剽竊となつて、作家の働きを沒することゝなるであらう。

詩語と文章語　詩語のことは前章にて詳說する所があつたが猶漏れたことがあるから此に一言云つて置きたいのは、語に詩語と文章語との別が立つて居るものがある、其二三の例を擧げやうなら、文章で「如く」といふのを詩では「ごと」といふ、文章では「ごと」といふを許さない、詩で「てふ」といふのを文章では「といふ」と云ふを例とする、又「きり〴〵す鳴くや」だの「近江のや鏡の山」などに於けるや字は意味の無い輕いや字で、これも韻文に限られて居る、その他澤山あらうけれども一々煩を避けて云はぬが、要するに、文章語、詩語共通のものはいゝが、いづれかに限られて居る語は能く注意して用

てないやうにせねばならぬ、詩語を文章に濫用し、文章語を詩語に用ゆることは折々見る所であるが、必ずその調和を破つて、詩としての諧調を害する、多く作る内には自ら其別あるを自得するであらう。

第七章　新體詩の解釋

(一)　解釋の難易

新體詩はその詩形が長いから、初めて之を學ぶには定めて困難であらうと思ふだらうが、實際はさうでない、詩形が長いだけに、一節に於て拙くとも、全體に就て其技倆を發揮することが出來るし、全體の着想は面白くなくとも、一節二節に嶄新な、奇警な、流麗な語句がある時は、爲に全體の拙惡を蔽ふて何かかうか讀まれるやうになる、つまり新體詩にはいくらも遁路があると云つてもいゝ、俳句や和歌はいかにも短詩形で、字數の制限があるので、初めてその道に入るは頗る困難を感ずる、第一に苦しむのは、其規則と詞である

が、新體詩には其語數に限りがあつても、七五調もあれば五七調もあり、或ひは七々調もあるし、其いづれを取るも隨意であるから、比較して見ると、新體詩の方が學び易く、入り易く、妙所に達し易いといはなければならぬ、その新體詩を學ぶの順序として、まづ何から手を着けたら好いかといふに、人の作つた新體詩を多く讀んで、その語句の解釋を自分で試むるが好い、俳句、和歌よりも解釋し易いのは新體詩の便なる點である、なぜかといふに俳句、和歌は語數が少いから、止むを得ず大きな思想を小さく縮めてある、これを引延ばして考へなければ意味が通じない、所が新體詩は、大思想であれば、大思想のまゝに、句數の斟酌もなしにいかに長くも作られるから、その作を讀んで行けば、自ら意味も通ずるのである、よしや一箇所二箇所の語に不明な點があるにしても、前後の詞つゞきから

考へて行けば、必ずわからないことはない、それで何しても了解が出來ないやうならば、讀む人の考へが到らないのではなくて、作者が既に未熟なのだ、まづ大抵ならば一讀して作意を酌むことの出來るものとなつて居る、さて解釋が易いとなれば、讀んで見ても面白く、面白味を感ずれば、多くの作を讀み味はう氣にもなるであらう、かくして多くの作を讀み、その作の解釋を試みて居る内には、自然に語句の連接、着想の如何も自得されて、自分も一つ作つて見やうといふ氣になるは必然である、けれども只無意味に作を讀むのならばいざ知らず、自分も作つて見やうかといふには、又解釋の仕方も違へねばならぬ、つまり慾を深くせねばならぬ、人の作を讀んでも自分の物にしやうといふ氣で讀む、まづ第一に注意して讀み解釋すべきはその字句である、かくて字句の妙を悟れば、字句の綴り方は自

ら出來るであらう。

（二）字句の解釋

一篇の新體詩を成す順序をいはゞ、まづ「字句の粹を拾ふ」が第一着手、その字句を拾へば次にはその字句を「いかなる場所に用ゆべきや」を考へるが第二着手、その場所を考へ得たれば次には、「その場所を造る」のが第三着手、その場所を造つたらば次にはその字句に「接續させる語」を更に擇ばなければならぬのが第四着手、接續の語を擇んだならばそこで初めて一節を成すのである、一節二節此の如くしてつひに一篇の作を成し得るのである、但しその字句には詩想が一貫して行かなければならぬのはいふまでもないが、こゝでは單に字句の上に就てのみいふのである、今余は諸君の心になつて一篇

の新體詩に就き、字句の解釋をなし、面白い文句があつたらそれを拾つて、他日の用に供すべく保存して置かう、試みに此に「花天月地」の中から羽衣氏作の「殘雪」の初節を拔き出して見る。

今はかぎりぞ山の端よ、
　今はかぎりぞ山の端よ、
去年の師足の降りごほり、
　木がらしさえしその日より、
汝があたゝけき胸の上に、
　われをかくしゝ山の端よ。

これは作者が「殘雪」の心になつて作つたものである、それを第一に考へねば一篇の意味は通じない、殘雪は春が來て解けかゝつた雪であるから、その雪の心になつて「今は限りぞ」と繰り返して山の端に

暇乞をするのである、雪が山へ暇乞をするのは面白いでは無いか、「今は限りぞ」は暇乞の詞として此に藏つて置かう、次に「去年の師足の降りごほり」といふのは、去年の十二月に降つたまゝ氷り付てしまつた雪である、雪と云つては、雪自身が物をいふやうに作つてあるのだから名をあらはしては面白くない、名を隱して只「降りごほり」と云つたのは面白い、作者の詞に豐かなのもこれでわかる、「降りごほり」の一語も何かの用に立つだらうからまづ拾つて置かう、次に「汝があたゝけき胸の上に、われを隱しゝ山の端よ」この意味は雪が汝と山の端を呼びかけて「お前さんの暖かい胸の上に今日まで私を隱してくれた、恩も馴染も深い山の端さんよ」と殘雪が山の端に對する感謝の辭である、山には何も胸はないが、これが前にも述べた所の「無生物」に靈性活動を與へた擬人法である、「山のあたゝかき

胸」といふのも新らしい面白い語であるから、これも藏(しまつ)つて置かう、サアこのやうに解釋してこゝに左の三つの語を得たのである。

今は限りぞ。
去年の師足の降りごほり。
汝が暖けき胸の上に。

この三語を何か他に轉じて活用したいものだ、次に起る問題は

「いかなる場所に用ゆべきや」

である、「今は限りぞ」は矢張別離の詞として用ひ、一つ「友達の東京へ遊學に上るのを送つてやらう」、と考へて場所を得たが、次には

「その場所を造る」

の必要が起つた、それでまづ試作に着手して見る、冒頭に「今を限りぞ」を置くも餘り眞似過ぎるから、二番目の句を初めに使ふことにし

て、まづ漸くこんなものが出來上つた。

去年の師走の、　降りごほり、
まだ消えざれば、　君が行く、
北山越は、　風寒く、
まづ初旅の、　苦や知らん。
あゝなつかしき、　山の端よ、
親しき友と、　二人して、
朝に夕に、　見しものを、
今は限りぞ、　山の端よ。
明日よりはわれ、　一人して、
淋しく向ふ、　山の端の、
汝があたゝけき、　胸の上に、

もゆる蕨も、　誰れと折る。

その巧拙は兎に角、彼の三句を得た爲に、丁度作らうと思ふて居た學友へ送別の新體詩が出來た、字句の解釋はこれだけの利益があるのを今知つたであらう、一節の字句を解釋したばかりでも、これだけの作が成つたのであるから一篇を通じて熟讀玩味したら、猶さら作が澤山出來るに相違ない、試みに次の一節を解釋して見やう（殘雪の二節）

今はかぎりぞ山がはよ、
今はかぎりぞ山がはよ、
ねられぬ冬のよる〳〵は
わが枕邊を過ぎがてに、
しらべをかしきねにたて〻、

我をなぐさめし山川よ。

「今は限りぞ山川よ」と前には山の端に暇乞したのだが次には山川に暇乞するのである、例の通り殘雪の心になつて作つてあるのだから、その殘雪の積つて居る邊を山川が流れて居るので、殘雪が「寢られぬ冬のよる〳〵は」殘雪の「枕邊を過ぎがてに」過ぎがては過ぎにくさうにの意で、それだけ山川が親しみの心を殘雪に寄せたのである、そして山川は、殘雪の枕元で、「しらべをかしき音にたて〻」水の音をさせ「我をなぐさめし山川よ」と慰めてくれた感謝の辭である、この語はいづれも分り好い語で、何かに應用するもやさしさうだ、「山川の水音が調べをなして夜の枕を慰むる」といふ意は、詩として面白い感じだ、その意味で作つて見たいが、今度はどういふ場所に作り入れたら好からうか、さう〳〵いつか西山温泉へ行つて二晩ばかり泊つた

時、丁度谷川が近く流れて、夜通し眠られなかつた、あの谷川は慰めてくれる所か夢の邪魔したのだから、其つもりで一つ作つて見やう。

さわがしき世を、
せめて一夜を、
睡らむものと、
あな心なの、
ねられぬ冬の、
枕邊近き、
音に響を、
もの思へとや、

のがれ來て、
安らけく、
思ひしに、
山川よ。
夜もすがら、
松風の、
合せつゝ、
夜たゞ鳴る。

一方は「しらべをかしき音に立てゝ」なぐさめてくれた谷川の音も、聞きやうでは騷がしく、作者を腹立たせる音となつた、他の作の意味を反對にして作るも詩作上の手段で、一つには摸倣を免るゝことがある。更に次の一節を抜て解釋を試みやう。

立ちかへりくる初春に、

「こちふく風もぬるみつゝ、
かすみそめたる谷の戸を、
かたりていづる鳥見れば、
わが世の中にあとたえて、
消えなん時は來りけり。
あはれ山の端汝かみねの、
松のみどりのきはみなく、
あはれ山川汝が底の、
さゞれの石のかぎりなく、

心したしき友どちに、
　千代もへんとは思へども。
春をへだてし杣川の、
　岩まのたるみしたゝりて、
みすゞがもとのわらびさへ、
　はや萌えいづるさま見れば、
わが世の中のあとたえて、
　きえなん時はきたりけり。

こは三節であるが、意味が聯絡して居るから、三節を一節と見るべきである、この一節からは「殘雪」の心を叙したもので、その語句の意味は「山中に春はかへりて東風吹く風はぬるみ霞み初めた谷の戸をかたり出づる鶯を見ればもはや自分が世の中に跡を絶へて消ゆる

季節となつた」「あゝ山の端よ、汝が峯に生えて居る松のやうに綠の色の變らぬ限りは我も消えず、あゝ山川よ、汝が水の底の砂のやうに數限りなく年を重ねてお前さん達と千代も生きて居たいと思ふがそれも最早かなはなくなつた」「春らしくもなかつた杣川の岩間の氷も解けしたゝつて小笹の根の蕨も萠え出すのを見ると自分の消えて行く時節が到來したのだ」といふ意である、今度は一句毎の語を拾つて、我が作の材料に供しやう、まづこの一節の中から左の數句を拾ひ出した。

こち吹く風（東から吹く風で即ち初春の風である）
ぬるみつゝ（寒かつた風がやゝ暖かくなつたのでこれも春に限る）
谷の戸（谷の出口で、即ち人家に近い所を意味する）
かたりて出づる鳥（名はないが谷の戸とあるので鶯といふことが

分る）

松のみどりのきはみなく（峯であるから松と云つて下のさゞれ石に對したのだ）

さゞれの石のかぎりなく（谷川故これもさゞれの石といふたのでかぎりなくの序詞と見るべし）

みすゞがもと（小笹などのことで詩語としては面白い）

以上七句を得た、これを一節に點綴して作を試むるも面白からう、無論この作と似寄つては興がないからまるで他方面に持て行かなければならぬ、いづれにしても「こち吹く風」だの「鶯」なぞの語がある

から季節は春にするより外は無い、さてこれだけの語を用ひて作意を立てやうとするのは困難だが、まづ試みに作つて見れば、

みすゞ生ふなる荒山も、　こち吹く風となりぬれば、

ぬるみ初めたる谷川の、　音のしらべも春の歌。

谷の戸深く聞ゆれば、　後れじものと片言に、

大御代祝ふ唱歌をば、　うたひて出づる鳥もあり。

歌ふ唱歌の一ふしは、　君は千代ませ八千代ませ、

松のみどりの色長く、　さゞれの石の數多く。

まづどうやら原作の意を離れた春の歌となつた、このやうにして作つて行けばおのづから詩の妙機に觸るゝことも出來るであらう。

（三）　作意の解釋

さて語句の解釋が出來て、四五篇の新體詩を作り試みたならば、次に作意の解釋をして見るが可い、新體詩は長詩形である、長詩形であるから、俳句、和歌以上の大詩想が籠つて居なくてはならぬ、大

詩想が無いならば、何も殊さらこの長い詩形の新體詩を作る必要が無い、俳句でも和歌でも事足りるわけだ、俳句、和歌には歌ひ切れないから新體詩によるのではないか、それならば一篇には一篇の必ず立派な作意があるに相違ない、今度はその作意を味はつて、自分が作を起す時の參考に供さなければならぬ、まづ左に前項に引いた羽衣氏作の殘雪後半を擧げるから、この作に就て作意を味はふて見るが宜しい、但し前半は前にあるから、それを通じて一讀するがいゝ。

な嘲りそあざけりそ、
　天ぎる風にきほひつゝ、
野山ともなくふりつみし、
　わがいにしへにひきかへて、
朝日てるまもまちがてに、
　もろくもきゆる身のはてを。
げにやあしたに生れでゝ、
　夕べをまたぬかげろふの、
われ人みなのいのちしも、
　いづれか無盡永劫の、
大海原とつもるべき、
　しづくの數にあらざらん。
生ひさきこもる野や山の、
　千草をわれは實になして、
すめ大神のかねてしも、
　よさし賜ひしつとめをば、
とげはてぬれば今はとて、

心やすくも消ゆるなり。

前半の解釋はしたから改めて云はぬが、こゝへ引いた後半の解釋をして見やう「かくあはれに消えて行く今の身を嘲けつてくれるな、冬の間は天に瀰(はびこ)る風の勢ひに乘つて野も山も埋め盡したその勢ひに引かへて今は朝日を待つばかりの果敢(はか)ない命である、といふて嘲けつてはくれるな、これには少し考へもあるのだ」「朝に生れて夕もまたずに死ぬかげろふといふ蟲のやうに人の命も決して終が無いものではない、そのはかなさは大海原とつもる山の雫の小さな數の一つ見たやうなものだ」「人はその短い壽命の間に何をして居るか知らぬけれど自分は生先長い野山の千草を保育して神樣の我に托した務(つとめ)をチャンと果して居たのだが、もはや其務もなし遂げたから心のこりなく消えて行くのである」といふ一篇の意である、それでこの作意が那

邊にあるかといふに、山の殘雪に生命を與へて、その心を述べさしたのが作意の一つ、又その雪の言葉をかりて人世は命運限りあるものであるから生きて居る間に何か事業をせねばならぬ、神は徒らに人を此世に生せしめたのでない、何か仕事をさせやうが爲に生れさしたのだといふ訓戒を以て結んだのが作意の二つである、このやうに解釋研究して、初めてこの作の面白さがわかるであらう、雪ははかなく消えてしまふやうに見えるが其間にも草木生育の任を以て居るといふ化學的の思想を巧みに詩化してこの一篇が成つたのである、新體詩の一篇を作るに當つては必ず想を構へ作意を立てなくてはならぬ、只漫然と詞を並べ句を並べてそれで新體詩が成つたと思ふのはまちがひだ、成程、それでも意味だけは通ずるかも知れないが、讀み終つて何の感じも人に與へることが出來なかつたならば、もはや

新體詩の効力を失つたものである、人の作の作意を考へてやがて他日、語句の修養が出來て自分が作る時立派な詩想を構へ作意を立て、前作を凌ぐものを作り出さうと心懸けねばならぬ、猶左に今一篇を擧げて、その作意を研究しやう。

妻こふ鹿（花天月地）　玉　茗

吹く秋風の身にしみて、
　月さえわたる足びきの、
山また山のその奥に、
　鹿こふ鹿のこゑぞする。
妻こふ鹿ぞ其妻を、
　たづね〳〵て來るらむ、
あはれ聞ゆるその聲の、

　いよ〳〵高くなりにけり。
折しもあれや凄じき、
　銃の音こそ聞えたれ、
山より山に谷間より、
　谷間々々にひゞきつゝ。
銃の響ともろ共に、
　妻こふ鹿のこゑぞ絶えぬ、
妻こふ鹿ぞあはれ誰が、
　擊ちやしにけん哀れ誰が。
やがて彼方の深山路を、
　月に越え行く山かつが、
獵の歌をば秋風に、

うたへる聲ぞ聞ゆなる。

この作意は、秋山月明かなる夜、妻戀ふ鹿の聲を聞てその哀れさを作つたものである、妻を戀ふ鹿の聲を月下に聽くので既に哀れは十分であるが、それではまだ哀れが足りない、そこで作者は想を構へて、これに銃の音を配した、その響が山より谷へ反響して、夜の山の寂寞を破つた光景は、前節の悲哀なるに對照して凄愴の思ひがある、其銃の音と共に今まで聞えた鹿の音はハタと止んで、月の光のみが寂しく照して居る、さては今の銃音であの鹿は撃たれたのであらうか、ア、無情な事をしたものだと眺めやる彼方の山路に獵の歌をうたひつゝ山がつが歸つて行くといふので無量の哀感を讀む人に與へる、これが只妻こふ鹿の聲を聞たばかりでは、これ程の感を讀む人に與へまい、そこが作者の手腕、作意の立て方の如何である。

（四）一篇の主眼

新體詩は長いものであるから、どうかすると散漫に流れるものだ、そこで一篇には一篇の主眼、一節には一節の主眼、一句には一句の主眼がなくてはならぬ、その主眼があつて初めて一篇を引締め、一節一句を整へることが出來るのである、まづこゝに探梅の題下に作らうとならば、一節には「梅を訪ふ」こゝろをいへば、二節には「梅を見付けた」喜びをいひ、三節には「その梅の枝振の形容、芳香のたぐひなき」をいひ、四節には「その梅の風雪に堪ゆるの節操を賞する」といふやうに作つて行くと、一節々々に主眼があり、一篇にまとまつて規律整然として聲調にゆるみがないが、それを只無意味に語句だけ並べると、一篇のまとまりは無論の事、一節のまとまりからして

付けることは出來ない、主眼を初めから立てゝ行かねば、つひに一篇の作を構成することは得られない、今茲に「花天月地」中の一篇に就て、一節の眼目、一篇の眼目の在る所を、仔細に說明しやう。

▲うしろ影

まづこの題を置く、一篇の眼目もこの「後影」にある、うしろ影とは何であらうか、茲に相戀の男女がある、男はある事情のために愛する戀人と別れて他鄉に去らなければならぬことになつた、晴れて別れを告ぐることは事情が許さないので、せめては其門邊によそながら暇を告げんと、夕月に身を忍ばして門邊に到ればその戀人が立つて居た、逢はうか、逢ふまいか、つひに思ひ切つて、その後影を見たばかりに引返したといふ切なる別離の情である、さてこれだけの詩想を構へたとすれば、何から歌ひ出してよいであらう、第一節には

「うしろ影」に緊切の關係がなくてはならぬのだ、作者は實際に其場合に立つたつもりになつて、思ひ餘る情の、まづ第一に口に出づべき事は何であらうと考へ、つひに左の冒頭の一節を得たのであらう。

せめて首途の一言を、
　告げ給ふとも誰かよに、
　咎めやするといつまでも、
　君は怨まむさりながら。

かゝる場合には、自分の云ひたいことは山々あるが、まづそれよりも、戀人が無斷に立去つた跡で何と思ふであらうと、其恨を思ひ、其辯解をしたいのが人情である、故に作者は其未來を想ふて、「自分が他鄉に去る首途に一言の相談もせず、暇乞もしなかつたのは無情だ、一言位は云ふたとて誰が咎めるものではないといつまでも君は恨む

だらう」これ冒頭の一節としては、動かすべからざる句である、そして一篇の眼目たる「うしろ影」を見たばかりで立歸る切なる情は、この一節に籠つて居る、作者はこの一節の末に「さりながら」の一語を加へて、戀人の恨は知りながら告げずに去る苦しき情をこれから語らんとするのである。

言はで心のいとまごひ、
　人目の關にはゞかりて、
それと知らさで行くわれの、
　つらさを後に覺れかし。

第一節にはまだ戀人の後での怨を思ひやつたから、第二節には、何事よりもそのいひわけをせねばなるまい、「口ではいはぬが心だけでは暇乞をした、人目にかゝるを憚かつて、現在後かげを見ながら物

もいはずに立去るつらさを跡で察してくれ」とこれも心の中での願ひである、さてかくまでの戀仲であるに、何故に男は思ひ切つて他鄕に去らうとするのであらうか、これは何人も起る疑問で、又その譯を聞きたく思ふだらう、作者は如才がない、次の第三節、第四節に於て其苦しき事情を物語つて居る。

障りぞ多き現世の、
　ためしにもれぬ君とわれ、
添はれぬなかを月に日に、
　したしむ末も恐ろしく。
戀ゆゑたつや旅衣、
　かくてしあれば我思ひ、
增るのみなる苦しさに、

知らぬ野山をひとり行く。

「故障の多い世の中の習慣に漏れざるは君とわれとの戀仲である、何せ事情の爲に添はれぬものと分つて居ながら此上猶親密になる時は末はどうなるだらう、一緒に添ひたい、添はれないとの二つが鬪かへば添はれないことが勝つ、さうなつた末はそんならば死でも添はうとなるは情愛の勢ひである、それが恐ろしさに自分は旅へ出ることにした、此まゝに居れば戀しさの思ひは增るばかりで苦しみは大きくなる、それよりも知らぬ野山を獨りで歩いた方が、いくら氣が安まるであらう」これで他鄕に去るの事情は明かになつた、戀人に別れを告げぬ理由も判然した、けれどもまだ一篇の眼目たる「うしろ影」を見るまでの切情が能くうつらぬ、次の一節を讀むに至つて、初めてやゝ眼目に近づき來るを覺えるであらう。

君が家居(いへる)にちかよれば、
　袂ひかるゝ心地して、
一目見たしとたゆたへる、
　心の底のかよわさよ。

「せめてよそながらとその戀人の家近くに來て見ると何となく袂ひかるゝ氣がして一目見たいといふ情はむら〳〵と胸を衝きいかにしても其處を立去りにくい、こんな氣の弱いことではならぬと叱つても仕方がない」一節以下はこの家に近付くまでに心に往來した苦しき情を語つて居たのである、この次から現在の地位を語るのである。

今は行かんと顧盼(かへり)る、
　背戸の垣根に打なびく、

柳のもとに立つは誰ぞ、
　君に似たりとおもほへど。
はやくれかゝる空の色、
　朧氣ながらみまもれば、
似たりと見しはまことにて、
　あゝ彼の君ぞ立てるなる。

「いつまで思ふても仕方がない、長居は未練のもとゝ歸らうとしてふと見ると戀しき人の家の垣根に沿ふた柳の下にその人らしい人影が見える、折から夕暮の色が深くなつたが能く見守ると似たと見たも道理全くその人が立て居たのであつた」思ひ思ふた其の人の影を見た作中の人は喜んだらうか悲しんだらうか、兎に角これで本題に入つたのである。

胸のみだれのすべなさに、
　我にもあらで踏出せば、
裙(すそ)は木の根にからまれて、
　ひやりとかゝる松の露。

「前後の分別もなく我を忘れて駈寄らうとすると裙は木の根にからまれて引留められた、同時に松の露は冷やかに頸元にこぼれかゝつた」情に熱したる身も松露の一雫に初めて心付たのである、家を見たばかりでも好いのに其人の影をも他(よそ)ながら見たのであるから滿足である、あゝ逢はんでも好かつたと言ふて胸を撫でたことであらう。

打忘れけりふたゝびは、
　君に逢はじと誓ひしを、
思ひかへせば君が名を、

一聲呼ぶもまゝならず。
斯くあらんとも知らざれば、
夕ぐれごとに二人して、
數へし星の二つ三つ、
仰ぐや君のうしろ影。

「この刹那に端なくも心の誓ひを思ひ出した、今のこの身は逢ふ所かゝしき人の名を呼ぶこともまゝならぬ身であるに、とは思ふてもなつかしさはなつかしさである、何をして居るかと透して見れば、自分がこのやうに苦悶して居るとも知らず、いつも二人して數へた星を見上げて、無心に立つて居るその人の後ろ影」見守る眼には必ず涙があつたらう、こゝでこの後ろ影は千斤の重みを生じた。

これぞ此世の見をさめに、
なりもやせんと思はれて、
我玉の緒もこのまゝに、
たえよとこそは祈りしか。
里のわらべの唄ひつれ、
こなたをさして來かゝるに、
心ならずもあゆみ行く、
繩手は長し松並木。

「あの後ろ影が此世の見納めになりはせぬかと思ふと俄かに心細くなつて一層此まゝ我が命も消えてしまへばよいと思つたが、里の童が唄に心付て進まぬ足を返して行く方は繩手道の松並木」、松露は涙と共に袂を濡らしたであらう、一篇の眼目たる「後ろ影」は作中の人物にも永遠に忘るゝ能はざるものであつたらうが、これを讀だ人に

も髣髴として幻の如く浮ぶのである、それが詩の妙味で、この眼目たるものを讀む人の胸に刻ませる位でなくては詩作とはいはれないのである。

(五)　照應伏線と波瀾曲折

照應伏線と波瀾曲折は、文章上のみの要件ではない、新體詩にも必ずあるべき筈のものである、これあるが爲に長篇の平板單調に陷るを避けて、讀む人を飽かしめぬのである、作家もし一篇の構想が成つたならば、豫めその構想を、幾節位にわくべきかを定め、一節にはこの伏線を置き、二節にはこの波瀾を用ひ、三節にはこの曲折法を用ひて意を一轉し、四節には初めて主題に入りて一節の伏線と照應するやうにすると、大凡は腹案して作にかゝる時は、一節毎に讀む人

の興味を喚び、いかに長篇でも、終まで讀み終らねば止まれぬやうになる、照應もなく伏線もなく、波瀾曲折のない新體詩は、いかに麗語妙句を列ねたりと雖も、殆ど卒讀するに堪へぬを覺ゆるであらう、今左に「花天月地」の一篇に依りて作詩法の要件を示すであらう。

花すみれ

なれし庵をあとにして、
心ぼそくも別れ行くを、
なれも泣かずや花菫。

この作は、人世を倦で他鄉に去る失意の人が、菫に對する感想をいはんとするものである、住み馴れた家を跡にして心細くも別れ行く我に對して汝菫も一掬同情の涙を惜しんでくれるなといふのであ

る、「汝も泣かずや」といふ一語は後段の伏線である。

破れし垣根に寄添ひて、
　語るも問ふも今日までぞ、
　さらばよ菫われ行かむ。

前節の意を反覆して、菫に名殘を告げるのである。

行かむと言ふを汝はしも、
　笑もてわれを留めつゝ、
　なほも思を惑はすか。

わが別れに泣いてくれぬかと迫つた菫は、却つて笑を以て我を留めるといふので、後節を起すべき一波瀾を作つたのである、而して前節の「泣かずや」の伏線はこの「笑」をいはん用意である。

生ひ出でし折も知らざらむ、

　果てゆく後も知らざらむ、
　知らねど清き色は持つ。

この一節は菫の境涯を羨やんだので、前節の意を一轉して菫の上に移るのである、これ即ち曲折法といふべく、暫らく前節の意と離れたやうに見えて、後節に至りて合するのである、其意は、どうして生え、どうして枯れるか知らぬ菫は清き色に咲て居るといふのである。

　おほし立てゝし人もなく、
　　おのづからなる春風に、
　　いつかは花もふくらみつ。
　ちりさへすえぬ面影の、
　　清きをめでる汝にのみ、
　　神はゑみをや敎へけむ。

前節に曲折せしめた意を受けて、同じく菫の上を叙したものである。意は、誰が育てるともなく自然の春風に咲出でゝ塵に汚れぬ清き姿を賞して神がお前にばかりその「笑」を敎へたのであらうといふのである、こゝに再び菫の笑を說て、前節に照應せしめてある。

汝がかざしのしら露も、
なみだとかはる袖の上、
人と生れしはかなさよ。

再び作者の境遇に復して、菫には簪とも思ふ白露も我には涙とかはつて袖を濡す、人世ははかないものであると嘆息の意を寓したので、これが第二の波瀾曲折である。

うつろひ易き世の中に、
つれなくゆくも留るも、

變らであるはいつ迄ぞ。
荒し庵に殘るとも、
ゆかりの色のあせゆくを、
あはれむひとはなかるらむ。

移り易い浮世の中である我は行き菫は留るがいつまでお互ひに變らないで居るものか、荒た庵に殘つたとてお前の色は褪め衰へて行くばかり誰が憐れむでくれるものかといふて、後節の伏線を亦一つ設けたのである。

悟らばやがて汝が身の、
假の榮えをふりすてゝ、
世をはなれずや花菫。

前節の意を受けて、世の中を悟つたならばいつまで假の榮華を樂し

まずに世を棄てゝしまつたらどうだと菫に勸めるのである。

立より見れば一しほに、
　花のゑまひのたほやかに、
　世を厭はしき色もなし。

一層一思ひに自分が世の暇を告げさせてやらうと立寄つて見れば菫は美しく笑みて世を厭はしい素振も見えない、菫の笑は一篇の主眼であるから何處まで行つてもその緣が離れない、而て失意厭世の人に對して「世を厭はしき色もなし」と云つて暗に照應せしめてある。

　世は我のみの世ならぬを、
　せまき心にあやまりて、
　手折らば仇とちりぬらむ。

世は自分ばかりの世でない、悲しむものもあれば樂しむものもある、

その樂しんで居る菫を自分と同じやうに思ひ誤まつて手折つたならば、我志は仇となつて菫は徒らに散てしまつたらうと悔悟したのである。

別れの笑を其まゝに、
　汝がため神は守るらむ、
　さらばよ菫幸くあれ。

別れる今のその笑を消させずに神は守るであらう、さらば菫、おまへばかりはいつまでも幸福であつてくれと云ひ、前に「ゆかりの色のあせ行くをあはれむ人はなかるらむ」に照應させて「神は守るらん」といふたのである、此の如く新體詩は伏線、照應、波瀾曲折を以て一篇を成してゐる、もしその用意がなかつたならば、徒らにダラ〳〵長いばかりで、決して人の快感を喚ぶことは出來まい、人の作に就

て熟讀玩味しなば、自ら其妙所に到達する時期があるであらう、その考へもなしに只語を列ね句を弄してばかり居るのでは、いつまで立つても上達の道はあるまい。

第八章　作法　作例

新體詩に限らず、和歌俳句でも、其妙に達するのは悟入にあるので、いくら教へたとても、それは只形式だけの事で、其神髄を傳へるといふことは出來るものではないが、一度は作法も心得て置かなければ、その神髄を探るの機會に到ることが困難である、今「天花月地」に分類したる諸名家の作例によりて、新體詩の法則、作法の一般を知らしめやう。

只こゝに注意して置きたいは、新體詩には、和歌、俳句とはちがふて、題詠といふことが無い、或る一定の題の下に作るといふことをしないから習熟する便宜に缺けて居る、されど題が無いからといふても、日常目に觸れ耳に聞く所のものが、もし詩的に感じたならば、

直ぐそれを詩題とし詩材となすべきで、必ずしも一定の題を求むる必要はあるまい、興が來つたならば、その材料が詩的である限りは直ちに作り試むべきである。

(一) 題の置き方

序であるから題の命方(つけ)をも注意して置かう、新體詩の題は、今もいふ通りで一定したのでないから皆作者が作成つて後に付けたものである、或ひは題が動くのも無いではないが、それは少しもかまはぬ、題があつて歌が出來たのではなく、作あつて後に題を下したのであるから、題名は少しは動いても、なるべく詩的な優美な詞を擇びたい、命題が面白いとその作も面白く見えるものだが、題が惡いとつひ佳作も心付かれずに終る不幸が無いともいはれぬ、殊には詩篇の

題であるから、文章の題のやうに實用的では困る、風韻を欲する、假へば文章ならば「東山に遊ぶの記」と云ふても事は足りるが新體詩は「東山に遊ぶの歌」では面白くない、まづ「花の東山」とか「月の東山」とか優美な詩的な題を付けるのである、題が幼稚であると作まで輕蔑されることがあるから命題は能く〳〵注意すべきである、時には前に引いた「後ろ影」のやうに、篇中の主要な詞を其まゝ持つてきても宜しい、さもなくば一節の歌ひ出しの一句を取つてもさしつかえない、例へば「門の谷川むかしにて」とあれば「むかしにて」と命題するのである、かゝる題の置き方は花天月地などの新體詩集を見て、自分で研究するに越したことはない。

(二) 詩題の分類

新體詩の詩材として取るべきものは、多々あらうけれど、これを大きく分類すると「四季の景物」「戀愛」「別離」「述懷」「贈答」「慶吊」「時事」「歴史」「詠物」などであらう、以上のものはいづれも抒情、叙景、叙事のいづれかに屬するもので、その他興に觸れて時々に作らるゝのも、大概はこの分類中の一類中に包容さるゝであらう。

（二）四季の景物

これは最も詩材採收の方面が廣い、而して四季の景物といふものは人を喜しめ悲しめ、さまゞの感興を起させるものであるから、他の戀愛にも別離にも述懷にも贈答にも慶吊にも歴史にも、一として四季の景物を加へぬことはない、されば俳句に季あるが如く、新體詩にも多くは四季の景物を加へて、情を移し感を寓するを例として居

る、純粋に景物ばかりを作つたのは少い、これはいふまでもなく叙景詩に屬するものである。

作例（春）

春の日

島崎藤村

誰かおもはむ鶯の、
若き命は春の夜の、
あゝよしさらば美酒（うまざけ）に、
梅のにほひにめぐりあふ。
からくれなゐの顔ばせに、
あゝよしさらば花影に、
涙もこほる冬の日に、
花にうつろふ夢の間に、
うたひあかさむ春の夜を。
春をおもへば人知れず、
流れてあつき涙かな、
うたひあかさむ春の夜を。

わが身一つも忘られて、　思ひわづらふ心だに、
春のすがたをとめくれば、　袂に匂ふ梅の花、
あゝよしさらば琴の音に、　うたひあかさむ春の夜を。

參考類語(新體詩指南)

新年。早春。春日。春の花。春の夜。暮春。

參考範例(花天月地)

遼東の春。殘雪。春の夜。春の夕暮。山の影。柳の糸。桃さゝ宿。山家。花すみれ。菫の床、花に嵐。はなれ駒。潮音。舞子の濱。離れ小島。

作　例(夏)

夏　　正岡子規

白き袋に腰を掛け、　赤き袋を引よせて、

口を開けば炎々と、　ほのほは空に迸る。
それを四方へあふぎつゝ、　ほゝゑむ顔を日に向けて、
あやし男神や雲の上。

都はなれし野のほとり、　車もよらぬ夕顔の、
籬(まがき)くづれて茅ぶきの、　家の奥まであらはなり。
今寢入りたる子の口に、　啣(ふく)む乳房(ちぶさ)を密(そ)と放し、
「今日や暑さの峠なる」。

竈(かまど)の下を吹きつけて、　煑え立つ鍋の蓋取れば、
粟の飯か雑炊(ざうすい)か、　ふつふつとして湯氣(ゆげ)上る。
「夫は遲し。子はいかに」、　待てば日暮るゝ門口に、

イみ居れば鈴の音。

馬牽く夫東より、
歸り來りぬ、もろともに。
すそして妾かひやらん。
くつろぎたまへ、蚊遣して」。

白き袋の紐解けば、
涼しき風の颯と吹く。
櫛笥取り出で端居して、
人の歌ふは我が上ぞ。」

參考類語(新體詩指南)

德利提げし子南より、
「いざ風呂にめせ。荷卸して、
酒冷やかに飯あつし。

二布ばかりの裸身に、
湯あみしはてし妻は今、
我子に向ひ「極樂と

夏の夕。夏の花。夏の月。郭公。晩夏。

參考範例(花天月地)

この夕。夏の夜。綠の蔭。新綠。氷賣。里の夕立。蛙の聲。蛙。
廣瀨川。

作例(秋)

秋　正岡子規

たけなる黑髮肩にかけ、
凄き女神の只一人、
足も危く倚り居つゝ、
桐の一葉ぞ落ちにける。

皆釣り上げ眉ちゞめ、
絕壁の上の岩角に、
きつと睨めば人間の、

西の小窓にもたれたる、

人は假寢の夢覺めて、

物に驚く風情あり。
膚にしみてやゝ寒み、
仰げばいよ〳〵秋高し。

きのふにかはる夕風の、
蹶然として身を起し、

「丈夫天下の心ざし、
いつをか待たむ。思ひ見れば、
我が心はや決したり。
しばしの別離何かあらむ。

今にして若し成らざれば、
長くも我は眠りしよ。
泣くとも止らじ、さな泣きそ。

女神が白き裳に袖に、
八重に纏ひし蔦かつら、
血の息ほつと生臭く、

這ひ上りつゝ、岩ながら、
細きもろ手にたぐりよせ、
吹くよと見れば、上葉下葉、

もみぢせぬ葉もなかりけり。
鶏を裂き酒を盛る、
剣を取つて舞ひ出でぬ。
見渡す限り錦なり。
功名汝を待つ久し。」

別れのむしろ賑はしく、
「時は野山の秋たけて、
行けよ、ますらを。世の中の、

参考類語（新體詩指南）
秋の夜。秋の月。秋の花。秋興。暮秋。
参考範例（花天月地）
秋の夜。わが星。秋風の歌。秋の蝶。妻とふ鹿。朝顔。むしの音。
ひとつ家。

作　例（冬）（新體詩に冬の純叙景なければ長歌を擧ぐ）

難波にありてよみける　下河邊長流

有馬山　山風はやく　時雨きて　冬にもなれば
木の葉ちる　生田の松の　下草も　枯れゆく江と
しなが鳥　井那の笹原　置く霜の　さやぐ夜毎に
こやの池も　氷閉ぢ添ひ　水鳥の　床さへ荒れて
しをあしの　影も疎らに　なるまゝに　なにはのこやも
隱れなく　海士のたく火は　よな〳〵に　焚きまされども
鹽馴の　衣うすれて　浦風は　曉さむみ
いぬかごの　枕をとふと　ゆきかへり　みつの濱邊に
なく千鳥　おなじ干潟に　朝霜を　踏む足田鶴の
聲たてゝ　雲井にみゆる　伊駒山　梢の雪は
あら玉の　春に知られず　さく花の　林と見えて
わたのへや　大江の岸の　浦つたひ　遙かにつゞく

住吉の　あはれ松原　霞ふる　音も一つに
よせかへる　波より遠の　淡路島　あはれ今年も
わたつみの　入日と共に　くれむとすらむ

參考類語(新體詩指南)

冬の朝。冬の月。木枯。雪。歲暮。

參考範例(花天月地)

朝風。さよ時雨。冬の夜。年の暮。

(四)　戀　愛

戀愛の詩は、直情を吐露しなくてはならぬ、苟も輕浮の態があつては、人に美を感ぜしめずして厭な感じを抱かしむるものである、その詞は艶麗なるを擇ぶべきも、其情は飽まで醇美なるを要する、純

潔なるを要する。

作例

湖畔吟　田山花袋

そよげる蘆よ心あらば、
　つれなき君の此處にしも、
來ませし時にかたれかし。
　幾年前の月の夜に、
人氣とたえしこの山の、
　沼のほとりをたゞひとり、
泣きつゝゆきし人ありと。

知るや戀人、あしびきの、
　みやまの奥の奥ふかく。
人氣とだえしみづ海に、
　船漕ぎ出でゝたゞひとり、
かくもけはしく泣くわれを。

雪をのせたる山の影、
　旗にも似たる雲の影、
皆來りてぞうつるなる、
　夕のどけきみづ海に。

その美くしき影の中に。
　あはれうき世のわづらひに、

やつれ果てたるわが影も、
　うつりてあるなりたえぐ〳〵に。

橋のたもとに垣間見し、
　少女を今日もまた見むと、
わが訪ひくれど影なくて、
　むかひはる〴〵打わたす、
そのみづ海の水の上に、
　うつるはあはれ星一つ。

まだ風寒きみ山路を、
　越えて行くなる少女子の、

かざしに匂ふ岩つゝじ、
　いづくの里に折りて來し。

麓の里の春の日に、
　早くも咲ける花の色を、
見捨てがたくて少女子は、
　折りてかざして來しならむ。

あはれやさしき少女子を、
　遠くもわれは見おくりぬ。
み山のおくにふけて行く、
　春の使の心地して。

參考類語（新體詩指南）

戀情。愛情。

參考範例（花天月地）

戀二篇。森陰。園の清水。月の夜。夕月夜。鷄。我さほ姫の君に。

（五）別離

別離は人との別れに際して、胸に浮んだ情を歌ふのである、その別るゝ人に依りて感慨はさまゞであらう。或ひは戀人と別るゝもあるべく、親友と別れるもあるべく、親兄弟と別れるもあらう、要するに僞りなき眞情をうつさなければ人を動かすことは出來ぬ、その別れに臨みての情は、假へば戀人であれば、過にし逢瀨の樂しかりし事、再會のいつなるかを悲しむ事など情は最も多樣であらう、親友

ならば、功成名遂げて再會するの期あるべきを誓ふなど、別離の悲しみの中に、多少男子的の壯快なことなどあるべし、親兄弟の別離も其悲しみは作者の地位によりて差はあるが、いづれにしても深厚な感情が溢れて居なければいかぬ。

作例

さらば君

かたみに歌は通はせど、
稀にぞきますわが友を、
もてなす術も夏の日の、
うらみは氷消えやすき。

むらさき薄き筑波嶺の、

醉茗

常陸の空に世をわぶる、
友のふみなど語りゆく、
二人のうへを星の飛ぶ。

君いますまに夏はてゝ、
たびの衣をこゝろなく、
吹きやかへさむ浦風の、
秋てふ事を知りもせば。

君ゆきぬれば明日は又、
もとの心にしづむらむ、
世を忘れたるこの雲も、

はやふりかはる天の川。

送るともなく送られて、
しばし休らふ片廂(びさし)、
つきぬ思を句によせて、
たゞさりげなく別れたり。

『早鮓の
なれぬうらみを
別れけり』

『君も亦
七夕の夜に
句を作れ』

參考類語(新體詩指南)

別。送別。留別。羈旅。

參考範例(花天月地)

別れ路。僧元恭を送る。うしろ影。

(六) 述懷

述懷は男子慷慨の氣を歌に寄せたものである。或ひは世を罵り、俗を嘲り、政治を論じ、縱横の議論、奔放虹の如き氣焰を吐くも宜し、詩としては議論に亘るものは好ましくないが、其詩意より出でたるものならば差支えない、無味乾燥に陷り易いものだからなるべく語を詩的にすべき心がけがありたい、何事にも感激し易い、人間の至情、或ひは時に慨世の詩もなかるべからざるものであらう。

作例　(作例として適切なるものあらざれば假に左の一篇を引く)

山中の石

與謝野鐵幹

「ふるく頑たる山の石、
　敲かば我も聲あげむ。
この聲よしや人間の、
　少女の絃にのこすとも、
達人耳をかたむけて、
　きかばなか〳〵中空の、
星の都にありときく、
　一百五絃の玉の琴、
嵐の神の音づれて、
　一時に裂くの慨あらむ。

何を求めてさう〳〵と、
　水は小川を流れゆく。
誰を待ち得て諧々と、
　鳥は林を鳴きめぐる。
世に同調の知己なくば、
　起き出で〻將た何かせむ。
我は寢ながら萬年の、
　風雨に夢も破らせず、
神の加護ある無始の世の、
　破格奇想の詩一篇、
苔のみどりの薄絹に、
　包みて山に獨り臥す」。
世の詩に飽かぬ友よいざ、
　行て太古の石に問へ。
かれは雲ゐる深山より、
　曾て此語を寄せにけり。

(七) 贈答

人に贈り人に答ふるに、俗人は物品を以てするが、詩人は詩人らしきものなかるべからず、即ち一篇の詩篇に意を籠めて、或ひは謝し、或は敎え、消費的の物品よりも更に大なる益を他に與へんとの抱負がありたいものだ。

作例　(適例見當らざれば假に左を擧ぐ)

我が佐保姫の君に（こは適例にあらねど贈答の體を得たるもの故しばらく引例とせり）

松　男

君が心の深き江に、
一葉の船をうけしより、
袖ぬれぬ日も我はなし。

夢もよほせし朝しほは、
いづれのひまに歸りけん、
さゞ波さむき舟の中に、
我たゞ一人のこるなり。

まちわたりつる甲斐もなく、

立てるや何の春がすみ、
ほのかに見えし行末の、
影をもうたてかくすらむ。

限ある世にいつまでか、
やるせなき戀を泣かんよ、
あはれかたみの花一枝、
春のしるしにながしてよ、
行きてかへらぬ水の上。

せめてはそれを思ひ出に、
うき身をすみし川上の、

はにふの小屋に立歸り、
我をあはれむはらからに、
其花見せてなぐさまむ、
君が涙はあらずとも。

(八) 慶吊

人の婚儀、生産、出世を慶び、人の死などを吊するのである、又皇室の嘉儀を祝する作をも慶の中に籠めても宜しからうし、哀傷も吊の中に加へて見るも可ならむ。

作例

紀元節(慶)　逸名子

今朝橿原の大宮に、
大御代定め御祝ひの、
神代ながらの春の風、
二千五百六十四、
梅の節會の萬斯年。
のどけき空の影涵し、
霞に浮ぶ春の國。

島崎藤村

其階に吹きそしめし、
春べを玆に數ふれば、
御代の限りと咲つゞく、
四澤に滿つる春の水、
萬嶽雪はとけそめて、

作例

母を葬る歌(吊)

君が墓塲に、
黄菊あり、
きみが墓塲に、
榊あり。

草葉に露は、
　しげくして、
おもからずやは、
　其の墓標(しるし)。

いつかねむりを、
　さめいでゝ、
いつかへりこむ、
　わが母よ。

あからひく子も、
　ますらをも、

みなちりひぢと、
　なるものを。

あゝさめたまふ、
　ことなかれ、
あゝかへりくる、
　ことなかれ。

春は花さき、
　花ちりて、
きみが墓塲に、
　かゝるとも。

夏はみだるゝ、
　螢火の、
きみがはかばに、
　飛べるとも。

遠きねむりの、
　ゆめまくら、
おそるゝなかれ、
　わが母よ。

參考類語(新體詩指南)

哀傷。

參考範例(花天月地)

中野逍遙をおもひて。母の遺骸にむかひて。墓上の花、墓。

(九)　時事

時事とは、その時々に起る世上の出來事である、その範圍は極めて廣いが、詩題となるべからざるものは棄てるがよい、戰爭も可なり、天災地妖も可なり、兎に角世上の出來事で詩興に觸れたものならば何でもかまはない、拾ふて詩の材料とすべきである、但しこれもいひやうによりては無味乾燥となり易いものであるから、なるべく詩化するにつとめ、次に引ける海嘯の一篇の如く、詩的の構想、聯想をつくり出して詩となすべきである。

海嘯

千代のちぎりを、うちこめて、

かたみにかはす、杯の、
數さへみたび、かさなりて、
　ねよとの鐘も、ひゞくなり。

わが手にすがれ、わぎも子よ、
　いづも八重垣、妻ごめに、
作れる室に、いでたちて、
　語りあかさむ、夜もすがら。

うたげの筵、あとにして、
　今は人目の、關もなし、
蘭燈くらき、むろのうちは、
　われら二人の、世界にて。

いざやわきも子、聞きねかし、
　高ねの花と、よそに見て、
ながゝし夜を、泣きあかし、
　戀ひわびにしも、夢なりや。

身をも家をも、うちすてゝ、
　戀ひわたりたる、心根の、
切なるほどは、やせはてし、
　このからだにも、思ひ出よ。

なれがやさしき、顔見れば、
　日ごろ年ごろ、忍びたる、
胸のうらみも、わすられて、
　心もそらに、なりにけり。

日もてりまさる、心地して、
　なれは我身の、いのちなり、
をじかの角の、つかの間も、
　あはで空しく、すぐべしや。

わがもつ土地は、山に田に、
　見渡すかぎり、はてもなく、

五棟つぐく、倉のうちに、
　黄金も米も、溢るなり。

錦の衣、あやの帶、
　好まむまゝに、身につけよ、
桂も焚かむ、汝がために、
　玉もかしがむ、なが爲に。

今日の心を、こゝろにて、
　千代も榮えむ、もろ共に、
世に蓬萊の、山あらば、
　死なぬ藥も、求めまし。

言葉に盡きぬ、わが心、
　たぎる涙や、かたるらむ、
いざ〳〵わぎも、とく入りね、
　契をこめむ、新室に。

いざと誘ふ、時しもあれ、
　天地も動く、ひぐきして、
山より高き、沖つ浪、
　たけり狂ひて、寄せにけり。

手に手をとりて、はしれども、
　人より早き、浪の足、
陸地は海と、なりにけり。

つなみの去りし、ありそべに、
　月はさびしく、殘りけり、
あはれ榮えし、家里は、
　たゞ荒れはてし、野原にて。

嵐に咽ぶ、一もとの、
　松の古根を、枕にて、
はれの衣を、うち着たる、
　かばねぞ二つ、殘りける。

かたみに抱き、抱かれて、
　よそめもいとゝ、睦まじく、
おもてに笑は、ふくめども、
　この世の息は、絶えてけり。

（十）歴史

歴史は、詩題としてはこれ程面白いものはない、國家の治亂興亡の跡を見て、これを詩的に觀察し、其中の人物には情の涙を灑ぎ、その出來事に感興を喚び、その感慨詩想を直ちに作に上すならばいかなる佳篇も得られるであらう、源平盛衰記、太平記などの軍記類は、詩材の無盡藏とも稱すべく、試みにその一節を拔てこれに調節を加

個の人物を叙するもよし、歴史上の人物の身となりて當時の情をうつすも面白い、いづれも作者の隨意であるが、あり餘る材料であるから、その撰擇には意を用ゆるが宜しい、左に逸名子の「船上山」といふがあるから、これに原作の「太平記」中の一節を拔て、對照せしめて見やう。作は餘り面白くないが、只このやうにして新體詩にすればよいといふ參考までに過ぎない。

作例

船上合戰の事　　太平記七卷

去程に同二十九日、隱岐判官、佐々木彈正左衞門尉、其勢三千騎にて、南北より推し寄せたり。此船上と申すは、北は大山繼ぎ峙ち、三方は地僻（ちさがり）に、峰にかゝれる白雲腰を廻れり。俄に拵へたる城な

れば、未堀の一所も堀らず、塀の一重をも塗らず、唯所々に大木少々伐り倒して、逆木(さかもぎ)にひき、屋舍の甍(いらか)を破りて、かひ楯にかけるばかりなり。寄手三千餘騎、坂中まで攻め上りて、城中をきつと見上げたれば、松柏生ひ茂りていと深き木陰に、勢の多少は知らねども、家々の旗四五百流、雲に翻り日に映じて見えたり。さては早近國の勢どもの、悉く馳せ參りたりけり。此勢ばかりにては、攻め難しとや思ひけん、寄手皆心に危みて進み得ず。城中の勢共は、敵に勢の分際を見えじと、木陰にぬはれ伏して、時々射手を出し、遠矢を射させて日を暮す。かゝる所に一方の寄手なりける、佐々木彈正左衞門尉、遙の麓にひかへて居たりけるが、何方より射るとも知らぬ流矢に、右の眼を射ぬかれて、矢庭に伏して

佐渡前司は、八百餘騎にて搦手へ向ひたりけるが、俄に旗を卷き甲を脱ざて降參す。隱岐判官は、猶かやうの事をも知らず、搦手の勢は、定めて今は攻め近きぬらんと心得て、一の木戸口に支えて、新手を入れかへいれかへ、時移るまでぞ攻めたりける。日既に西山に隱れなんとしける時、俄に一天かき曇り、風吹き雨降る事車軸の如く、雷の鳴ること山を崩すが如し。寄手是におぢわなゝきて、此處彼處の木陰に立ち寄りて、群り居たる所に、名和又太郎長年、舍弟太郎左衞門尉長重、小次郎長生が、射手を左右に進めて散々に射させ、敵の楯の端のゆるぐ所を、得たりやかしこしと拔きつれて打ちてかゝる、大手の寄手千餘騎、谷底へ皆まくり落されて、己が太刀長刀に貫かれて、命を殞す者其數を知らず。(下略)

同　十二卷

還都の條

（上略）六月十七日志貴を御立ありて、八幡に七日御逗留ありて、同二十三日御入洛あり。其行列行裝天下壯觀を盡くせり。先づ一番には赤松入道圓心、千餘騎にて前陣を仕る。二番には殿法印良忠、七百餘騎にて打つ。三番には四條少將隆資、五百餘騎、四番には中院中將定平、八百餘騎にて打ける。其の次に花やかに鎧ひたる兵五百人すぐりて、帶刀にて二行に歩ませらる。其次に宮は赤地の錦の鎧直垂に、緋緋の鎧の裾金物に、牡丹の陰に獅子の戯むれて前後左右に追合せたるを、草摺長に召させられ、兵庫鎖の丸鞘の太刀に、虎の皮の尻鞘かけたるを、太刀懸の半に結びてさげ白篦に節陰ばかり少し塗りて、鵠の羽を以て矧ぎたる征矢の、三十六指したるを筈高に負ひ成し、二所籐の弓の、銀のつく打ちたるを十文字に拳りて、白瓦毛なる馬の、尾髪飽まで足りて太く逞しきに沃懸地の鞍置きて、厚總の鞦の、古今染め出たる如くなるを、芝打長に懸けなし、侍十二人に双口をさせ、千鳥足を踏ませて、小路を狹しと歩ませたり（中略）珍らしかりし壯觀なり。

同　十四卷

長年歸洛の事

那和伯耆守長年は、勢多を堅めて居たりけるが、山崎の陣破れて、主上早東坂本へ落させ給ひぬと聞えければ、是より直に坂本へ馳せ參ずることは安けれども、今一度内裏へ馳せ參じて、直に落ち行かんずることは、後難あるべしとて、其勢三百餘騎にて、十日の暮程に又京都へぞ歸りける、今日は惡日とて、將軍未都へは入り給はざりけれども、四國、西國の兵ども、數萬騎打ち入りて、京白河に充滿たれば、帆懸船の笠符を見て、こゝに擁し彼處に遮

りて、打ち留めんとしけれども、長年かけ散しては通り、打ち破りては圍を出で、十七度まで戰ひけるに、三百餘騎の勢次第々々に討れて、百騎ばかりになりにけり。されども長年遂に討れざれば內裏の置石の邊にて、馬より下り冑を脫き、南庭に跪く。主上東坂本へ臨幸成りて、數尅の事なれば、四門悉く閉ぢて、宮殿正に寂寞たり。然れば早甲乙人ども亂れ入りけりと覺えて、百官禮儀を調せし、紫宸殿の上には、賢聖の障子引き破られて、雲臺の畫圖、此處彼處に亂れたり。侍人晨粧を飾りし弘徽殿の前には、翠翡の御簾半より絕えて、微月の銀鈎虛しく懸れり。長年つくづくと是を見て、さしも勇める夷心にも、あはれの心やまさりけん、泪を兩眼に餘して、鎧の袖をぞぬらしける。良旦くやすらひ居たりけるが、敵の鬨の聲ま近く聞えければ、陽明門の前に馬に打ち

乘りて、北白川を東へ今路越にかゝりて、東坂本ぞ參りける。

名和長年　逸名子

▲船上山

隱岐の大海の磯つゞき、
雲井に高き船上山、
敵か味方か千萬の、
軍は麓に押し寄せぬ。
峰はいかにとながむれば、
人はそれともしら雲の、
絕間になびく旗の影、
いとさびしくも見えにけり。
嵐にわかに吹きすさび、
たちまち起る角の聲、
今ぞ戰はじまりぬ、
弓弦のひゞき喊の聲。
たゞ一筋に君のため、
つくす心は張弓の、
いづれゆるまぬ名和勢も、
入りてはかはる千萬の、
寄手に今は防ぎかね、
かしこに斃れこゝに死に、

殘り少なに打なされ、
かくと見るより長年は、
駒陣頭に押すゝめ、
あやにかしこき大君の、
寄せ賜ひにし其日より、
死すべき時は今なるぞ、
いさめ勵ます號令に、
鋭氣はさきにいやまして、
はげしき刄風に敵しかね、
時に遙けき隱岐の海の、
鯨の潮の雲と散り、
嵐につれて銀箭を、
砦危うくなりにけり。
帝の御上大事ぞと、
進め兵士諸共に。
賤の男われに大御身を、
命は君に捧げたり。
われ諸共に死ぬやとて、
引かんとねがふ者もなし。
又引かへす名和勢が、
やゝ麓へと引きにけり。
潮路の末に氣吹くなる、
海かきくれて風きほふ。
亂しかけたる雨疾く、

おもて向くべきやうもなき、
鏃そろへて射かくれば、
箭を防がむと楯とれば、
神の助ぞ進め人、
近めつゞけと長年の、
進むしりへに引そひて
進め後るな諸共と、
さゝえかねたる敵勢は、
踏さえんにも力なく、
松の嵐に吹き暮れて、
空さりげなく夕月は、
修羅の巷も忽ちに、
寄手の上に名和勢の、
雨を避くれば箭に中り、
坂路ぬめりて伏し轉ぶ。
敵を打たんは今なるぞ、
兄弟三人跡先に、
いかでか主に劣るべき、
勇む名和勢坂落し。
なだれかゝりて逃足の、
伏重なりて谷に落つ。
今までふりしむら雨の、
峯の梢にかゝるなり。
靜けき夜とかはりはて、

高峰のあたり名和勢が、
歸る雁がねこゑ過ぎて、
山の黑木の假宮に、

▲還　都

風さわがしき葦原や、
世は時の間に移りゆき、
いつまでかゝる荒山に、
いざ都へと大君の、
承はりて長年は、
御供申して船上の、
去にし隱岐への行幸には、
雲卿雲と從へば、

擧ぐる凱歌山震ふ。
春の夜ふかき船上の、
君の御夢やいかならむ。

一夜の夢のこゝちして、
古にかへる政事。
うき日をかくて送るらむ、
畏き御諚ありければ、
守護の兵の勢揃へ、
み山をこゝに下りけり。
かへて美々しき其行列、
戰士の槍は林なり。

御前に進むさゝらがた、
なびき伏さぶる草もなく、
名和長年は大君の、
昨日は伯の田舍武士、
げに御劍のまたもとの、
祝ひ喜ぶ民の聲、
元弘二年六月に、
都上りの其間に、
全く帝の御手に歸し、
波はしづかに四方の海、
山松が枝にぞ響くなる、
かゝるめでたき世となるも、

大和錦の御旗には、
御供に着くや數萬騎。
大御劍を取持ちて、
鳳輦近くさもらひぬ。
鞘に納まる大御代を、
御道筋に滿々て、
秋より先の都入り。
北條亡び大御代は、
光かゞやく高御座。
萬歳の聲大內の、
矢叫びの聲むかしにて。
「長年汝が功績なり」

いかで忘れむ寄る邊さへ、
汝が高き功績を、
其功にはあたらねど、
伯嘗因幡の兩國を、

▲雲井の庭

枝をならさぬ時つ風、
いと長閑けくも治りし、
西の海邊に立つ波の、
昨日の忠臣尊氏は、
彼がこもれる鎌倉に、
皇軍向ひ攻めたれど、
勝にきほひて賊軍は、

なみの荒磯に留めたる、
汝が深き誠心を、
下し賜ふと御勅あり、
恩賞にこそ引かれたれ。

つちくれやぶらぬ梨花の雨、
御代も今はた亂れ來ぬ。
風ぎぬと聞きし程もなく、
一朝にして賊子たり。
二たびならず三度まで、
敗れかへるをいかにせむ。
都をさして攻め上る、

其勢凡そ十萬騎、
かくてありなば徒らに、
いでや攻口固めむと、
この時ひとり長年は、
山崎口の早や破れ、
帝も今は坂本に、
聞きて長年思ふやう、
いでや帝の御許に、
されどもくやし今一たび、
誇る蹄にかけられし、
ひとり瀨田をば跡にして、
見るさへにくや都には、

旌旗野山を蔽ふと聞く。
都は賊に落されむ、
其とり〳〵に出向ふ。
瀨田の渡を固めしが、
賊は都に亂れ入る。
移りましぬと人傳に、
此の守も誰が爲ぞ。
參向はむと思ひしが、
都にかへり賊軍の、
大宮所拜せんと、
都へこそはかへしけれ。
二引兩の旗ばかり、

靡き合ひたる大路小路、
圍む賊軍切り拔けて、
かへり見すれば三百の、
春とはいへどまだ寒く、
その大庭に跪き、
半破れし御簾には、
淋しくかゝる御前に、
晝寂なる御殿には、
ちり亂れたる花紅葉、
花に胡蝶にたわれてし、
嵐の花の跡追ひて、
思へばかしこ大君は、

何處も賊の滿々ぬ。
やゝ大宮に近付つ、
手兵百騎と討たれけり。
人影もなき紫寢殿、
見上ぐる眼には涙あり。
銀鈎秋の夕月と、
また褰帳の女御なく、
羅綾錦繡吹く風に、
殿衛の沓の音もなし。
大宮人の夢迷ふ、
胡蝶の夢の跡追ひて。
はこやの山の峯の雲。

はなれたまひて一度は、
寢ざめさびしく聞しけむ、
また立ちかへりし大宮の、
比叡の行宮宵々の、
流石に猛き武士も、
思はず落す一雫、

▲大宮の街

秋の朝風靜かにて、
勇みに勇む數萬騎、
坂本の宮打立ちて、
東寺の甕見えねども、
世の浮沈それはたゞ、

隱岐の島根にさすらひつ、
荒磯崎の浪の音、
安き御坐も束の間に、
御夢や寒き杉嵐。
君の御上をしのびては、
鎧の袖に露ぞちる。

なびく錦の旗の手に、
今日七月の朝まだき。
朝敵攻の發足、
都近くぞなりにける。
この戰にわかれむと、

思へば駒も勇まれて、
命をかけてたゝかはむ、
深くも思ふ長年が、
この勇ましき陣押しを、
後方に打たす長年を、
げにこの人や世の中に、
君のめぐみの露もはた、
二木一草はや枯れて、
いつまでかくて殘るらむ、
かくと聞くより長年は、
ひとり苦しき胸の中、
思へば悲し大君に、

今を最後の一戰、
君への忠の終りぞと、
心の中を誰が知る。
見むと集へる京童、
見るより一人のいひけるは、
三木一草とはやされて、
深かりつるに昨日今日、
ひとりつれなきはゝき木は、
命惜しさか笑止さよ。
悲憤の涙胸を衝き、
誰か知りえむはかり得む。
忠實なる人は前後に、

一人と死につ二人死に、
一死はいとゞ安けれど、
生きては人の言の葉に、
忠はかはらぬ二筋の、
死なむと今は決したり、
思ひ定めて長年は、
御暇申すと胸の中、
かくとも知るや乘る駒は、
はや東寺にも迫りけり、
打合ふ太刀は吹風に、
飛びかふ征矢は風渡る、
衆寡敵せず皇軍は、

殘るはわれの外にたれ。
死に逸らむは忠ならず、
かゝる我身をいかにせむ。
道に迷へる長年は、
誹りは武夫の恥辱ぞと。
君坐す方を伏し拜み、
坂本あたり霧深し。
足搔を早め行く程に、
戰もはた始まりぬ。
なびく秋野の穗芒か、
難波大江にちる芦か。
早や色めきて足並も、

しどろもどろに亂れつゝ、
瀬に打こゆる浪の如、
長蛇と卷かれ皇軍は、
こゝに百騎に足らざれど、
死を決めたる名和勢は、
はやりに逸る敵勢を、
押せども突けど引かばこそ、
數度の戰に長年は、
箭を拔き棄てむ力なく、
劍に縋り坂本の、
大地に伏して拜したる、

十字の架

六條河原に颯と引きぬ。
敵勢跡に追ひ縋り、
敵の圍に落ちにけり。
主兵卒も諸共に、
早瀬を斷ちし巖なり。
只一所に遮りて、
居ながらにして死なんとす。
簑の如くに折りかけし、
卯の花縅血汐なり。
君ます方を見まもりて、
其身はつひに起たざりき。

逸名子

長篠の役敵軍重圍、落城且夕ならんとす。茲に城將奥平九八郎信昌の臣に鳥居勝商といふ者あり。主に曰ていふ、あはれ此城此まゝに過さんには數日も保たざるべし、臣請ふ、一死を以て急を家康公に告げむ。信昌危みて許さず、勝商猶請ふて止まざるに、さらばとて許しける。勝商大に喜び其夜闇に紛れ濠を潛り、圍を脱して直ち急を家康に告ぐ。家康その義勇を嘆賞して且いふやう、汝還つてこれを九八郎に告げよ、吾不日織田家の勢を合せて救はむ程に、それまでは粉骨の防守をなし候へ。勝商命を含んで城に忍び還らんとせしが、誤て寄手武田の手に捕はる。勝頼、勝商に温言を以て諭して曰く、汝明日城に向ひて救來らずと云はんには、城將意を屈して城即日に陷るべし、然らばわれ汝が一命を助けて恩賞をも引かむといふ。勝商心に謀

る事ありて容易に之を諾す。翌朝、勝頼、勝商を十字架に縛し、これを陣頭に押立て、槍を擬していはんことを促す、勝商從容として城に向つて云ひけるは、城將に申さむ、援兵は程なく寄すべきに、其間を保ち候へ。言訖るや數槍身に集まりて終に長篠の露と消えしも、義烈勇烈、千古の美談として稱へざるなし、

「吾君の命にかはる玉の緒の何か惜しまむ大丈夫の道」とは勝商が辭世の歌と世に傳へぬ。

構へたる　槍の穂尖は　右、左、
瀧つ瀨の　岩間に結ぶ　垂氷と寒し。
凄まじき　あはれ其槍　閃めかば、
吹く風を　待つ間を草の　露命。

見ゆる彼の　城の中には　吾君の、
復命　いつかとわれを　待ちまさむ。

見ゆる彼の　城の中には　吾妻の、
歸らむは　いつかとわれを　待ち明さむ。

あはれその　君も吾妻も　知らざらむ、
われはかく　縛らるゝ　十字の架。

突けやその　槍の穂尖に　我胸を。
槍の穂尖に　忠義の血汐に　染めくれむ。

君ゆゑは　いかで惜しまむ　この命、
一言に　よし玉の緒は　絶ゆるとも。

いはんいざ　命にかへて
死なんいざ　いふ一言を　一言を、
名殘にて。

(十一) 詠物

詠物は禽獸蟲類などの、詩味ある動作を寫生するか、或ひは作者が彼の心となつて、面白く叙するのである、その動作は最も細微にわたる方が面白く、其心は人間を離れて興味を求めなければならぬ。又草木を詠ずるのもこれと同じく、非情の草木を人間と同じやうに詠ずるか、或ひは其山谷に生ひたる形狀を描くのも宜しい、これも

新體詩の好材料であらう。

作例

小蟲　　正岡子規

胡蝶

一もと菫、物思ふ、
ゆふべ胡蝶の、舞ひ落ちぬ。
しきりに蝶は、さゝやきつ、
うれしげに花は、うなづきつ。
假の契りに、紫の、
露やこぼして、別れけん、
再び蝶は、歸り來ず、
菫は終に、萎みけり。

虻

風無き罌粟の、花ざかり、
虻の羽ぶれに、うつくしき、
一ひら散れば、三ひら四ひら、
皆さそはれて、こぼれけり。
赤きがちりぬ。そを見てか、
白きもちりぬ。虻は猶、
花や殘ると、うたてくも、
赤き坊主に、羽を鳴らす。

蜻蛉

ほがらかに照る、秋の日に、
赤き衣を、輝かせ、

蜻蛉群れ飛ぶ。其下に、
晴れて筑波の、山低し。
頭を西に、つらねつゝ、
共につい行き、つい戻る、
穂なみそろへて、田の上に、
其影落ちて、いそがはし。

蜂

冬の日受くる、椽の先、
老媼と共に、背を曝す、
少猫の耳を、蜂一つ、
錆びたる針もて、刺さんとす。
チョマものうげに、手を擧げて、

ちよいと拂へば、飛び上り、
檐の掛菜を、めぐりつゝ、
何尋ぬるか、小半日。

(十二)　漢詩意譯

漢詩を新體詩に譯するも亦一の手段で、興味のある事である、漢詩は之を訓讀すれば、直ちにわが國詩となるやうなのもあるから、これを意譯すれば猶さら詩材となすに足る、けれどもなるべく直譯を避け、純然たる國詩化さなければ作家の手腕とはいはれない、今左に漢詩の原作と譯した作とを對照して擧げやう。

作例

代悲白頭翁

洛陽城東桃李花。飛來飛去落誰家。洛陽女兒惜顏色。行逢落花長歎息。今年花落顏色改。明年花開復誰在。已見松柏摧爲薪。更聞桑田變海成。古人無復洛城東。今人還對落花風。年々歲々花相似。歲々年々人不同。寄言全盛紅顏子。應憐半死白頭翁。此翁白頭眞可憐。伊昔紅顏美少年。公子王孫芳樹下。清歌妙舞落花前。光錄池臺開錦繡。將軍樓閣畫神仙。一朝臥病無相識。三春行樂在誰邊。宛轉蛾眉能幾時、須臾鶴髮亂如絲。但看古來歌舞地。惟有黃昏鳥雀悲。

譯詩　　逸名子

都大路の春の暮、　　何處も今は時過て、
ちるか櫻に桃の花。　　やがて我身もかゝらむと、
げにや盛も春一時、

都處女やかこつらむ。
春過ぎてちる花の如、
今年はくれて又さらに、
空しく咲て匂ふのみ、
思へばはかな桑の畠、
思へばはかな松檜杉、
賤が手斧に摧かれれつ、
はかなきこの世は春の花、
ことわり知らぬ世の人は、
花は昔の花ながら、
思へさかりの人の子よ、
知らぬ白髪の此翁を。

人も幾度面かへて、
春はくれども花ばかり、
去年見し人はあらずして。
末は海となるときく。
常磐の色も頼まれで、
つひの烟はまぬかれず。
青葉落葉とかはりゆく、
なにの思ひに花や見る。
人は昔の人ならず。
あはれとも見よ明日をさへ、

雪を頂く此かしら、
これも昔は春花の、
花の木蔭に思ふどち。
歌ひつ舞ひつ戯れて、
かこちし春も夢心。
雲井の庭に參出でゝ、
貴き館の宴に侍し、
さは時めきし身なりしを、
訪ぶ人もなく老はてゝ、
かゝる我身に引かへて、
今は誰が身にうつりけむ。
春の柳の深みどり、

波を寄せたる此面わ、
匂ふが如き身なりしを。
宴開きて酌かはし、
春の長日を短しと、
歌召されたる時もあり、
管絃奏せし時もあり。
一度病に臥してより、
榮華も姿も昔なり。
昔の春の樂しみは、
黑き其髪束の間に、

かはり果てたる白髪は、
昔遊びし花の山、
夕日かゝりて烏なく。

鏡とり見む力なし。
今日來て見れば枯枝に、

作法詳說 **新體詩獨習** 終

明治三十八年九月三日印刷
明治三十八年九月六日發行

新體詩獨習
正價二十錢

著作者　鹿島櫻巷
發行者　岩崎鐵次郎　東京市神田區鍋町廿一番地
印刷者　齋藤章達　東京市日本橋區兜町二番地
印刷所　東京印刷株式會社　東京市日本橋區兜町二番地

著作權所有

發兌　東京市神田區鍋町廿一番地（電話本局三〇六七番）　大學館

名家文庫第一編

美文散文

白砂青松

（第五版）

價廿五錢
郵税四錢

白砂青松は名家文庫の第一編として現はれたるもの、書中藏る所は現代の文豪が各潛心の筆を馳せ、駢辭麗句、風雲を鑄め、月露を畫さ、一讀人を寒殺す底の妙文を蒐めたるもの、天下好讀の士、一書を繙て清絶凉絶、坐して白砂青松に遊ぶの快を取り併て文の妙趣を味ひ以て練文の資に供せよ

掲載目次

◎十年前の夏……正岡子規
◎富士行者……久保青琴
◎雲のいろ〳〵……幸田露伴
◎豆相遊記……東海散士
◎村居漫筆……島崎藤村
◎旅のつゞれ……破蓮
◎湖心亭の記……大野酒竹
◎磯うつ涙……佐々木信綱
◎讀書漫言……荘虐生
◎七部集……高濱虚子
◎玄武朱雀……泉鏡花
◎試驗……瓜抱
◎歌反古……島崎正子
◎瀧……岡藤村規
◎風流安語……尾崎紅葉
◎學海漫筆……依田學海
◎孔子と馬琴……大町桂月
◎夕の里……土井晚翠
◎曼珠砂華……高濱虚子
◎片影錄……
◎奇童子……
◎賢博札記……
◎金剛杵……
◎夏期の追懷……
◎菊女想夫の文……
◎詩歌に於ける音意の諧調……
◎あはれ〳〵此月……
◎獨眼龍の歌……
◎夜半……大和田建樹
◎御前……戸川殘花
◎うつし世……武島羽衣
◎斷片十種……江見水蔭
◎客作雜興……田岡嶺雲
◎哀歌°海棠……土井晚翠
◎利根の夜船……赤松國祐
◎妙義山の月……三日謝野鐵幹
◎鏡影……與謝野臨風
◎湘南雜興……笹川久保青琴
◎松島遊記……武島羽衣

俳句入門叢書

第一編　内藤鳴雪翁著（四版）
俳句獨習
價二十錢　郵税四錢

第二編　佐藤紅綠君著（三版）
蕪村俳句評釋
價二十錢　郵税四錢

第三編　河東碧梧桐君著（再版）
其角俳句評釋
價二十錢　郵税四錢

第四編　内藤鳴雪翁著（再版）
芭蕉俳句評釋
價二十錢　郵税四錢

第五編　内藤鳴雪翁著（再版）
芭蕉俳句評釋
秋冬
價二十錢　郵税四錢

第六編　寒川鼠骨君著（再版）
俳句新歲事記
價二十錢　郵税四錢

第七編　内藤鳴雪翁著、寒川鼠骨君共選
大家摸範俳句集
春夏
價二十錢　郵税四錢

第八編　内藤鳴雪翁、寒川鼠骨君著
俳句案内
初學自修
價二十錢　郵税四錢

第九編　内藤鳴雪翁著
七部集俳句評釋
價二十錢　郵税四錢

第十編　内藤鳴雪翁、寒川鼠骨君共選
大家摸範俳句集
秋冬
價二十錢　郵税四錢

佐々木信綱先生閲　千勝義重先生著

類題 萬葉短歌全集

價廿五錢
郵税六錢

◎萬葉集は萬葉假名と稱する眞字を以て書かれたれば閲讀に不便を感ず依て本書は普通文字に改めて研究の便を圖る。
◎本書は四季、戀、雜の三篇に分ち更にこれを諸部類に分類せり。

佐々木信綱先生閲　千勝義重先生著

三十六歌仙集評釋

價十五錢
郵税四錢

本書は柿本人麿、山部赤人、在原業平、小野小町を始め、三十六歌仙集の和歌を評釋し、評論せり、且つ小傳を記して歌仙の和歌人物を知らしむ。
歌道の眞髓を極めむとするもの宜しく三十六家が、異色異彩を窺知し且萬葉、古今、新古今の精華を學ぶべきなり。

文學博士木村正辭先生題　千勝義重先生著

類題 萬葉集評釋

價四十錢
郵税八錢

萬葉集の和歌は難解にして國文を學ぶものゝ常に難する處なり本書は眞字を普通の假名に改めて四季に類題を分ちて平易に釋義を試み且つ評言を加へたる珍書なりとす。

佐々木信綱先生閲　千勝義重先生著（再版）

西行法師 山家集評釋

價二十錢
郵税四錢

目次を摘記すれば法師の略傳、俗にありし時の法師、脱俗後の逸事、當時の歌壇に於ける西行、西行自身の歌に對しての考、西行の詞藻、西行法師の自讃歌、閑寂の趣清逸の氣に富める歌、幽韵にして高致なる歌、纖麗巧緻なる歌どりぐゝにをかしきもの、戀の歌の面白きもの等を擧げ且つ歌調を評し語句を釋き、春夏、秋冬、戀、無常、神祇、釋教、祝賀、贈答悉く正確なる原本に依て、最も平易に全集を評解す。

柳川春葉先生序
三津木青畑、井口紫濤君編

泰西文學 美辭資料

價十八錢
郵税四錢

本書は從來の陳腐舊套なる死句を蒐めたるものと其趣を異にし西洋文學の清新なる譯文より成り且つ片々たる辭句を排して一題に就いて長文章を載せ文章體と言文一致體とを併用し自然描寫を主とせるなど凡て現時の潮流に適切なるを期せり

天象　太陽・月・星・雲・霧・雨・嵐・空・光・朝・夕・暮・夜　地理　山・山徑・溪・布・泉・牧場・海・海岸・港灣・波・涙・島・湖・沼・澤・河・谷・森・林・瀑・川・街・巷・田舍・庭園・城址・自然　四季　春・春の朝・春の夕・春の朝・夏の夜・炎暑・夏の野・雷・雨・秋・秋の夜・秋雨・秋の野・冬・冬の朝・冬の夜・冬の野・雪　人物　男・女・少年・少女・美人・老人・老婆・小兒・夫婦・親子・朋友・農夫・僧・詩人・天使　人事　天國・地獄・死・葬式・墳墓・幽靈・宴遊・祭禮・唱歌・音樂・別離・寂寞・歡樂・團欒・幸福・懷古・追憶・煩悶・沈淪・戀・夢　動植物　花・果・樹・木・鳥・類旅行・航海・獵・戰爭　家屋財貨　家・部屋・爐・店・舗・廢屋・馬・車・船・舶・精舍・鐘

文學士栗田木岡君序
渡邊幾石君著　（六版）

美文資料 美辭麗句

價十五錢
郵税四錢

◎季候○春の部　新年、春色、春風、梅、楊柳、鶯、春雨、胡蝶、櫻、花卉、春季雜○夏の部　梅雨、暑、涼、夕立、蟬、螢、夏衣、蓮、夏季雜○秋の部　秋色、秋風、秋草、露、霧、虫聲、秋夕、月、雁、菊、秋雨、紅葉、秋季雜○冬の部　雪、霜、落葉、歲暮、冬季雜◎地理　山、川、海、海岸、湖、瀑布、都市、村落、神社、佛閣、寂寞、庭園、遊廓、墓地、景色雜◎天文　朝天、暮色、夜景、天◎人品　風采、美男、美女、遊女、少女、兒童、老人、僧侶、乞食◎品性　德行、溫厚、信義、公正、勤儉、謙讓、清廉、果斷、勇猛、剛毅、慷慨、熱心、勉强、忍耐、機智、傲慢、怠惰、粗暴、詔諛、輕薄、卑屈、闇愚、貪慾、詐欺◎人情　和樂、歡喜、忠節、慈愛、孝行、友誼、憤怒、悲歎、恐怖、戀愛、羈旅、別離、無常◎人事　富貴、貧賤、歌舞、音曲、議論、飲酒、戰爭、災害、結婚、困難、疾病、落魄、死亡

石橋玄潮君編　（五版）

韻文 花天月地

價二十錢
郵税四錢

春、夏、秋、冬、戀、離別、雜の部に分ち當代有名の詩人島崎藤村、大町桂月、河井醉茗、佐々木信綱、土居晩翠、鹽井雨江、武島羽衣、與謝野鐵幹、太田玉茗、田山花袋、大野洒竹、正岡子規、大和田建樹、國木田獨歩、宮崎湖處子、馬場孤蝶等の傑作を集む、七十有餘題避暑消閑の好伴侶實に文士必携の書。

諸方流水君序　石橋玄潮君著　（四版）

新體詩指南

價廿五錢
郵税四錢

新體詩の性質を明にし其作法を詳説し且つ其模範たる作例と組織す可き資料たる類語を蒐集す例題は春夏秋冬戀別離雜の部に分ち大家の傑作を載す又英詩作法を掲ぐ。

鹿島櫻巷先生編

名家 模範新體詩集

價二十錢
郵税四錢

本書は現代卓越せる新體詩家、島崎藤村、蒲原有明、薄田泣菫、平木白星、馬場孤蝶、大町桂月、武島羽衣、與謝野鐵幹等十數氏が春夏、秋、冬、戀、雜等十餘題に渉る傑作其他殆んど百有餘編を蒐めたるもの、新體詩研究者座右の寶典なり。

大町桂月先生序　鹿島櫻巷先生著

作法詳解 新體詩獨習

價二十錢
郵税四錢

本書は著者多年研鑽の結果用意周到なる筆を以て明治の國詩たる新體詩の性質を明にし其作法に就いて諸多の參考書に依り或は文章を新體詩となす手段、叙景、抒情、叙事、各體に就いての作法凡て傑出せる作例を擧げてこれを指示し用語辭句を網羅せる等親切叮嚀の獨習書なり。